北方圏

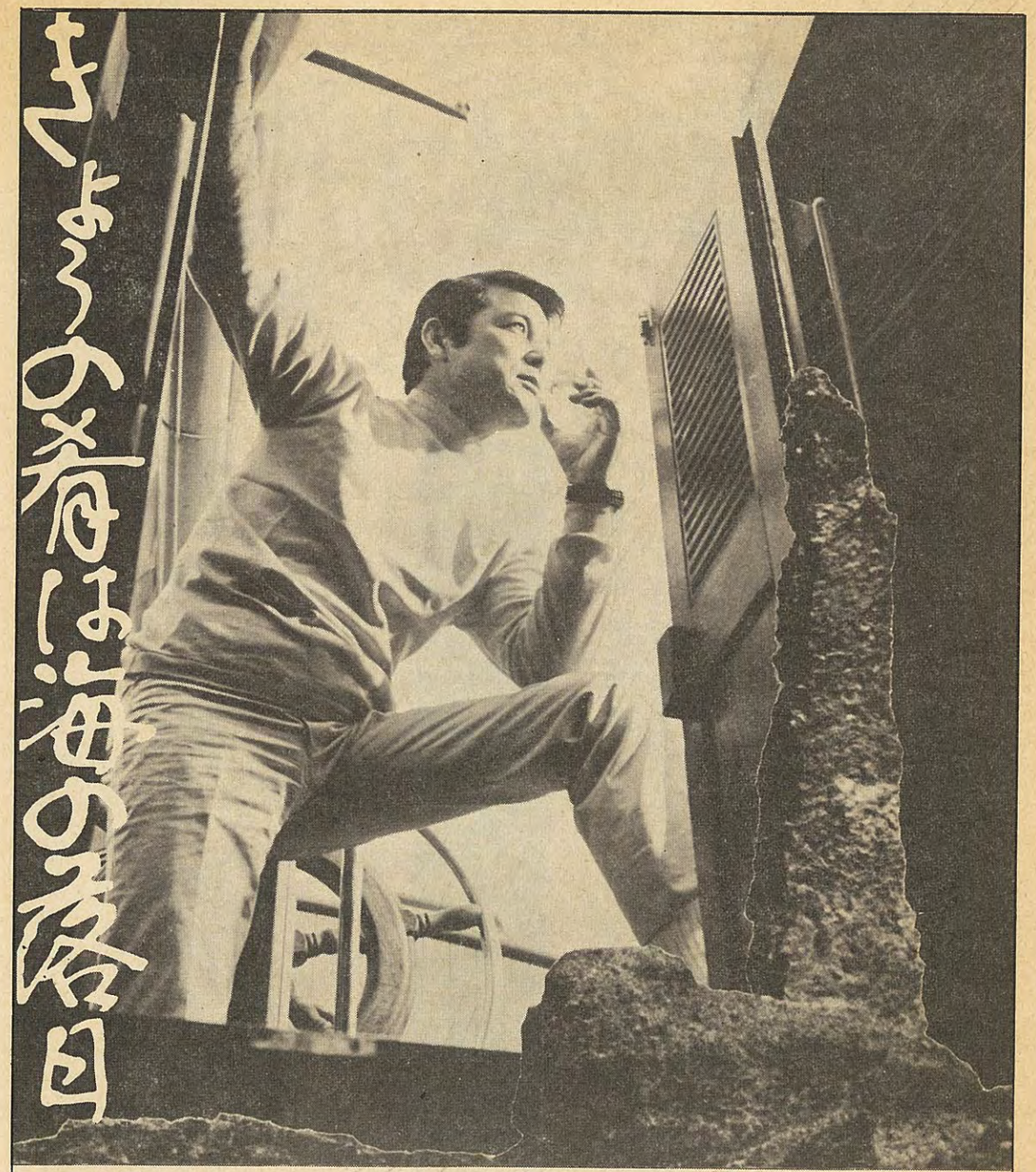
創刊号

1972



北方圏に燃える日本列島
豊かな国 カナダ、アラスカ
“さび”のきいたソ連マンガ

社団法人 北方圏調査会



"生粋"
それは雄大で
みずみずしくて
すがすがしい
大地の
香りがする
自然の恵みに
ちがいない

酒にして その生粋なるもの
北の生粋 北の誉
北の誉酒造株式会社

自然と開発との調和――― それが私たちの願いです。



ひと握りの砂や一枚の木の葉に、かわいい創造の世界をつくりながら、無心に生きている子供たち。ふと、何かをしてやらなければならない衝動にかられませんか。わたくしたち、電力をつくっている立場も同じです。住み良い生活環境…自然と、ゆたかなエネルギー…このふたつの美しい調和を、共有の財産として次の世代へプレゼントしなければなりません。
みなさまがたのあたたかいご協力のもとに、一歩ずつ前進したいと考えています。

北海道電力



北方圏

1972年創刊号

目次

北方圏へのグロバリゼーション　堂垣内尚弘……7

カラーグラビア
豊かな国カナダ・アラスカ……50

資源開発と、自然保護の調整　佐藤健二……63
アラスカ、カナダの文化的考察　田上義也……64

北方圏へ燃える日本列島……8

日ソ貿易はすぐ二倍になる……26
――シベリア極東経済調査のシンポジウムから――

日ソ経済関係の展望　スパンダリヤン……20
世界のエネルギー戦争……35
市民の船と北方圏　矢野康……71
サハリンを訪れて　浜森辰雄……67



ずいひつ

白夜に思う　熊本　恵見……80
北方のならず者　中野美代子……80
ソ連のハマナス　荒沢勝太郎……81
北方圏人類学のすすめ　埴原　和郎……82
モーラ小紀行　堀　淳……83
文学史の削減　佐藤　喜……84
島の狐　竹井　清……85
みやげ品と観光ガイド　木内　綾……86

企業と人

試練に立つ北海道電力……74

日本語の中のロシア語　清水威久……98

さびの効いたソ連のまんが……46

トンネルを抜けた北海道経済　座談会……38

ヤクーチャの人たち　山本敏……94

シベリアのマンモス　岡田安彦……87

始まった民族語の授業（エスキモーの場合）　宮岡伯人……102

ガルフという会社……43
広州交易会参加の道内企業……72
橋渡しに大活躍（朝鮮総連道本部）……73
旅行も北方圏ブーム……66
QアンドA……105
編集後記……106

《本誌記事の無断転載を禁じます》

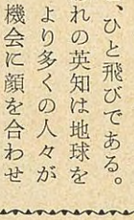
われわれは過去にも戻れないし、また現在にありながら未来へ行くこともできない。

だが私はこんどのカナダ・アラスカへの旅で、それをやってのけた。魔法のタネは時差であり、同一の時刻を複数の地点で経験することができた。私がこんなことを書くのも実は〝発想の転換〟ということを言いたかったからである。

われわれは今まで狭い地域のなかで物事を考えすぎていなかっただろうか。北海道を、北海道のなかでのみ捉らえ、いろんな議論をしていなかっただろうか。北海道を日本のなかの北海道として、さらに世界のなかの北海道として捉らえれば、その思考もおのずから異なったものがあろう。

田中首相の日本列島改造論は、北海道を日本のなかで捕捉し、日本列島を国際的視野に立って眺めているところに意義があるように思える。こんにち国際化時代といわれながらも、国々はそれぞれの国境や、政治体制や社会構造の違いという壁をもっている。それはインターナショナルに考えているからであり、さらに次元を高めて、グローバルに眺めれば、そこには国境も政治社会体制の相違もなく、ただ太陽系の惑星としてのみ存在するのである。

北方圏へのグロバリゼーション



北方圏調査会長（北海道知事）
堂垣内尚弘

そうした発想の転換こそ私が主唱してきた〝北方圏構想〟であり〝北方圏へのグロバリゼーション〟といった志向に、その基調がある。

われわれは北緯四五度以北の亜寒帯および寒帯を北方圏と考えているが、この地域は地球上の陸地総面積の三分の一弱を占めながらも、世界の総人口の僅か一〇％を超えるにすぎない。

そこには雄大な自然と、豊富な資源がまだほとんど手をつけない状態のままで残されている。かけがえのない地球のなかの、かけがえのない自然と資源をもつこの北方圏を、どのように保存し、開発するかということは、われわれのゼネレーションに神が与えた試錬かもしれない。

私はこんどカナダ・アラスカに旅して、各地で両国の要路の方々と、親しく懇談する機会をもったが、そのたびに「われわれは南と北とのつきあいではなく、同じ気候風土、同じ環境のなかにある友人である。肌の色や言葉こそちがうが、いわば仲間同士なのである。こんどの視察団はエコノミック・アニマル的なものでなく、友好親善を第一義としたミッションである。仲間同士が手を暖め、膝を接しあいながら、抱えているいろんな問題について話しあい、教えたり、学んだりしながら、お互いに発展しようではありませんか」と言ってきた。

そういう視察団の性格や態度は、カナダでもアラスカでも非常に好評で、また歓迎もされた。知事クラスの交流や文化団体、スポーツの交歓試合など、いくつかの点で合意に達したのも、そうしたわれわれの態度が認識されたためである。われわれは自然保護と開発の調整という共通の命題を抱えており、そこにおのずから親近感も湧いたのだと思う。

私は昨年モスクワへも行ってきたが、結論は今回と近似性をもっている。

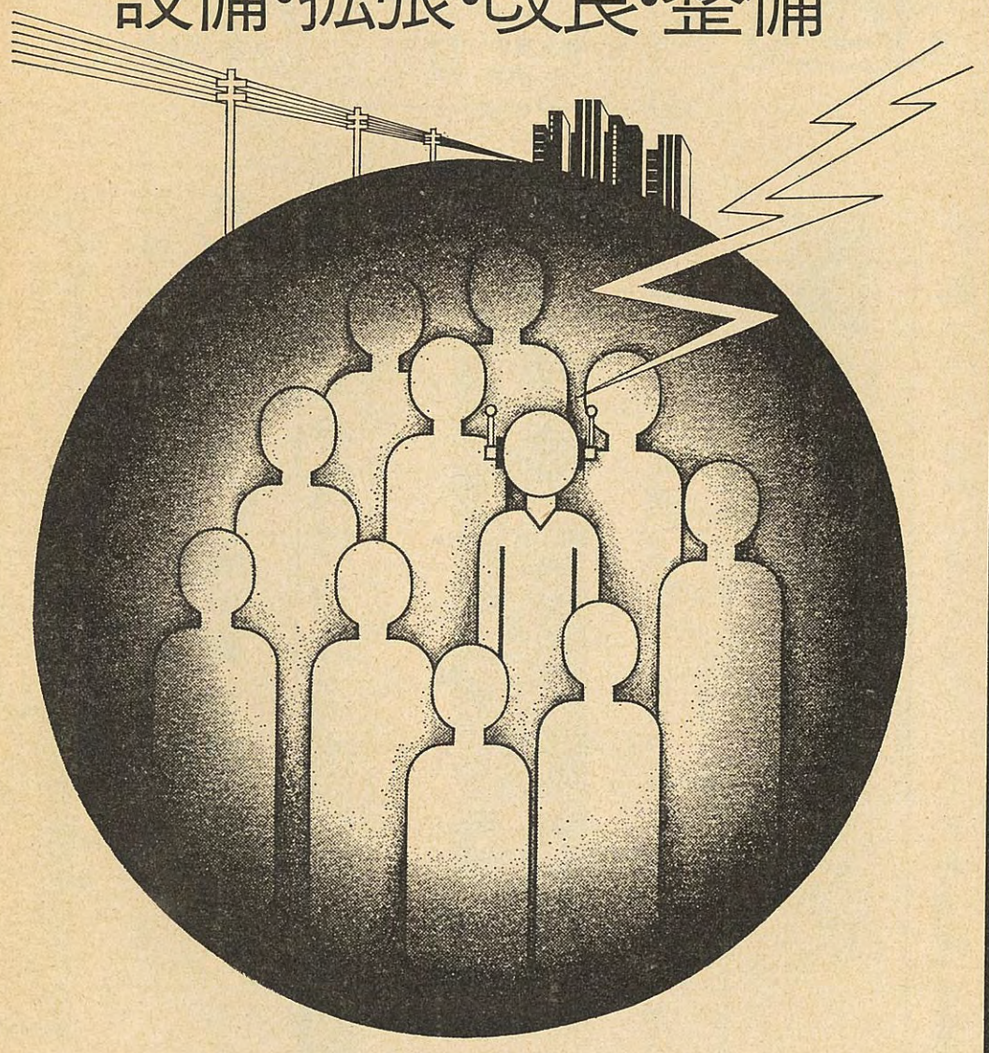
北方圏の先進都市は社会資本の充実や住宅、生活環境が整っており、北海道はやや立ちおくれの感があるが、そうした先達の貴重な経験を学び、反映し、生かしていく条件は、日本列島のなかで北海道だけに残されているのではなかろうか―。

今まで遠い国と思っていたカナダ・アラスカは、特急で札幌から釧路に行く時間にひとしい。シベリア・極東など、ひと飛びである。

われわれの英知は地球を狭くし、より多くの人々がより多い機会に顔を合わせる場をつくった。そこから隣人愛が育くまれ、学術や文化、スポーツの交換が生まれ、やがては産業、経済の交流への道が開け、相互繁栄へと繋がることであろう。

北方圏調査会でこんど〝クォータリーマガジン・北方圏〟を創刊するのも、そうした〝北方圏へのグロバリゼーション〟がネライなのである。

世界をつなぐ電波のかけ橋
電信／電話
設備・拡張・改良・整備



北海道通信電設株式会社
〈本社〉小樽市住吉町3番15号☎代23―3181

日本列島

開発待つ石油、天然ガス

「無公害の資源」が魅力



西シベリアを走るスルゲート＝ニジネワルトフスキー石油パイプライン

北方圏へ燃える

〝豊かな自然とあふれる資源―〟北方圏への関心が、こんにちほど高まった時代はないだろう。カナダ、アラスカそしてすぐお隣りのシベリア。日中の国交正常化で中国の東北地方（旧満州）も仲間にはいり、朝鮮民主主義人民共和国やモンゴルとともに北方圏の重要な翼を担う日も近いだろう。特にシベリアの石油、天然ガス開発の大プロジェクトには日本のビッグビジネスが争って食い込もうとしており〝シベリアへ、シベリアへ、草木もなびく〟ほど。「シベリアを制するものは日本財界を制する」といったムードすら生まれてきた。財界だけでない。北は北海道から南は鳥取まで北方圏の魅力にひかれた日本列島は、いまや熱い炎のように燃えあがろうとしている。

「共同開発」急速に具体化

ある鉄鋼会社のトップで有名財界人の一人である某氏は、自分の会社がヤクートの天然ガス開発、プロジェクトに参加していないことを聞き、政界を動かし、この計画を推進している安西浩東京瓦斯会長（日ソ経済委天然ガス懇談会委員長）に連日直訴し、ついにその参加を認めさせたという涙ぐましい話もある。

ビッグビジネスをここまで必死にさせているシベリア開発とは、何なのだろうか。米、中、ソ、日の国際政治の多極化の時代のなかにあって、シベリア開発も国際政治の荒海のなかでもまれかねない。財界が考えるほど、それほど甘いバラ色のプロジェクトになるかどうか、疑問は多い。

三つの開発プロジェクトのうち、現在一番進行しているのは、西シベリアのチュメニ油田開発プロジェクトだ。同計画は、石油埋蔵量四百億トといわれる同油田から、極東のナホトカまで延々六千七百㌔のシベリア横断パイプラインを敷き、日本が年間三千―五千万㌧の原油を輸入しようというもの。総投資額は、二十五億㌦だが、日本の負担分はイルクーツク～ナホトカ間のパイプライン、ポンプ設備など計十億㌦。パイプラインだけで一六八万㌧、一、四二六億円、不況カルテルを結んでいる鉄鋼各社が必死になるのも無理はない。二月に来日したグロムイコ・ソ連外相と日本政府との日ソ定期協議で同外相は「チュメニ油田開発計画を実現させるため日本政府が、積極的に介入してほしい」と要請、これに対し田中通産相（当時）は「同油田の開発は日本の原油輸入先の多様化に役立つ。その上チュメニ油田の原油は低硫黄であり、公害防止に効果がある」として、同プロジェクトを全面的にバックアップすることを約束した。

八年後に低硫黄原油

そして六月中旬、二週間にわたって、今里広記日ソ経済委石油委員長（日本精工社長、海外石油開発社長）を団長とする専門家代表団が訪ソ、ソ連側要人と会談、さらに石油開発が進められているチュメニ地方の生産現場などを視察した。この結果①チュメニ油田地域は、油田群の潜在的可能性はきわめて大きく、原油生産計画は順調に達成されつつあり、十分に安定した対日原油供給源となりうる②チュメニ油田の性状は、品質的にみて十分売買交渉の対象となりうる③シベリアの諸条件の下における原油パイプライン輸送の安全性は、ソ連側が現に実施しつつある安全措置をとれば、技術的に問題ない―との報告書を作成、具体的に政府にバンクローンの供与などについて働きかけを行なっている。さらに今年末から来年にかけて、ソ連側との話し合いを持ってケリをつけ、一九八〇年ごろには日本に低硫黄原油を運び込みたいとしている。

さらにこのチュメニ石油開発計画には、米系石油資本の有力会社である「ガルフ・オイル」が参加を申し入れてきている。日本側としても、膨大な資金を負担し合うという意味から、また多極化時代の到来に合わせて日、米、ソ三カ国の共同事業の方がより安全と判断しており、ガルフの参加を歓迎している。しかし交渉権はあくまで日本が握り、ソ連と日本と向かい合った形で交渉を進め、ガルフの参加分などについては、日本側とガルフが話し合うことにしている。このガルフの参加については、すでに六月中旬、今里氏らが訪ソしたさい、バイバコフ・ソ連副首相（ゴスプラン議長）から「まったく可能なことである」というお墨付をもらっており、ガルフの参加は実現しそうだ。

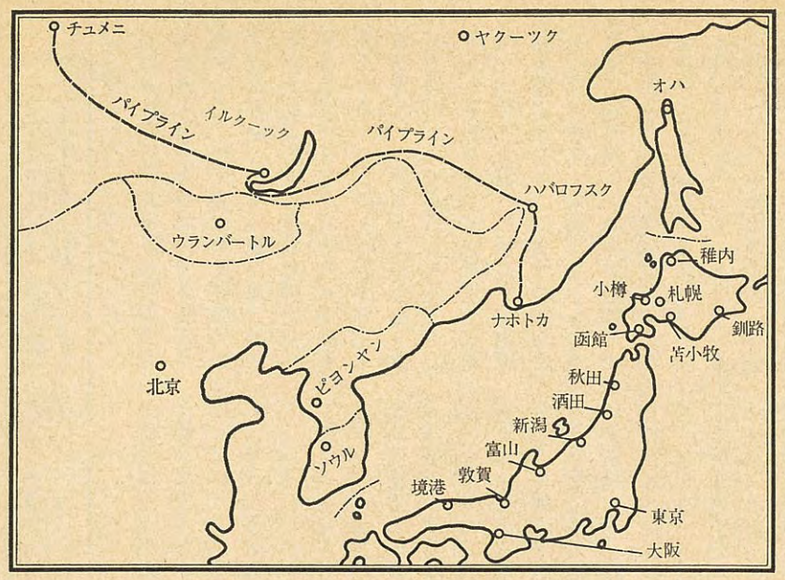
しかし、これまでソ連の〝赤の恐怖〟におびえていた財界が、日本のノド元をしめることができる石油を年間五千万㌧もソ連から開発輸入することについては、一部に抵抗がないわけではない。現に日ソ経済委石油委員会のメンバーの某石油会社のトップの中には、大っぴらに「ソ連から石油の供給を受けて、いいようにされている東欧諸国のことを考えたことがあるのか。いい気になってこんなプロジェクトを進めて後で泣いても知らない」という声も出ていることは事実だ。

日本から掘削船など

ヤクートの天然ガス開発は、チュメニ開発が日、ソという二国間での共同開発という色合いが強いのに比べ、日、米、ソという三国共同開発ということになる可能性が強い。当初、日ソ経済委で話し合われていたが、日本側としてはチュメニ開発一本で進む方針で、今年二月、東京で開かれた日ソ経済委合同委員会でも一応タナ上げされたかっこうになっていた。ところが今年春から夏にかけて、米国の大手天然ガス供給会社であるテキサス・イースタン・トランスミッション・コーポレーション（TETCO社）とエル・パソ・ナチュラル・ガス社の両社から米国と組んで、このヤクートの天然ガス開発をやらないかという話が持ちこまれてきた。

ヤクート地域には、天然ガスの埋蔵量は約一兆立方㍍（七億㌧）あるといわれ、この天然ガスを極東のナホトカまで、三千六百㌔のパイプラインを敷いて運び出し、ナホトカで液化し、米国に年間百億立方㍍、日本に百億立方㍍、それぞれ専用船で開発輸入しようというもの。総投資額は四十八億㌦にも上ると見られている。日本としても日米共同ならこの投資の半分を負担すればいいわけで、また四日市判決をきっかけに一段と厳しくなってきた公害規制に対して、無公害燃料としての天然ガスへの需要が電力、ガス、鉄鋼などに盛上がり、同計画が急速に具体化する機運が高まってきた。

そして日ソ経済委天然ガス懇談会委員長の安西浩東京瓦斯会長が、九月末に訪米、ピーターソン商務長官、フラナガン大統領特別補佐官、



ジョンソン国務次官補や共同開発に名乗りを上げているTETCO社、エル・パソ社の幹部と会談、米国側の考え方を打診した。この結果、米国政府も日本と組んで、このプロジェクトを積極的に推進する意向を表明した。安西委員長らは、これを受けて十月二十三日からモスクワでソ連側と本格的な交渉に入った。米国政府が現在、ソ連政府と進めている米ソ通商協定が今年中にも成立する見通しとなっており、この協定の目玉商品がヤクート天然ガス開発になるものと見られ、同協定が成立すれば、このプロジェクトは急速に進む可能性が大きく、チュメニより先行することもありうるとしている。

サハリン大陸棚の天然ガス石油開発については、九月中旬、今里広記日ソ経済委石油委員会委員長を団長とする北サハリン大陸棚開発専門家代表団が現地を訪れ、ソ連側のサハリン大陸棚石油・ガス探鉱専門委員会の委員長、V・I・イグレフスキー・ソ連地質省次官らと会談、開発問題を話し合った。ソ連側は、日本から海洋掘削船六隻、調査船四隻、分析用の大型コンピューター一台について総額二億㌦に上るバンクローンの提供を日本側に要請してきた。

日本側は、この開発についても、チュメニ問題でも手を組むことになったガルフ・オイル社と共同で現地で、探鉱、掘削をやりたいと申入れている。しかしソ連側は、これに対してはっきりした意向を明らかにしておらず、ソ連側の代表団が来日、東京で同問題についての日ソ合同会議が開かれるさいに、この諾否を明らかにするものと見られている。日本側は、ソ連側とのこれまでの交渉の感触から共同開発を受入れる可能性が強いと見ており、日ソ合同会議でソ連側が受入れを表明すれば、すぐにも開発に取りかかれるよう開発主体となる新会社を設立する意向を固めている。

ビジョンを明確に

わが国は東京・羽田空港から日本海をひとまたぎして、シベリアまでジェット機で一時間半という近さにある。この利点を生かして、これまでシベリア開発に先鞭をつけている。その成果は、極東地方の一般機開発（KSプロジェクト）、同パルプ・チップ用機の開発、ナホトカのウランゲル港建設といったかたちで実を結んでいる。しかしこの三件とも、計画内容はそれぞれ一億㌦に満たない小規模プロジェクトばかり。それだけに、以上三つの資源共同開発プロジェクトは日ソ経済回復を強めるためにも実現が期待される。

また多極化する世界の中で、今後自主外交の展開をせまられている政府にとって対中、対ソ、対米との外交交渉の中で、大きな切札になることも予想される。また、日本はこれまで資源を東南アジア、中東、アフリカといった南半球からその大半を求めてきたが、身近なところにある北半球の資源の活用にも目を向けるべきであろう。シベリア資源開発は、資源の南半球依存というかたちから脱皮するチャンスとしてとらえることも可能である。しかしエコノミック・アニマルという言葉に代表されるような経済進出を続けてきた日本財界だけに、体制の異なるソ連で、相手を理解しない進出を行なえば、危機を呼ぶことは確か。それだけにしっかりとしたビジョンを持って、この資源開発を手がけてほしいものである。

（毎日新聞東京本社経済部・佐々木宏人）

積極的な住友グループ

この五月、住友商事は「米国のエル・パソ・ナチュラル・ガス社と共同でヤクートの天然ガスを開発、輸入する計画があることを発表した。この発表によると、埋蔵量約七億㌧と推定されるヤクート・ガス油田を開発、ヤクーツク―ナホトカ間三千六百㌔をパイプラインで輸送、ナホトカで液化、日米両国へ年間五百万㌧ずつのLNG（液化天然ガス）を運ぼうという計画。天然ガス不足に悩む米国がヤクートの豊富な油田に目をつけ、昨年十一月、スタンズ商務長官（当時）のモスクワ訪問を機に話が持ち上がり、米国太平洋沿岸各都市にガスを供給するエル・パソ社が開発を引き受けることになったもので、この計画に住友グループの支援を受けて住商が一枚加わるというわけだった。

工事に必要な資材や液化装置など機材の額だけでも十億㌦を超えるという「大型商談」だったが、この話は、いつの間にか立ち消えとなった。ライバルの商社筋には「ヤクートのガス油田開発に関する米・ソとの交渉は経団連が窓口。一社だけの抜け駆けは許さないとクギをさされた」というウワサが流れている。

七月には日商岩井の主宰する造船ミッションが訪ソした。関西系企業からは外島健吉神戸製鋼所会長、四本潔川崎重工業社長、福田英夫日立造船副社長らのお歴々が参加、天然ガス資源が開発されたあかつきには、ソ連側に日本からLNG船を購入する意思があるかどうか、打診するのが目的。しかし日本側が円建てベースを主張したのに対してソ連側はドル建てドル払いを主張、話し合いはスムーズにいかなかったという。さらにソ連はこのLNGやチップの自国船での輸出を考えているわけだが、そうなると日本船との競合が問題になってくる。現在、造船業界では五、六万㌧級の中型船のドックがガラ空きの状態。このためにもLNG船やチップ船の商談はノドから手が出るほどほしいのだが、「いろいろ考えると、ホイきたととびつける話でもない」という発言をした首脳陣もいる。

中国問題もからむ

関西系企業が北方圏の資源開発に目を向けてから十年近くたつ。まず丸紅がサハリンの天然ガス、あるいは間宮海峡の海底油田開発をするという計画がなん度か取りざたされた。また合繊メーカーの東レも、東部海岸への製品輸出の見返りに、シベリアの森林資源開発に協力、木材輸入を検討したことがあったが、いずれも立ち消えになっている。

現在ではチュメニ油田、サハリンの天然ガス、ヤクートの天然ガスや原料炭などおもな開発プロジェクトは窓口が日ソ経済合同委員会一本に絞られ、それまでの企業ベースの商談はすべてそちらに吸い上げられたという関係もあり、シベリア資源開発の主導権は完全に〝東京財界ペース〟に移行した。

こういうわけで関西財界では北方圏問題について〝無関心派〟が多数。このウラには中国問題が微妙にからんでいる。「たとえばチュメニ開発が行なわれパイプラインがナホトカまで敷かれることになると、ソ連の艦艇や戦車の行動力は飛躍的に大きくなる。毛沢東主席が田中首相にその点を指摘したという話も聞く。中国にとっては非常な脅威になるわけで、親中国派の多い関西では、シベリア開発に積極的に取り組むのをためらう空気さえある」と語る商社幹部もいる。さらに反公害運動の盛り上がりで、瀬戸内海はじめ太平洋沿岸での石油コンビナート建設は、すでに不可能な状態。そこで原油受入れについても「当社としては苫小牧あるいは、むつ小川原地区を検討している。関西や中国、四国にはとても持ち込めない」（丸善石油）という。さらに石油や天然ガスの需要者側も「開発計画の推移に関心は持っている。しかし早くとも五、六年先の話であるし、受入れ基地など具体的な検討にはいるのはまだまだ先のことだ」（関西電力）「五十五年に稼動する設備の燃料源としてソ連を含めて検討中」（大阪ガス）といった段階で〝関西財界をあげて〟といった熱意には遠い。結局、各企業としては「開発の基本計画がまとまったあと、それぞれに分担が割り当てられるだろう。それを待っているよりない」（住友商事情報室）状態だ。

ウランゲル港に全力

こうした姿勢は商社だけでなく、需要者である石油業界も同じ。「チュメニが開発されると年間四千万㌧を輸入することになる。はたしてそれだけの需要があるかどうか、政府が各企業に希望量を提出させ、必要量をさぐったことがある。結果は、各社の希望量を合計すると四千万㌧をはるかに上回ったという話だ。だから各社とも非常な関心を持っていることは事実。それだけに抜け駆けはやりにくいわけでもある」（丸善石油企画部）という。財界ペースでの熱意は薄いが、一件数十億㌦という〝もうけ話〟を企業として放っておくわけにはいかない。なかでもヤクート開発の〝勇み足〟の例でもわかるように住友グループの姿勢は積極的。

もともと住友グループはソ連に強い。ナホトカに隣接する新港のウランゲル港を建設する計画が、一昨年末に日ソ経済委で調印されたときは、住友商事が日本側窓口機関の幹事会社となった。このウランゲル港は、現在工事中で昭和四十九年末ごろには、年間能力一千万㌧の石炭積出総合設備、同八十万立方㍍のチップ積出設備、同十二―十四万個のコンテナ荷役設備をそなえた最新鋭の港ができあがるはず。まだ基礎工事中だが、日本側は総額八千万㌦の設備、機械、資材を供給する契約が結ばれているため（個別契約は四十八年までに順次行なわれる予定）同グループとしては住友商事を窓口に「住友重機械を中心とした荷役設備、またその他の有力メーカーと連係して港湾建設用の資材機材の商談をまとめるため力を入れている」（海外事業部）という。このほか、丸紅、日商岩井らのグループも積極的に動いているが、活動の主舞台は東京であり、中ソ問題のからみなども微妙に影響して、もう一つ〝表面化〟しないという事情もあるようだ。

（毎日新聞大阪経済部・高柳　尚）

山形も「乗り遅れるな！」

山形県で唯一の港を持つ酒田市は、このところソ連沿岸都市との都市提携に熱をあげている。なかでも熱心なのが、相馬大作市長で、市議会が開かれるたびに反応のあった都市の名前をあげては提携促進の決議を働きかけている。

酒田港は裏日本屈指の木材輸入基地として知られ、その大半を占めるのがシベリアからの北洋材。ソ連船の出入りも年々多くなっているが、これといった見返りの輸出品もなく、ただ木材を受入れるだけの片寄った輸入港の地位に甘んじている。

しかし、その酒田港も、二年前から始まった北港の建設で工業港への発展が約束されており、いずれは拡大する沿岸貿易のワクを、姉妹都市のよしみでがっちり確保しておこうというのが、市長をハッスルさせる大きな動機となっている。

昨年、新潟市長の肝いりで話の進んでいたウランウデ市との提携は、先方の都合で流れ、目下バイカル湖畔のジェレズゴルスク市と交渉中。人口二十五万のウ市にくらべると、シ市はわずか二万人足らずの小都市。

このため議会でも難色を示しているが、当の相馬市長は「いまの段階で当市ができることは、せいぜい人間の交流を盛んにして双方の親善を深めることぐらい。しかし、この小さな積み重ねが、シベリアの本格的開発で必ず大きな実を結ぶときがくる」と、執念を燃やしている。

酒田市を別にすると、対岸に対する県当局や、県産業界の関心は低調そのもの。

これは北港に進出する基幹産業が、輸出とは縁の薄い住軽金のアルミ工場といった事情もあるが、なによりも農業だけに依存してきたという山形県産業界の後進性が大きく左右しているようだ。

山形県内のこんな沈滞した空気の中で、ただ一人やっきとなっているのが、資源の枯渇で早晩ナフサへの切換えが迫られている庄内地方の天然ガス業界。

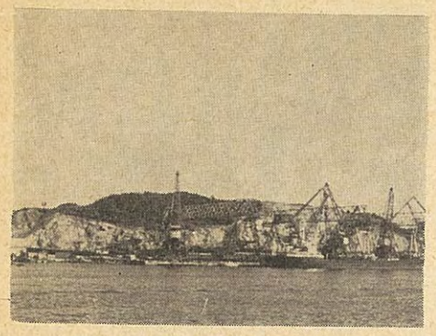
酒田天然ガスの溝井常務は「海ひとつへだてたチュメニの石油、ヤクートの天然ガスはノドから手が出るほど欲しいが、独力で輸入することは、とてもできない相談。しかし酒田港が工業港へと生まれ変わるためには、当然これらの資源が必要になってくるはず。いまのうちにお隣の新潟、秋田両県と手を結び、対策を講じておかなければ、せっかくの日本海時代にも乗りおくれることになる」と、県や産業界の立遅れに警鐘をならしている。

（毎日新聞酒田通信部・長野　功）

富山はチュメニ確保へ

まだ具体的な動きはないが、油を大量に使用している北陸電力（原谷敬吾社長）や日本海石油（荒井武治社長）などは「チュメニ」というと目を輝かし、開発の動きを熱いまなざしで見守っている。公害に対する住民意識が高まったいま、低硫黄重油の確保いかんによっては企業の存在価値すら揺がしかねないからだ。

北陸電力はいま、富山県内に百三十一万二千キロワットの火力発電所を持っているが、五十三年度までにさらに百万キロワットを増設する計画である。これに要する重油は年間三百五十万キロリットル。最近、県に提出した硫黄分の低減計画によると、現在の一・八％から五十年度には一・三％、五十三年度には平均で〇・八七％にするという。五十年度の一・三％はミナス石油をふやすことにより達成できるとみているが、五十三年度の〇・八七％は脱硫装置の開発に期待をかけている。しかし、脱硫コストは〇・一％下げるのに一キロリットルで百円かかり、三百五十万キロリットルでは三億五千万円かかる勘定だ。


チュメニの石油が来るナホトカ港

それとミナス石油は五十年をピークに産油量は減るといわれている。谷正雄企画室長は「チュメニにかける期待は大きい。なにがなんでも確保したい」と語っている。

同県公害部の調べでは県内の四十六年度重油使用量は二百九・九万キロリットルで、亜硫酸ガスの排出量は五年間に一・五倍と増えている。来年度に公害防止計画を策定し、年次的な亜硫酸ガスの低減計画を打出すが、期待しているのはやはりチュメニの油。富山新港計画を推進した吉田実前知事（現国会議員）は「公害がゼロになったとき、はじめて計画が完成したといえる。それにはチュメニから油をもってくるしかない」という。

悩みはCTS（大規模貯油基地）を建設する用地がないこと。このほど県は富山と伏木外港計画を打出し、それぞれ石油配分基地を建設することにしているが、これは一般消費用にしかすぎない。

（毎日新聞富山支局・入江亮二）

中国山脈にパイプライン

ソ連とは身近な関係にある鳥取県境港。毎年、五十隻を超えるソ連船が北洋材や重油を積んでナホトカから入港する。上陸するソ連船員は千五百人以上。女性船員も混じり、ソ連の船員が町の商店街でショーウインドーをのぞき込み、ショッピングする姿は、ごくありふれた風景だ。

境港にはソ連からの北洋材を製材する木工団地や漁船に給油する全漁連の重油基地があり、ソ連のタンカーのほか、日本のタンカーがナホトカ～境港間を定期的に就航している。昨年は年間約四万キロリットル（約三億三千万円）の重油を輸入し、ことしは八月末現在ですでに三万六千キロリットル（約二億八千万円）。こうしてソ連からの資源が現実にどんどんはいっている境港にとって、チュメニ油田の原油受入れは大きな魅力だ。

石破鳥取県知事はことし二月、チュメニ油田の原油を鳥取、岡山両県で受入れる構想を発表し、原油の貯蔵基地を境港に誘致する積極的な姿勢を示した。境港に貯蔵基地を造成、岡山県の水島臨海工業地帯にパイプラインで送り込む計画で、境港～水島間のパイプラインは延長約百二十キロ、中国山脈をぶち抜く遠大な構想だ。

同知事は「チュメニ油田の開発が具体化すれば、日本海沿岸の陸揚げ貯蔵基地は三カ所くらい必要になり、境港は有力な候補地」と話し、境港～水島の結びつきについては①境港は港湾施設の拡張が可能②水島工業地帯は石油精製能力の余地がある③瀬戸内海は船舶の航行が混雑、大型タンカーの出入りに限度があり、輸送コストが高くつく――などを理由にあげている。そして「ナホトカ～境港～水島は他の候補地に比べて距離的にも一番短いので実現に努力する」と同県議会でも約束している。

地元の境港市（柏木整一郎市長）と境港商工会議所（松本豊会頭）も同知事の構想を歓迎し「これで境港が浮かび上がるならば力を貸す。公害には注意しなければならないが、境港にはチュメニ油田の原油を受入れられるだけの港湾能力は十分あるので、構想をぜひ実現させてほしい」と積極的だ。だが一般には「まだほんの構想」「将来計画の夢」という受取り方が強く、まだ具体的な誘致の動きは出ていない。

（毎日新聞境港通信部・平野丈夫）

強力な「秋田バイカル会」

秋田県のシベリア資源導入の計画は、県第三次総合開発計画（県三総）のマスタープラン作り（四十八年度中に完成）段階で検討されているが、具体的なものはまだない。県三総では六十年をメドに秋田湾を埋立て五、〇〇〇㌶を造成、内陸部と合わせて一二、〇〇〇㌶の工業用地を確保、また三十万㌧級の工業港を造るというもの。六十年の工業出荷額は三兆円と見込んでいる。この大規模工業基地計画は新全総で取上げられ、国、県の調査は四十六年度から始まっている。

県当局はマスタープランをこれから作成するが、公害企業回避のためCTS（石油中継基地）構想には反対している。またシベリア原油の導入についても「果たしてどこまで供給量が確保されるか、政治問題もあるのでまだ腰をあげられない」（遠山仁一県開発局長）と、期成同盟づくりには消極的だ。同局長は「この計画に、民族系石油資本が進出する話はまだないので、シベリア石油の問題は白紙の状態だ。しかし中東原油に比べ半分以下の低硫黄分、三分の一の輸送費は魅力で、計画に石油精製基地を加えるなら当然シベリア石油を導入する」と〝本心〟をチラリとのぞかせている。

県内の動きで具体化したものでは、八月二日発足した「秋田バイカル会」がある。これは小畑勇二郎知

ニュースを運び……新聞用紙
文化をつくる……印刷用紙
生活をいろどる……包装用紙

王子製紙株式会社

本　　社	東京都中央区銀座４－７	電話(代表) 563－1111
苫小牧工場	苫小牧市王子町３１番地	電話(代表)　2－6161
春日井工場	愛知県春日井市王子町１	電話(代表) 81－1111
江別工場	江別市王子１	電話(代表)　2－3131

事を会長に、日本海沿岸四市、県沿岸貿易協同組合、外材輸入組合、県果樹協会、産業界などの有力メンバー百七十人で結成された。同会の目的は「日ソ親善友好を前提として、経済開発についても知識を交換しよう」というもの。しかし発足の音頭取りをした県商工課のねらいは、これを貿易拡大の足がかりにしようというもの。県内産業界は弱体で、沿岸貿易協同組合もことし四月に拡大され、加入社が十一社から二十二社になったような状態。とても独力では他県と太刀打ちできないとあって、バイカル会に大団結したといわれる。ソ連材の輸入、リンゴ輸出など貿易拡大に寄せる期待は大きい。

（毎日新聞秋田支局・野口　昇）

拠点へ意欲満々の新潟

新潟県は脚光を浴びはじめた日本海時代の拠点を自負している。日本海側唯一の特定重要港湾新潟港東西二港を持ち、同じ新潟市を中心に唯一の新産業都市があり、五十一年には上越新幹線で東京と結ばれるという条件は、たしかに自負に恥じない。従ってチュメニ油田開発をはじめとするシベリア開発の日本側拠点に立候補する意欲は満々だ。

しかし、期成同盟づくりなどの派手な誘致行動は起こしていない。というのは、液化天然ガス輸入基地を新潟東港に設ける計画と対ソ連コンテナ輸送基地をやはり同港に造る計画が、ソ連側の固い態度で二度まで覆された苦い経験があるからだ。

「チュメニも両国間で計画が具体化するまでは動かない。それからでも本県は太刀打ちできる（巨新潟県知事）という態度で、表面は静かに、しかし裏では情報収集に励んでいる。

通産省、経団連筋からの情報に基づく新潟県の見通しでは、来春にもチュメニ受入れのパイプライン敷設工事が始まる。当面その鋼管積出しの基地として新潟東港が最有力という見方だ。同港臨海工業地帯に新日鉄が用地を確保したのが強味。つまり、鋼管での輸送はコスト高になるので新潟まで鋼板を運び、鋼管にしてシベリアに送る。新潟東港の用地はこの鋼管製造工場用というわけだ。新日鉄だけでなく、川鉄、日本鋼管からも用地の引合いが来ている。

こうして鋼管や工事用物資の積出港になれば、新潟の地位は確立される。数年後の原油受入れは何カ所かが予想されるが、苫小牧と並んで新潟はほぼ確実になるという目算である。他県ではチュメニ受入れ基地用地も既に確保した等のウワサも届くが、新潟では新産都市建設用地の中に十分収容の余地があるのも、あわてて腰を上げない理由。土壇場になれば〝田中総理のおヒザ元〟という切札を持っているというわけだ。

（毎日新聞新潟支局・松上文彦）

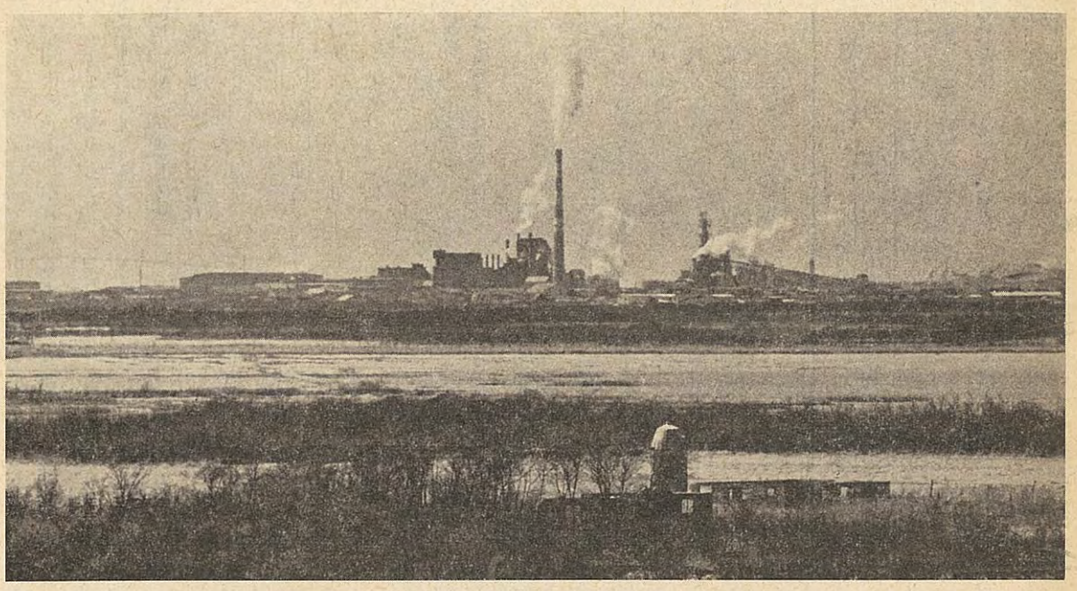
表玄関をめざす敦賀港

資源、資材の輸送中継基地として、北方圏開発の一翼担いをねらっているのが敦賀。そのための建設資材の送り込み、続く北方資源の受入れは、敦賀こそ最適の地と自負している。ことにシベリア開発では、いまナホトカ港隣設地に建設中のウランゲル港の問題だ。開港は二、三年後と目されているが、敦賀はウランゲルとの姉妹港（都市）盟約を密約、地の利をより強くしようとしている。

敦賀港は、戦後は北洋材輸入でかろうじて息をつなぎ舞鶴、新潟、秋田に大きく遅れをとった。ところが、この遅れが港の近代化転換に、日本海側で唯一の残された良港であると、矢部知恵夫敦賀市長は負け惜しみでなく評価する。いま一万五千㌧バース二つを構築中だが、ちゃちな旧港域にこだわらず、外海からU字型に十㌔も入り込んだ港湾化を打出しており、「新しい敦賀港構想をどのようにするか」を市民とディスカッションする段取りだ。矢部市長は「北方圏開発到来を、敦賀港の近代化転換へのスタートにしたい。国内石油パイプラインの通産省構想でも敦賀を重視しているが、いまでも五十万㌧タンカーの受入れは可能」という。敦賀は日本海側フェリーの中間基地でもある。現在の小樽連絡に次いで長崎連絡フェリー実現の話もあり、「いまにシベリア横断ドライブの時代がきっとくる。この起点も敦賀がふさわしい」と北へ向ける目は燃えている。

（毎日新聞敦賀通信部・柳原　汎）

北海道もハイペース



苫小牧東部工業基地がつくられる勇払原野。後方は国策パルプ

窓口つくり、視察団派遣

北海道の北方圏への関心は日増しに高くなっている。一昨年社団法人・北方圏調査会が誕生するまでは認識がたりないことも手伝って、警戒心すらあった。たとえば「ソ連から天然ガスや石油を輸入するといっても、もし、先方でスイッチを切ったらどうなるんだ…」なんてことを言う経済人すらあった。それがどうだろう。わずか二年たらずのあいだにすっかり変わってしまった。

客観情勢の変化もあるが、それにも増して、北方圏へ積極的にアプローチしようという堂垣内知事（北方圏調査会・会長）の姿勢がこのムードづくりに大きく貢献した。

北方圏調査会の設立につづいて、社団法人・北海道日ソ貿易協会（柴野安三郎代表）が誕生し、さらに対岸をにらみながら、地域の発展をはかろうとする社団法人・石狩総合開発研究所（吉田繁雄所長）もできた。

昨年の北方圏調査会主催シベリア・極東経済文化視察団の派遣につづいて、ことしは堂垣内知事を団長とするカナダ・アラスカ経済・文化視察団が道の主催、北方圏調査会などの後援で派遣された。

日ソ貿易協会でも、昨年とことし二回にわたって視察団をソ連へ送りこんだ。九月上旬帰国した同訪ソ団（柴野安三郎団長）は、ソ連材を来年はとりあえず五万立方㍍、最終年度の昭和五十二年には十五万立方㍍を輸入する。ベーリング海の赤エビを五百㌧、乾燥コンブを初年度五十㌧、毎年五十㌧ずつふやし、最終年度には二百五十㌧輸入する。この見返りとして道産品を、ソ連からの輸入額の二〇％以上（四八年）二五％（四九年）三〇％（五〇年）四〇％（五一年）五〇％（五二年）と漸増方式で輸出をする。ソ連からの輸入額は初年度五億円、最終年度十五億円とするなどの取決めを行なった。

函館、小樽、旭川、釧路、稚内の各市長も、シベリアやサハリンを相次いで訪問し友好のキズナをつないだ。来年は函館の市民の船につづいて、小樽市でも三百人を越える旅行団をモスクワ、ハバロフスク、イルクーツク、ナホトカなどに送りこむ

エネルギー革命の基地

第三期北海道総合開発計画の目玉、苫小牧東部大規模工業基地造成を抱える地元苫小牧市は、ヤクート天然ガスの輸入問題に大きな関心を寄せている。

東部基地は鹿島臨海工業地帯の約三倍の大きさ。鉄鋼、石油精製、石油化学、アルミニウムなど、六十年代の完成時には工業出荷額が三兆円、全道工業生産額の四分の一にものぼる一大工業地帯。これに要する電力はざっと三百万㌔とちょっと想像もつかないほどのもの。重油専焼の火力発電では一日になんとドラムかんにして六万本の重油が煙になる勘定だ。

日本列島改造が「公害拡散になっては―」という声も聞かれるなかで、道はすでに公害の総量規制を行なう考えを明らかにしているが、ソ連の天然ガス輸出計画ルートの本道基地が苫小牧に設置されたら、公害防止はいっぺんに解消できると非常な乗気。

大泉源郎苫小牧市長は苫小牧に「天然ガスの液化基地を作るとすればもちろん東部基地に予定されている火力発電所建設のレイアウトをさらに検討、この基地を東部のどこに建設するかという問題が当然提起されてこよう。なんといっても重油専焼の火力発電は公害の元凶といわれているだけに、無公害の天然ガス輸入は苫小牧にとって悲願だ」という。

またチュメニの石油を輸入する問題についても脱硫装置の完備などその受入体制について企業側と十分話合いを進めていく考えだという。

いずれにしても天然ガス、石油の輸入問題は、ナショナルプロジェクトの東部大規模工業基地造成との関連のなかで進められるため、国、道との協議のなかで受入れの〝青写真〟づくりとなるが、同市長は「幸い安西浩・日ソ経済委員会天然ガス委員長は、北海道開発審議会工場誘致小委員長でもあるので、近くこの輸入問題について具体的に話合いたい」と本腰。特にパイプ・ラインにのせられた天然ガスが苫小牧から分岐、道内の内陸工業地帯に送られるようになれば、苫小牧はエネルギー革命の一大基地になると大きな期待を寄せている。

（毎日新聞苫小牧通信部・笠谷茂樹）

張切る函館の製網、造船

横浜、長崎とともに日本最古を誇る函館港も、北洋漁業の縮小と釧路、室蘭などにお株を奪われて次第に影が薄くなった。それだけに北方圏に対するプロモートも積極的。

まず函館市がことし、市制六十周年を記念し、シベリアのハバロフスクなどの都市を訪問、市民の交流を深めた〝市民の船〟を六月実施した。これには各層の市民三百人が参加、親善の輪を広げた。

また、これを機会に函館～ハバロフスク間に定期航空路の開設と、横浜～ナホトカ間の定期船の函館寄港を関係方面に強く要望している。

一方、民間企業では函館製網船具会社（宮崎三善社長）の動向が目立つ。同社は十五年前からカナダに漁網を輸出しており、現在、年間一億三千万円にのぼるサケ・マス用刺網やニシン用巻き網を輸出するなど北方圏交流に古い実績を持っている。

同社は急速に伸びる北方圏との取引に対応するため、東京支社に形式的に設置されていた輸出課を貿易部に昇格、十五人の部員に充実させるなで意欲的。

一方、函館ドック（合田秀雄社長）はこれまで対ソ輸出実績がゼロだったが、さきの北海道日ソ貿易協会訪ソ団に誉田所長が同行、ソ連船舶の修理とチップ用の新造船建造について合意を取付け、見とおしも明るいようだ。

（毎日新聞函館支局・佐々木吉彦）

定期航路開設めざす小樽

「シベリア地方との経済交流拡大には、いろいろの問題点があるが、地道に話合いを続け、実績を重ねていけば、やがて大きな成果につながるだろう」―。ことし六月、二回目のナホトカ訪問から帰った稲垣祐小樽市長はこう語っている。

小樽とナホトカは、日本海をはさんでひとまたぎ、船で一昼夜の近距離でまさに〝隣同士〟だ。それなのに航路ひとつ開設されていない。

「小樽・ナホトカの経済、文化交流を深め日ソ両国の親善、経済発展に役立てよう」というねらいで、両市が姉妹都市提携に調印したのは昭和四十一年九月。北方圏構想がクローズアップされると、小樽でも市や経済界を中心に、シベリアの極東地方との経済交流を拡大させようという動きが強まってきた。

稲垣市長はナホトカ訪問のさい、この航路実現を強く申し入れた。これに対してクークソフ市長は「人の面でも物資の面でも、定期船を就航させるだけの交流があるかどうか。そのメドがなければ…」という態度を示したという。小樽側は、人的にも物的にも交流拡大をはかるためにダリイントルク（極東貿易事務所）の支所誘致、沿岸貿易のワクの拡大などを働きかけている。

最近の動きとしては、小樽港をシベリア〝横断〟のランドブリッジの起点にしようという構想。欧州航路で輸出しているインチ材など各種貨物をコンテナにし、小樽―ナホトカ港を経て、シベリア鉄道に乗せ、ヨーロッパに送り込もうというものだ。

また、ナホトカからはさきほど民族舞踊団の交歓をしようという呼びかけがあり、市民の船に参加させたい考え。すでにスポーツの交歓は、記録だけながら実現している。

（毎日新聞小樽支局・佐藤克二）

稚内も〝市民の船〟交換へ

稚内市では、来春早々に北方圏調査委員会（仮称）を設立する。

対象地域はサハリン、シベリア、アラスカ、カナダ。九月上旬に浜森市長がサハリンを訪問した。これを機会に、日本側は北日本沿岸貿易協同組合（瀬戸常蔵組合長）からダリイントルクに対岸貿易交渉を呼びかけ窓口の一本化をはかり人の交流を促進するほか、定期航路の新設や、稚内市とネベリスク市との〝市民の船〟の交換なども計画している。

一方、この九月、瀬戸稚内商工会議所会頭が北方圏調査会のアラスカ・カナダ経済・文化視察団に加わったのがきっかけとなり、「北方圏との交流はこれからだから、若い人たちをアラスカ、カナダに送りたい」と語っており四十八年度中に実現させたいとしている。

ニシン、サケ、マスなどの輸入問題は、アラスカ、カナダの交渉窓口を確認しており、浜森政雄道漁連会長（稚内漁協組合長）も、技術陣や水産学者を資源調査のため現地に派遣するという。

（毎日新聞稚内通信部・九貫一彦）

日ソ経済関係の展望

V・B・スパンダリヤン
（ソ連国家計画委員会委員）



この論文は、一九七二年からソ連科学アカデミー、極東研究所の機関誌として創刊された「極東の諸問題」（季刊）の第二号にソ連ゴスプラン（国家計画委員会）委員のV・B・スパンダリヤンが寄せたものである。同委員は、日ソ通商条約および貿易支払協定締結交渉に参加、その後一九六〇年代を通じて日ソ貿易におけるソ連側の中心的人物であった。一九六九年ソ連ゴスプラン外国貿易局長に就任、現在委員（理事）の要職にある。

同委員は、論文のなかで、日ソ協力によるシベリア・極東の開発とそれを通じた貿易の拡大が日ソ両国の経済発展に資するところが大きいと力説している。（訳・ソ連東欧貿易会、小川和男）

（シベリア・極東経済調査委員会のシンポジウムの項参照）

一、ソ連経済の発展と日ソ経済・貿易関係

極東の隣人・最先進資本主義国□第二四回党大会指令は、貿易と科学技術の分野でソ連との協力拡大の用意のあることを表明している資本主義先進工業諸国との経済的に正しい貿易関係と科学・技術交流の拡大を規定している。この点に関して、ソ連と日本との経済・貿易関係の分析は格別の関心をそそるが、それは、日本が資本主義諸国のなかで経済的にもっとも発展した国の一つであり、しかもソ連にとって直接に国境を接する極東の隣人であるためである。

日ソ経済・貿易関係にかかわる諸問題の研究と解明は、ソ連にとって具体的な国民経済的意義をもち、対外政策の重要な一局面であり、社会・経済体制の異なる諸国家の相互経済関係が発展するための具体的形態を探求する上でも、一定の理論的興味をひくものである。

レーニンの平和共存政策と東西経済関係□レーニンは、二つの体制の平和共存を社会主義諸国と資本主義諸国との経済関係がよって立つ基本的原則とみなした。この点について、レーニンは平和共存政策を実現する上で対外経済関係が果す役割を重視し、資本主義諸国との経済関係を社会主義建設に役立てることが、現実的に可能であることを示したのである。

社会主義諸国と資本主義諸国との経済関係に関するレーニンのこの思想は、ソ連が発展した経済をもち、広範にわたる対外経済関係を樹立した強力な社会主義国家に成長している今日の諸条件のもとでも、その力と現実性を失っていない。したがって、レーニンの思想に照し合わせ、具体的な歴史情勢を考慮して、日ソ経済・貿易関係発展の諸問題を検討することが必要である。

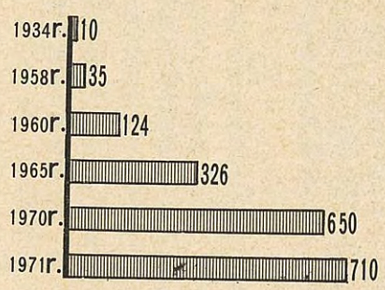
ブレジネフ・ソ連共産党書記長も、第二四回党大会における自分の報告のなかで次のように強調している。「われわれは日本との相互協力のいっそうの拡大に少なからぬ可能性を見出している」。

二、日ソ貿易の拡大

政治関係の正常化と貿易の発展□今日の日ソ経済関係の基本的形態は貿易であり、これは将来においても同じである。

第二次大戦後における日ソ貿易の再開と発展は、一九五六年十月の日ソ共同宣言調印と、それに続いた日ソ間の政治関係正常化と密接に結びついている。この共同宣言にもとづいて、一九五七年十二月には日ソ関係史上最初の通商条約が調印され、これを基礎にして貿易・支払協定、定期航路開設に関する取決め、沿岸貿易に関する取決め、決済方式に関する取決め、仲裁判断とその執行に関する取決めなど、一連の協定が締結されたのである。そして、これらの協定が、日ソ間の秩序正しい貿易取引きの実現に必要不可欠な合法的な基盤を形成したのである。これらの協定を実現していく過程で、貿易取引きについてかなりの有用な経験が蓄積され、ソ連の貿易公団と日本の商社との間に、安定した実務的接触が確立されていった。

日ソ貿易の拡大
（単位 100万ルーブル）



六〇年代の日ソ貿易拡大□日ソ間で締結された上述の協定の影響は、日ソ貿易のいちじるしい拡大となって現われ、とくに、一九六六～一九七〇年を期間とする最初の長期五カ年貿易・支払協定を実行する過程で日ソ貿易は著増した。実際の日ソ貿易額は、日ソ通商条約が締結された次の年である一九五八年に約三、五〇〇万ルーブルであったのが、一九六五年には三億二、六〇〇万ルーブルに達し、さらに一九七〇年には六億五、〇〇〇万ルーブルを上回ったのである。両国間の貿易額を五年間を単位に比べると、一九六一～一九六五年の五年間の貿易額は一三億ルーブルであったのが、一九六六～一九七〇年のそれは約二六億ルーブルに達し、倍増している。

日ソ貿易は六〇年代に以上のような拡大をみたが、七〇年代にはさらにいっそうの拡大が見込まれている。一九七一年に新しい長期貿易・支払協定（一九七一～一九七五年）が締結されたのである。新協定は、日本の新聞の評価によれば、この五年間の日ソ貿易を五〇億ドルと規定している。日本は資本主義世界におけるソ連最大の貿易相手国になっているのである。

商品構造にみる日ソ貿易の重要性

日ソ貿易の相互取引品目もいちじるしく増加した。ソ連の日本への輸出品目は主として、燃料、原料、工業製資材（原料炭、石油・石油製品、鉄鉱石、石綿、ニッケル、銑鉄、カリ塩、用材、綿花、その他）から成り、これらは日本経済にとって、その死活を制するような重要な物資である。一方、ソ連の日本からの輸入品目は、機械・設備が主体であり、そのなかには化学工業用、紙・パルプ工業用、食品工業用、繊維工業用、機械工業用の総合プラント、船舶、鋼材および鋼管、化学品等々が含まれており、真に国民経済的な意義をもつものである。また、ソ連の輸入品目には、メリヤス製品および縫製品、靴、織物、雑貨、毛糸および合繊糸、人造皮革などの消費物資が含まれ、これらは国民の消費物資に対する需要をより完全に満たす上で貢献している。

三、日ソ経済交流の活発化

日本大企業の日ソ貿易参加□ソ連の貿易公団や経済関係機関と、日本の商社やメーカーとの間の実務的接触もいちじるしく拡大し、強化された。

日ソ貿易が再開され、発展し始めた頃、ソ連の貿易公団の契約相手として登場したのは日本の主として大

規模でない商社であった。それが六〇年代になると、「三井」、「三菱」、「住友」という日本最大級の総合会社の全部、「丸紅飯田」、「伊藤忠」、「日商岩井」、「兼松江商」、「東洋棉花」など日本のリーダー的商社が日ソ貿易に事実上参加したのである。現在では、約一〇〇の商社が日ソ貿易に直接的かつ積極的に参加しており、その背後にはいうまでもなく、広い範囲にわたる製造業者と需要家がいるのである。

経済交流の盛況□日本の指導的経済・貿易団体も日ソ間の経済・貿易にかかわる諸問題に積極的に対処するようになった。たとえば「経団連」や日本商工会議所、ソ連東欧貿易会がそうであり、このうち「経団連」は日本の経済政策をかなりの程度まで決定している日本独占資本の、もっとも影響力の大きい機関なのである。

日ソ間の人的交流も実務的接触を拡大する上で大きな意義があった。五〇年代末から六〇年代を通じて、故北村徳太郎氏、故河合良成氏、植村甲午郎氏といった人たちを団長とした日本の経済使節団のソ連訪問、ソ連の政府要人や経済関係指導者たちの日本訪問は、両国間の実務的接触を大いに促したのである。相互における産業見本市の定期開催（一九六〇年、一九六五年および一九七〇年のモスクワにおける日本産業見本市開催、一九六一年東京、一九六六年大阪、さらに一九七〇年万博における ソ連産業見本市の開催）や部門別あるいはテーマ別（工作機械、エレクトロニクス、合成繊維・合成化学品、沿岸貿易など）に組織された多数の専門展示会も、実務的接触を拡大することにあずかった。

四、日ソ貿易の制約要因

日本側の制限・禁止策□日ソ間の諸関係が正常化した後の日ソ貿易の全体としては成功裡の発展を以上に述べたが、それと同時に、日ソ間の貿易取引拡大に悪影響を与えている多くの要素の存在を注目しないわけにはいかない。

このような要素のひとつとして、日本が社会主義諸国との貿易に関する一部の制限と禁止を固守していることがある。これらの制限と禁止は、外から押付けられたものであり、日本の国民的利益に応えるものではない。これらの制限と禁止があるため、日本の商社が総合プラントや単体機械、工業製資材のソ連向け引渡しを拒否せざるをえなかった場合が多々あった。たとえば、ポリスチロール製造設備、ポリエステル系繊維ベースの映画フィルム製造設備、水添分解装置、大口径鋼管などの対ソ連輸出は人為的に制限されたのである。これについて、ソ連東欧貿易会は、輸出制限が日本の対ソ連機械・設備輸出に重大な悪影響を及ぼしているという結論に達し、この点を日本政府に質したことがある。

日本の「読売新聞」もこの点について、次のように書いている。「共産圏諸国において技術進歩が起こっている今日的条件のもとでは、共産圏向け商品輸出の禁止は、その意味をかなり失っているばかりでなく、最近では共産向け輸出を不可能にしてしまう場合を多くしている」。

日本商社の市場競争力低下□日ソ貿易がアンバランスであり、日本側の入超となっていることの要因は、多くの重要商品について、とくに総合プラントに関して、日本商社のソ連市場における競争力が低下していることにある。問題は、西欧諸国（イギリス、フランス、イタリア、オーストリアなど）がソ連に対して長期バンクローンを供与しているのに、日本は、以前と変わらず、西欧の競争相手に比べ悪い条件のサプライヤーズ・クレジットを供与するだけである点にある。日本にとって延払いによる機械・設備輸出の問題は、対ソ連貿易だけに関連した問題ではない点を注目すべきである。今日、この問題は、本質において、日本の輸出競争力の今後における増強にかかわるもっとも重要な問題のひとつとなっているのである。

五、新段階を迎えた日ソ貿易

シベリア・極東開発と日ソ貿易□ソ連側は、国の路線としてはもちろん、日ソ経済合同委員会の会議においても、一九七一～一九七五年の五カ年計画期と、さらにそれ以降における経済・貿易関係発展プログラムを提出しており、そのなかには新しい五カ年貿易・支払協定の締結、シベリアと極東の天然資源開発に関する経済および科学・技術協力協定の締結が含まれている。

シベリアと極東の巨大な天然資源の開発は、ソ連の経済計画のなかのもっとも重要な課題のひとつであり、この開発が成功裡に実現されていることは、疑いもなく、日ソ貿易がいっそう拡大するための好ましい前提をつくり出している。とくに、ソ連のシベリア・極東地域と日本が地理的に近いことが秀れた条件となっている。

この点について、「毎日デイリーニュース」の質問に答えて、コスイギン・ソ連首相は次のように指摘している。

「日本がソ連との経済関係拡大に関心を抱いているのにかんがみ、ソ連の国内需要充足と日本への輸出の両方を考慮して、われわれソ連としては、シベリア・極東地域の発展を予定よりいくぶんなりとも速めることが可能である。ここには、ソ連と日本との間の経済・貿易関係が拡大する顕著な可能性が開かれているように思われる。もちろん、両国経済・貿易関係の拡大は相互利益を基盤としたものでなければならない」（ソ連外国貿易省機関誌「外国貿易」、№8. 1970）。

総合的経済関係の発展へ□以上述べたところと並んで、次のことも明白である。すなわち、日ソ貿易を将来も急速なテンポで増大させ、そこに存在する大きな経済的ポテンシャルと効果を現実に引出すためには、この問題に対するアプローチの方法を根本的に変えることが必要である。そしてここで、話題は、一九六五年に日ソ経済合同委員会が設置された後、日ソ関係の発展が新しい時代に入ったことに及ぶのである。経済合同委員会の設立は、通常の貿易発展形態から経済諸関係のより複雑な、総合的な発展への移行を意味したのである。第一回日ソ経済合同委員会会議におけるソ連代表の表現を用いれば、「われわれ両国間の貿易関係は新しい段階に入った。この新段階における貿易取引きの増大は、国際分業の優位、両国の距離的近さ、両国国民の科学・技術上の成果をより広く利用した経済的諸関係の質的変化を基礎として実現される」であろう。

六、極東の経済開発と日ソ経済協力

経済関係発展の前提□次に示す二つの基本的ファクターが、日ソ経済関係発展のための客観的前提となっている。

(1)ソ連にとって、東部地域の生産諸力の発展を急速化すること、とくに、極東の経済的ポテンシャルを早急に増強することが必要不可欠であること。

(2)日本にとって、日本経済が貿易に大きく依存していることから、より有利な、安定した輸出市場を求め、日本経済にとって真に重要な原料および燃料の供給源を求めることはさしせまった必要事であること。

日ソ両国は、たがいに高い経済発展水準をもち、広範囲にわたる対外経済関係を樹立しており、両国間の広範な経済協力が存在しなくても、上述の二つの問題を解決することができるし、実際にも解決しているのは全く明白な事実である。しかしながら、両国間の経済協力が発展すればそれによって上の二つの問題をもっとも好ましい状態で解決し、両国に明らかな利益をもたらすことができるのも確実である。

極東の経済発展と日ソ貿易□第二次大戦後、ソ連の対日本貿易は、主にソ連全体の輸出資源に依拠して発展してきたのであるが、この対日貿易において、極東には貨物通過地域としての重要な役割が与えられてきた。

極東経済地区の輸出資源は、実際には、いまのところまだ対日貿易に本格的には利用されておらず、このことが、日本との地理的近さの利点を、本来当然あるべき姿で活用することを妨げている。

日ソ貿易は、ソ連極東の輸出資源のより広範な活用を基礎としてはじめて、本当の発展を遂げることになろう。一方、極東の輸出資源の活用は、この地域の経済をより急速に、しかも相当な程度外国市場を対象にして発展させる場合においてのみ可能である。他方、日本との互恵的経済協力の発展は、ソ連の重要な国民経済的、政治的課題の解決を速め、極東の経済的ポテンシャルを強化することに相当な程度資することになろう。

遅れる極東の経済開発□ソ連東部地域の経済発展の全般的特徴をみる

と、極東がソ連のなかで、やはり発展の相対的に遅れた地域である実情は隠すべくもない。一九六六年にモスクワで出版された「極東」と題する本のなかでは、巨大な天然の富をもちながら、極東の経済的発展と開発が不十分であるのは、主として、極東地域がソ連の主要な、もっともよく開発され、経済的に発展した地域から非常な遠隔地にあることによる点が正しく指摘されている。すなわち、「この地域では、自然の豊かさの利益が地理上の位置の示す多くの欠点と対照的な矛盾をなしているのである。例外は生産物を輸出している部門、とくに太平洋地域の近隣諸国へ生産物を輸出している部門である」。

輸出依存型経済の創設□ソ連国家計画委員会生産力研究会議委員のA・B・マルゴリンとN・V・ディミトリィエフの両名も同じ結論に達し、次のように述べている。すなわち、「計算の結果は、中央アジア諸地域、カザフスタン、ウラルなどの西方へ向けて搬出する目的で、極東のバラエティに富む原燃料資源と木材資源を開発することが効率的でないことを示した。極東のこれらの産物は、シベリアの同種の産物と競争することができないし、〝シベリア〟という広大なひろがりをもつ地域的〝障碍〟に経済的に打勝つことができない。極東の経済発展に可能な基本的方向は、（中略）ソ連のこの地域の地理上の位置、すなわち、地球の全人口の四〇％以上が居住している太平洋地域諸国との地理的近さを、全面的に利用することに尽きる。この点から、極東経済を輸出依存型なものにした場合、極東が辺境に位置することは、ソ連の他のあらゆる地域と比較して、欠点から転じて卓越した利点となるのである」。

以上に引用した極東経済に関する二つの権威ある研究のなかには、ソ連のこの地域の巨大な天然資源の急速な開発を妨げているきわめて重要な矛盾が正しく明示され、経済を輸出依存型に特化することを通じて、この矛盾を一掃する道が示されている。

極東経済の輸出依存型への特化の問題が本格的に提起され、研究され始めたのは、一九六三年末であり、ソ連科学アカデミー・シベリア支部の機構のなかにソ連国民経済輸出特化問題研究グループ（のちに研究室となる）ができてからである。

輸出依存型経済と極東の位置□極東学者のL・A・フストフスキーは、ソ連国内の諸関係だけ、あるいはそれを主体にした極東の位置づけは、極東の経済発展を人為的に制約するものであると正しい指摘を行なっている。もし、ソ連東部地域の経済を強力に向上させるためばかりでなく、ソ連と太平洋地域諸国との互恵的経済・貿易関係を確立し、国家関係を強化するための経済的基盤として極東をとらえるならば、主として輸出を目標とした工業部門と農業部門を極東に創設し、発展させるために極東が占める非常に好ましい地理上の位置を利用するのが当然である。

輸出主体の極東経済開発の優位　輸出型経済への特化は、極東経済地区にある多大な天然資源の国民経済活動への導入を急速化するものである。そうでなければ、南ヤクートの原料炭、ヤクートおよび極東の鉄鉱石、ウドカン銅鉱床、ヤクートおよびサハリンの天然ガス、その他さまざまな種類の有用鉱物が、予見しうるごく近い将来に積極的に開発されることはないであろう。そのうえさらに、極東地区における輸出を目的にした林業発展の経験が示す通り、輸出への特化は開発される原料資源の利用改善、すなわち、生産の量的拡大と経済効率の引上げを促すのである。

以上述べてきたところから明らかな通り、極東の巨大な潜在力は、その計画に従った、目的を明確に定めた輸出への特化によって、全ソ的規模と国際的規模において、もっとも効果的に開発されうるのである。

極東経済が外国市場に過度に依存することも、おそれるべきではない。なぜならば、社会主義的経済運営方法の優位を考えに入れた貿易計画のなかで、極東の巨大な天然資源と非常に有利な地理上の位置は、隣接する巨大な日本市場においてばかりでなく、太平洋地域のその他の諸国においても、極東の生産物の競争力を高めているからである。

開発資金・資材調達の重要性□問題の核心は、第一義的に重要な国民経済的課題を遂行していく上で、必要な資材と資金を分割して利用することなく、極東の輸出部門発展を速めるために必要な補足的な資材と資金を調達することにある。

日ソ経済協力構想の展開と具体化　極東の発展は、おそらく、外国との経済協力を通じて、とくに日本おおよびその他の太平洋地域諸国との経済・貿易関係の拡大を通じて容易となり、急速化することになろう。このような目的をもった日本との経済協力という構想は、実際には、ソ連の諸機関と日本の会社との間で結ばれた多数の協定に、すでに具体的に反映されているが、その基本的内容は次のようなものである。

(1) ソ連は、日本の輸入需要を考慮に入れた上で、ソ連東部地域における一定の経済部門の発展をはかる（たとえば、極東の森林資源開発がそれである）。

(2) 日本は、この目的のためにソ連が必要とする日本製の設備、機械、工業製資材、その他の商品の買付けに必要なクレジットをソ連に供与することによって、目指す経済部門の発展に参加する。

(3) クレジットおよびその利子の支払いは、長期契約に基づいて、開発された部門の生産物（この場合は木材）の一部をソ連から日本に引渡すことによって実施される。長期契約は、クレジット完済後も効力を有することになろう。

(4) 目指す経済部門の発展に直接必要な商品（設備、機械、工業製資材）のほかに、日本は、ソ連に対して、やはりクレジット供与の条件で（返済は分割払い）ソ連市場の需要に役立てるための消費物資を供給する。これら消費物資をソ連国内市場で販売することによって、補充を目的で引入れた労働力に対する労賃の支払い、居住地や道路、学校、その他さまざまな施設の建設に必要な資金が形成されるのである。

日ソ経済協力の利益□以上のような内容に基づく協力によって、東部地域開発計画のなかで、もともと見込まれている資材と資金を引出して使用せずに、目指す部門を発展させることが可能になる。すなわち、目指す事業がかなり自給自足的に、個別的に実現されるのである。さらに、クレジットが完済された次の段階では、開発された部門の生産物を輸出して得られる手取売上金を当の部門のいっそうの発展（あるいはほかの部門の発展）に振向けることができるし、その他の任意の国民経済的目的に利用することもできるのである。

これまでの経験が示す通り、上述の日ソ協力形態は日本側をも満足させている。なぜならば、日本経済の死活を制するほど重要な商品の輸入を確保するため、日本は外国にクレジットを供与したり、投資したりする必要があるからである。上述の日ソ協力では、ソ連の諸機関をパートナーとすることによって、日本側は期限を厳守したクレジットの返済、長期契約の厳密な履行を信頼できるのである。

かくして、上述の形態を基盤とする日ソ経済協力の発展は、両国に明らかな優位と利益を与え、両国が、国際分業の優位と地理的近さの利用を通じて、それぞれ自国の重要な国民経済的課題を解決していくのを可能にするのである。

（未完、以下次号）

スパンダリヤン氏（ヴィクトル・ボリソヴィチ）（一九二一～）ゴスプラン委員。パーク生れアルメニア人。モスクワ大学卒。一九四九年より外国貿易省勤務。一九五五年東南アジア・中近東局長、第二次大戦では大尉で対独戦線で戦う。一九六七年九月駐日ソ連通商代表部首席。一九六九年八月ゴスプラン外国貿易局長。一九五五年訪日、一九五七年訪日、日ソ通商条約と貿易支払協定の交渉に参加。

総合建設業

株式会社 **地崎組**

代表取締役 地崎宇三郎

札幌本社 札幌市中央区南4条西7丁目6番地
TEL (代) 511—8111

東京本社 東京都港区西新橋2丁目23番1号
第3東洋海事ビル TEL (代) 436—3171

支店 営業所 東京・大阪・名古屋・仙台・広島・福岡・横浜・函館・室蘭・苫小牧・小樽・旭川・釧路・網走・千葉・静岡・甲府・水戸・京都・神戸

日ソ貿易はすぐ2倍になる

シベリア・極東経済調査第1回シンポジウム

社団法人・北方圏調査会は、北海道開発庁、北海道の委託をうけ、さらに札幌市をはじめ、函館、小樽、旭川、釧路、室蘭、苫小牧、帯広、北見、稚内等道内の中核的十市の賛助をうけて〝シベリア・極東地方の経済調査〟を行なっている。この調査は、北方圏調査会が四十七年度の重点事業として、ソ連経済の権威である成田精雄ソ連東欧貿易会常務理事ら五氏に北海道から北大経済学部・早川泰正教授を加えた六氏を調査委員に委嘱、それぞれ専門的な立場から調査、研究を行なってもらっている。

四十七年度末までに調査報告書を出す予定だが、それを前に九月五日、札幌市中央区北四西六、毎日新聞(北海道)会議室で中間報告を兼ねたシンポジウムを開いた。

このシンポジウムで、成田、小川両調査委員は、チュメニ油田からパイプラインを敷くようになれば、日ソ貿易はすぐ二倍以上にはねあがると明るい見通しを述べ、また早川調査委員は「共通の風土、気候を持つ北海道は、北方圏の技術の集積地、センターになるだろう」と注目すべき報告を行なった。このあと質疑応答など活発な論議が展開された。これはシンポジウムの誌上録音である。

報告者(調査委員)
成田精雄(ソ連東欧貿易会常務理事)
早川泰正(北海道大学経済学部教授)
小川和男(ソ連東欧貿易会、主任調査員)



〔成田委員の報告〕

私はこの五月から六月にかけてソ連に行っていた。モスクワばかりでなくソ連の各都市も視察してきたので、その印象から最近のソ連の実情や現在のソ連の生活について話してみたい。故フルシチョフ首相は一九六〇年十月の第二十二回党大会で経済二十カ年計画を組んだ。これはおおまかにいえば、一九八〇年には鉄鋼の生産は二億五千万㌧になる。また一九七二~三年頃にはソ連の経済力はアメリカと同じくらいになるなどという構想であった。この二十カ年計画は単に党大会で認めたばかりでなく、党の綱領に書きこんで党としてはこの計画を是が非でもやりとげなければならないことを、みんなに納得させたのである。

恨まれたフルシチョフ

この大計画を達成させるには金が必要である。そこでフルシチョフ首相は国民生活をある程度犠牲にした。このためフルシチョフはソ連国民から非常に恨まれた。これが今でも問題になっている。もう一つは資本主義と社会主義の競争において、どうすれば社会主義が勝つかということである。革命や戦争に訴えることなく、平和的に勝利を収めるのは、アメリカの経済力よりソ連の経済力が勝っていることを示せばよい。そのことによって自由圏から社会主義国へかわる国もふえるであろうと考えた。そのためにはソ連の経済力が一番先に世界一になることだ。他の社会主義国を犠牲にしてでも達成すべきであると考えた。そのひとつが中国である。ソ連の経済が先行するため、中国はある程度犠牲を惜しまないのみか、中国はソ連の踏台になるべきだと考えた。それが中国の強い反発をうけたのである。そんなことで一九六四年フルシチョフが失脚したが、その次のブレジネフ書記長やコスイギン首相がまず最初に考えたのは〝国民の生活をいかにしてよくするか〟ということであった。そして繰返し繰返し、このことをいってきている。

良くなった衣・食・住

それではソ連の生活は現在どのくらいなのか。

まず住宅問題だが、ソ連の住宅事情は日本よりひどい。しかし、最近モスクワは非常によくなった。今まで各省が自分の官庁のアパートをもっていたのだが、それがモスクワ市の管理に移された。また国民が住宅建設組合をつくることも可能になった。いまモスクワで一軒の家を建てるのには、まず千ルーブル(約三十七万円)の金を積み、あとは年賦というのだが、その千ルーブルがなかなかできない。レニングラードやキエフなども回ったが、日本と同じように分譲住宅もある。また自分の職域をとおして申込むと住宅の割当てもある。その配分は夫婦と子供一人までは一部屋である。(一部屋といっても日本の十畳くらいはあるが…)四人以上になると二部屋もらえ、最高は四部屋であるが、その割当てが大変である。しかし家賃は非常に安い。

衣料はどうか―。これはかなり良くなってきた。十年くらい前までは勝手に選んで衣類を買うなんてことはできなかったが、今ではかなりの選択も可能になったし、余ったものはバーゲンセールで半値くらいで売っているところもある。

食糧はどうか―。一昨年くらい前までは地方では、二週間に十日くらい肉なしデーだった。そのかわり冷凍の魚があった。ところが現在はバザールが都市に出来た。モスクワでも三―四カ所ある。コルホーズの自留地の生産物を直接売る市場だが、ここで野菜や肉、魚などを売っている。朝早く、夜も遅くまで市場を開いている。このようにこの十年くらいでソ連の生活は大変良くなった。

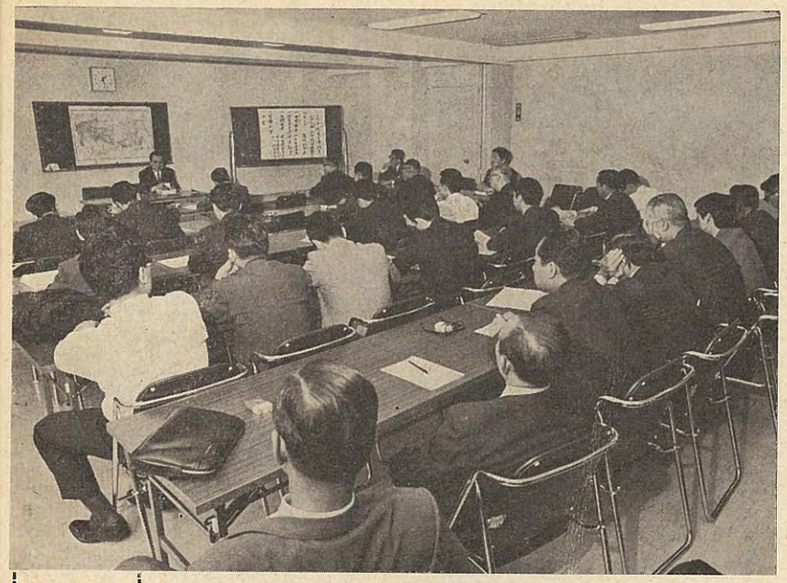
米ソ貿易は伸び悩む

私がモスクワにいたとき、たまたまニクソン大統領が訪ソしていたが、ソ連はニクソンを非常に好遇した。ニクソン大統領一行はロシア・ホテルに泊まったが、そこではロシア人が一度も食べたことのないグレープフルーツなどを出した。ソ連では初めてグレープフルーツを見たという人が多かった。ニクソン大統領が帰ったあとはグレープも全部姿を消した。

ニクソン大統領の訪ソがソ連の人人にあたえた反響は大きかったが、米ソの貿易が伸びるとの考えをもっている人は少ない。私は政府の高官ともたびたび話合ったが、彼らは自分の意見ではないとの前提に立ってこういっていた。

「ソ連がアメリカから買うものはたくさんある。しかしアメリカはソ連から買うものが少ない。だから米ソ貿易が日本や西独など他の国の貿易を抜くようなことは考えられないだろう」

しかし雪どけというか、新しい国際関係のなかでソ連はアメリカと組むということを真剣に考えている。



盛況だったシンポジウム会場

自由圏諸国と経済関係を深めることで、ソ連は戦争を避けることができるという気持が国民のあいだに次第に浸透してきている。実際ソ連人ほど戦争の嫌いな民族はいないと思う。戦争を避けることが全国民のいつわりのない希望である。したがって、ソ連が今後西側諸国と経済関係をますます深めていくことは、間違いのないことと思う。

五年後には四千万㌧の石油が

日本とソ連の経済問題では、いまなお石油の輸入が進行中である。チュメニ油田はどんどん採掘量がふえ、ことしは約六千五百万㌧だが、一九七五年には一億三千万㌧、一九八〇年になると二億三千万㌧くらいにまでなるであろう。パイプラインでナホトカへもってきて、そこから日本へ来るのだが、量は初めの四～五年は二千五百万㌧くらい、それからだんだん増して四千万㌧にする。八月の交渉結果によると、ナホトカまで四千三百㌔㍍のパイプラインを敷くため十億㌦の金を日本が提供する。ソ連側の計算によると来年三月にこの契約が結ばれると、一九七八年頃には日本に最初の石油が送られるであろう。それから四年後には四千万㌧に増やす。その大部分が北海道にくるといわれている。そうなれば北海道の経済は石油と結びついて、エネルギーの需給に大きな影響をうけることになろう。

チュメニ油田問題は初め日ソ間で話合いを進めていたところ、いつのまにかアメリカが入り込んできた。その理由の一つは、アラスカの油田などの経験からアメリカが世界で一番進んだ採掘設備、技術をもっていることである。採油技術ではアメリカが世界の先端である。その設備をソ連側は十億㌦出しても欲しい。日本からのクレジット十億㌦にしても、全部日本から買うのでなく、必要であれば他の国からも買おうということである。そこで日本側は、日ソ間の話の決着をつけて、その一部をアメリカに渡すことはよかろう。話は日ソ間でするが、仕事にはアメリカが参加するということである。

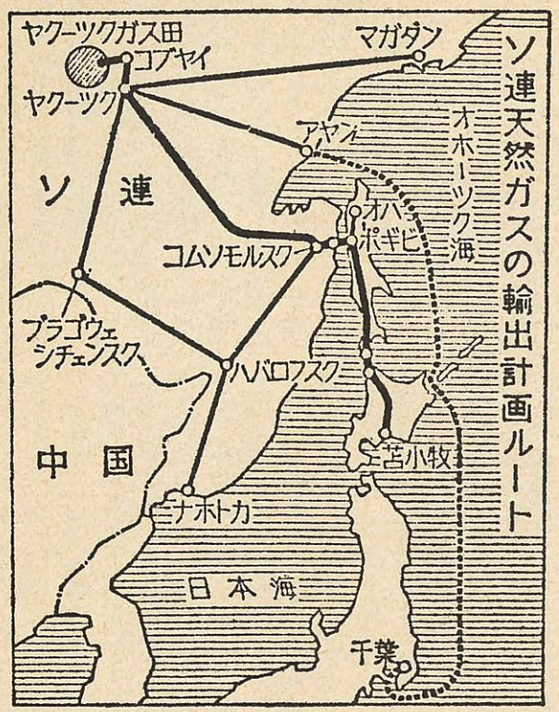
もう一つの理由はナホトカ付近にターミナル・ステーション、タンク設備などを造るのだが、その場合アメリカから技術的援助を受けることが必要である。この二つがアメリカと手を組まざるを得ない大きな理由である。

値段の取決めが焦点

イルクーツクからのパイプラインは一、二二〇㍉㍍のものを使うが、これだと年間七千万㌧の石油が運べる。約三千万㌧の余裕があるが、それはソ連側の需要にあてることになろう。極東地方では、内陸地の消費の他に、漁船隊、軍艦、商船隊などを含めると現在年に九百万㌧の需要がある。十年先になればもっと増えるであろう。ソ連は日本に四千万㌧、さらに自分の国で使う量、将来のことなどを考えてパイプの太さを決めたのである。

石油の性状については、まだはっきりした回答がソ連側から出ていないが、日本側では硫黄分を一%にとどめるようにという要求を出している。チュメニ油田（西シベリア低地油田）のうち一%以下の硫黄分が少ない石油は東側の油田から出ている。なるべくそこからのものを欲しいと要求しているのだが、ソ連側は値段を決めるときに話合おうと逃げている。

石油プロジェクトがまとまり年間四千万㌧の石油がくることになれば、値段はおよそ一億㌦、これを毎年現金で払わねばならない。ソ連は日本からものを買っていく。そうなれば日ソ貿易は、石油だけでも、いっきに往復で十億㌦以上にはね上がることは確実である。契約すればすぐパイプをソ連に送る。その他ポンプ設備、消費物資などの経済協力により、日ソ貿易は再来年あたりから急速に活発になるだろう。



天然ガス埋蔵量世界一誇る

天然ガスの輸入については、初めサハリンからくる予定がいろんな事情でこなくなったが、これでソ連との輸入問題が終わったわけではない。大きな埋蔵量があることは確かである。

ソ連は世界一の十七兆立方㍍の埋蔵量をもっており、自国ばかりでなく東欧諸国、イタリア、オーストリア、西独、フランスにも送る。特にイタリア、オーストリア、西独とはすでに契約ができている。アメリカもこの一年の間にこの話に入ってきた。エネルギー資源の事情が悪化し、十～二十年先が不安になってきたためである。フィンランドの背中合わせになっているムルマンスクの近くにある不凍港から、年間百五十億ルーブルの天然ガスをアメリカが買う話が進んでいる。ヤクーツクにあるヤクート天然ガスをカリフォルニアへもってくる可能性もあるという認識からアメリカの会社がソ連に話かけた。われわれが以前から計画していた苫小牧までもってくる案とは関係なく、米独自の開発案を示したのである。だから日本側がアメリカに〝待った〟をかけ、ソ連も同意したのだが、日米の話合いを条件にしてソ連はアメリカに日本に見せたことのない油田を見せている。今はそういうデリケートな情勢にある。

最近では、ソ連はヤクートの天然ガスを三百億立方㍍産出し、そのうち二百億立方㍍を外国へ輸出する。日本へは百億立方㍍だから、暗にアメリカに百億立方㍍輸出することを示し、日米の話合いを促している。安西さん（東京ガス会長、安西浩氏）が十一月末か十二月初めにモスクワへ行き、もう一度この問題について話合う。ハバロフスク～サハリン～稚内～苫小牧のルートについては、今のところソ連側は何も意思表示していない。ひょっとしたらナホトカから船積みすると言うかもしれない。

天然ガスの値段はカロリー分によって決まる。ヤクーツクの天然ガスは多くみて八、〇〇〇カロリーとあまり高くない。サハリンのは七、七

○○カロリー。なぜ差があるかというと、成分によって熱量が違ってくる。いま、アラスカからきている天然ガスはカロリーが高い。掘出す時の値段は二～三㌦（一、○○○立方㍍）。あとは運賃、その中で大きなものは液化料。液化し船に積み、再ガス化するわけで、液化料に五㌦くらいかかる。

生ガスで有利な北海道

ここで北海道が特殊な立場だということがわかる。長いパイプラインの設備費、保持に必要な経費はかかるが、船積みしないから液化不要のメリットがある。宗谷海峡は最深六○㍍だからパイプ敷設が可能なのであり、北海道以外にはパイプラインでもってくることができない。（津軽海峡は深くてダメ。）

それでは天然ガスはいつごろから来るのか。個人的考えだが、なかなか来ないと思う。いま、シベリア鉄道から南ヤクート方面に鉄道建設中だが完成は五年先とソ連は発表している。谷地、湿地で開発がめんどうであり、ヤクートの天然ガスが入ってくるのは早くて十年先と推定されるが、いろんな問題を片づけたとしても、もっとかかるとみるのが常識であろう。

ところで、この問題になぜアメリカを含まねばならないかというと、一つには、この大事業をなすためにソ連側は二十億㌦くらいを日本に要求してくるだろうが、石油に十億㌦払うのはすでに決定的となっており、しかも早くて一九七八年以後にならないと返ってこない。石油がこないうちに、追いうちをかけるように二十億㌦出せと言われても出せるものではない。そのためアメリカに金を出させて、天然ガスを半分ずつ分けると日本の負担も半分になる。政治、経済事情からアメリカと組む可能性は大である。

第二にはニクソン大統領とソ連が話合い、アメリカがソ連の資源を利用するという可能性が生まれてきたということである。世界情勢は変わってきて、資本主義がどうの、社会主義がどうのというより、もののあるなしが問題になってきた。

三番目には、ソ連の石油の大部分が北海道に入ることは既定の事実だが、天然ガスもパイプで入るとしたら北海道の開発に大きく役立つ。オハからの天然ガスを導入するとき、一、○二○㍉㍍のパイプを敷くはずになっていた。年間二十四億立方㍍だからそれでよかったが、二百億立方㍍を室蘭か苫小牧にもってきて、そこから百億立方㍍をアメリカにもっていくことになるとパイプを太くしなければならない。かりに一、四二○㍉㍍くらい（外径）が必要となれば今まで日本が考えていたよりずっと費用がかさむことになる。

ネルングラ石炭は急がない

石炭についてだが、同じ原料炭という言葉でもソ連と日本では内容が少し違う。日本ではコークスを作るための粘結炭のみを言うが、ソ連では粘結炭に配合する石炭を合わせコークス用炭を全部原料炭と呼んでいる。ここでは粘結炭について話を進めたい。シベリア鉄道から北四百㌔のところにチュリマンという町があり大炭田がある。年産約三十万㌧で、主に火力発電に使っている。そのなかのネルングラ炭鉱に良質の強粘結性炭がある。おととしの八月に日本の製鉄所の代表者が調べてきたが、その後なかなか話が進まない。その理由は第一に、日本の鉄鋼業界は過剰設備をかかえ銑鉄を増産する立場にないから、おいそれと買う気にならないということである。だから事情を確かめてゆっくり買っても遅くないし、石油や天然ガスとちがってアメリカが買うということもない。

もう一つはネルングラの良質炭だけに限ると年五百万～八百万㌧くらいのもので、どうしても買わなきゃならないほどの数量ではない。

さらにはこの炭田が特殊だということ。厚さが四十㍍の大炭田なのだが、その上層に粘結炭でない、いろんな石炭が重なっており、露天掘りしているのだが、この上層の石炭も日本で買ってくれないかと言っている。エネルギー革命の時代にこんなことまでして石炭を買う必要はない。

また品質についての疑問をもつ人も多くなってきた。ソ連はそれを否定しており、そのためソ連から担当者が来て実験して証明しようといっている。今まで北海道ではクズネック炭を買っているが、これはソ連では最良質の原料炭であり、クズネック炭なら買いたい、しかしネルングラの方をしぶっているのだが、私は近い将来必ずこちらも来ると思う。一番使うところはクズネック炭と同様、新日鉄の室蘭製鉄所である。なかなか話が進まないが、一九八○年頃には石炭も来るようになるだろう。

今のところ石油の輸入が一番実現性があり、政府も金を出す約束をしている。これがまとまれば日ソ貿易に大展開がくる。現在の八億㌦が一躍二倍以上になるだろう。

天然ガスはアメリカと組む可能性があるが石油より話はおくれる。北海道までパイプでこないでナホトカから船積みされることになれば、北海道には何ら利点がない。問題は値段だが、どこでも売手が出ているので今のところ買手市場でありソ連と緊密な話合いを要する。百億立方㍍日本にくる日がいつかは算定しなければわからないが、まあ十年先であろう。

原料炭にはいろいろな問題があるが、私はネルングラ炭がクズネック炭と似ている気がするので、夕張炭と合うように思い比較的楽観している。その他、日ソ貿易の対象になるものとして木材、鉄鉱石などがあるが、時間もないので結論に移ろう。

景気変動のない国

一般的にソ連は景気変動がない国である。毎年、計画どおり七～八％の工業発展を見込んでいる。だがバカげたところも多い。経済が発展しない理由の一つには、すべての工業原料を自給していることがある。日本なら世界の良いものをどこからでも持ってくるわけで、向こうの資本、労働力を使っている。ソ連ではただでさえ足りない労働力なのに自給でやっている。現在、開発しなければならないのは辺ぴな場所ばかりで開発費もかさむ。もう一つの理由に、生産技術が劣っていることがあげられる。他の国で完成したものをてっとり早くもってきて細工するのが日本であるが、ソ連では自国の学者の研究、発明もすぐ生産技術には結びつかない。これは経済組織の問題である。だが一九六○年代から次第に外国のものを買入れるようになってきており、急に進んできた変化でソ連の産業革命と言えるかもしれない。同時に自分の国の産業をそれに合わせて変えねばならない状態となった。外国との貿易をどうしても進めねばならないようになった。条件さえ良ければどこの国とでも組もうという変化がこの数年来急に起こってきた。日本の企業がホテル、レストラン建設を話しかけたが、バイバコフ副首相は、まず国内法を改正しなければ外国との企業協同はできそうにもないと答えている。だが、ソ連と資本主義社会の企業が協同でやるというアイデアが自分たちの頭に浮かんでいるということは言っている。ソ連の企業はすべて国営で競争はない。景気変動もない。将来日ソ間で企業を協同でやるとなれば、毎年平均の利益を保証することが大切であろう。資本主義社会と社会主義社会の提携が実現すれば戦争もなくなるであろうし、ひょっとしたらそんな時代が来るかもしれない。

日ソ貿易は二十億ドルに

〔小川委員の報告〕

昨年の日ソ貿易は八億七千三百万㌦であったが、チュメニの石油を輸入するようになると、すくなくとも五年後には二十億㌦くらいになることは確実である。



日中貿易、五十億㌦説が最近出ているが、中国の貿易額が八十億㌦程度しかないのに、日中貿易がそれだけ飛躍することは経済のスピードからみてまず不可能である。日中貿易は楽観、悲観両論があるが、これは不確定な要素が非常に多いためである。そこへいくと、日ソ貿易の場合は、チュメニ石油の契約が来年行なわれれば、日本からすぐにもパイプが輸出され、さらに各種機材や消費物資が出されることになり、日ソ貿易が近い将来二倍以上にはねあがることは確実である。

ブレジネフ共産党書記長は、昨年から始まった五カ年計画策定に際しても「日本との経済の一層の発展を期したい」と述べており、貿易相手国としての日本を非常に重視している。七○年代に入りソ連は先進資本主義諸国との経済関係、貿易の拡大、科学技術交流を既定の路線としているが、特に日本を重視している。それは日本が最も進んだ工業国であり、極東の隣国でもあるからだ。

経済関係の基本的形態は貿易であるが、三年前から日本は西側最大の対ソ貿易国となっている。これは基本的に両国の利益にたっており、ソ連から日本への原料、資源輸出は日本経済にとって重要な問題であり、日本からソ連への機械設備、消費物資輸出はソ連国民経済全体に意義がある。

極東に関しては、ヨーロッパ・ロシアから消費物資や開発に必要な機械資材を運び、また、はるばる極東の産物を向こうへ運んでいることは効率的でない。このためには外国との貿易に頼るしかなく、それも開発のスピードアップのためには日本との貿易以外に手段はないというのが、ソ連の考え方のようである。

このことは最近出版された〝極東の諸問題〟と題する雑誌に、以前日本の通商代表部の首席代表であり、ソ連外国貿易省の中近東アジア局長を経て、今はゴスプランの重要な立場にあるスパンダリアン氏が〝ソ連と日本との経済関係の展望〟と題する論文で明らかにしている。

（スパンダリアン論文は別掲）

北方圏先取りの三期計画

〔早川委員の報告〕



北海道の立場からシベリア・極東の資源、貿易を考えると、ここ数年の日本経済の動向からみても、北方圏問題がこれからの北海道の重要な方向づけになるだろう。昭和四十六年から第三期北海道総合開発計画に入っているが、四十五年の閣議決定の前、四十四年に道の意見が出され、それが三期計画の骨子になっている。四十三年頃から道で審議していたのだが、当時と今では日本経済は大きく変わって問題点も出てきた。しかし道意見をふり返ってみると日本経済の現在を予想し、時代を先取りしていたようで、この点評価されるべきである。

長期計画として二つのことが強調されているが、その一つは、北海道をあくまでも全国的視野から国土利用再編成に位置づけていることである。田中首相の日本列島改造論とも関連している新全国総合開発計画（新全総）の発想を受けついで、工業の地域的分散、通信、交通のネットワーク編成、二十五万都市構想、広域生活圏などについてうたっている。

もう一つは全国でも初めての北方圏構想で、北方地域の中での北海道というものを考えている。一地域の開発計画の中で、国民経済のワクを超えて国際的視野にたって考えた例は他にない。以上二点がすぐれた発想方法として目立つ。

三期計画自体は昭和五十五年までの十カ年計画で生産所得三倍、鉱工業生産三～四倍、成長率は九・六％くらいを目標としている。この精神は四十四～五年に立案したもので、現在はさらにどんな全国的問題をしょいこんできているかについて考えてみる。四十五年後半の不況、四十六年にはドルショック、そして工業過密、産業公害、資源問題などがクローズアップされてきた。

資源問題については、今までたとえば石油を九〇％以上中近東から輸入してきたように、南方型に片寄っていたのだが、その海外資源分布のゆがみが深刻になってきたのである。資源確保の多極化をはかるため、北方の資源に目を向ける情勢になってきている。

列島改造論と北海道

こうした中で、経済自体が従来の輸出、重化工業優先から生活とか福祉優先への転換をせまられている。

ここで北海道をそういう面から考えるにあたって、日本列島改造論をひき合いに出すことが必要になってくる。新全総の現代版とも言ってよいのだが、重化学工業が産業の最先端であり、それに対する大規模工業基地が中心的構想であった新全総の考え方とは一つ違うところがある。重化学工業の限界、過密化、公害を念頭におき、こういう臨海型工業からむしろ内陸型の知識集約型、高度加工型産業に列島改造論の重点が移ってきていることである。改造論の中にも大規模工業基地としての苫小牧、むつ小川原湖、志布志湾などが載っているが、中心は内陸型の加工工業、知識集約型工業を全国的に分散して、中規模都市をいくつか配置クローズアップされるのは、やはり北方圏構想といま一つは生活文化、すなわち住宅ないし社会開発関連の特殊産業である。

北方資源導入の前進基地に

北方圏構想は三期計画当初の段階ではサハリンの天然ガスが柱であった。年間二十四億立方㍍のガスが宗谷海峡をパイプラインで通り苫小牧にやってくると公害の無いエネルギー革命が起き、北海道経済の革新期と期待されていたのだが、話合いは進まず、それに代わってチュメニ石油、ヤクート天然ガスなどのよりスケールの大きな資源導入の問題がでてきた。これに対する答えは出しにくいのだが、北海道としてはこのへんで道としての態度、道としての政治的立場をもっと考える必要がある。北方資源導入はナショナル・プロジェクトだが、同時に、実現すれば北海道は最も近い前進基地、作業基地としての位置づけを持たねばならないのであるから……。

次に貿易の問題としては、消費財、シベリア・極東向けの寒冷地向け物資を北海道で供給し輸出するという形で生活と密着した北海道に適した特殊産業である。

流通構想がある。現在、三期計画では石狩湾新港がそういう位置づけを受けている。新港の意義は高まっていくだろう。

最後に、それら全部のことを含め、北海道がシベリア・極東に限らず、日本の中の北方圏への窓口としての位置を占めていくことは明らかであり、共通の風土・気候をもつ北海道が北方圏の技術の集積地、センターとなるだろう。住宅産業、暖房設備、輸送機械、自動車、農業器具など、北海道の特殊性をいかして、内陸型工業を考えていく必要性がますます強まっていくだろう。

していこうという考えである。

北海道の立場で考えていくと、まず東部苫小牧の大規模工業基地は全国でも立地可能な唯一のものである。この基地のもつ意義が高まっていくのは確かであるが、同時にそれでは内陸型の知識集約型としてどういう工業が北海道に立地可能であるかということを考えると、堂垣内知事の言うように必ずしも列島改造論の上に三期計画がそのままのっかることはできないような面が出てくる。

では、どのようにして北海道が改造論にのるかと考えると、特殊な条件がそなわっている資源立地型や観光産業があるだろう。そうした中でクローズアップされるのは、やはり北方圏構想といま一つは生活文化、すなわち住宅ないし社会開発関連の特殊産業である。

北方資源導入の前進基地に

北方圏構想は三期計画当初の段階ではサハリンの天然ガスが柱であった。年間二十四億立方㍍のガスが宗谷海峡をパイプラインで通り苫小牧にやってくると公害の無いエネルギー革命が起き、北海道経済の革新期と期待されていたのだが、話合いは進まず、それに代わってチュメニ石油、ヤクート天然ガスなどのよりスケールの大きな資源導入の問題がでてきた。これに対する答えは出しにくいのだが、北海道としてはこのへんで道としての態度、道としての政治的立場をもっと考える必要がある。北方資源導入はナショナル・プロジェクトだが、同時に、実現すれば北海道は最も近い前進基地、作業基地としての位置づけを持たねばならないのであるから……。

次に貿易の問題としては、消費財、シベリア・極東向けの寒冷地向け物資を北海道で供給し輸出するという形で生活と密着した北海道に適した特殊産業である。

なぜ国際価格で折りあうのか

神代方雅氏（小樽市港湾部次長）　天然ガスを北海道までもってくるには距離が長いから国際価格で折りあわないのではないか。

成田委員　チュメニ天然ガスはウラル山脈の東側にあり、その北の方から西独まで持っていって売る約束ができている。パイプラインの長さは五千㌔以上あり、なぜこれで国際価格で折りあうかといえば、生ガスのままで液化の必要がないからである。

同様にヤクート天然ガスを北海道までパイプラインで運ぶのは大変な距離になるが、ハバロフスク～サハリン～稚内～苫小牧を結んでも先の西独までと同じ大体五千㌔㍍くらいで同価格の可能性がある。

もう一つはチュメニ北方のガスは発熱量は天然ガスとしては低い。そえば石油を九〇％以上中近東から輸流通構想がある。現在、三期計画では石狩湾新港がそういう位置づけを受けている。新港の意義は高まっていくだろう。

最後に、それら全部のことを含め、北海道がシベリア・極東に限らず、日本の中の北方圏への窓口としての位置を占めていくことは明らかであり、共通の風土・気候をもつ北海道が北方圏の技術の集積地、センターとなるだろう。住宅産業、暖房設備、輸送機械、自動車、農業器具など、北海道の特殊性をいかして、内陸型工業を考えていく必要性がますます強まっていくだろう。

道としては石油より天然ガスを先に欲しい

中川義雄氏（道開発調整部）　北海道としては現状では優先しているチュメニ石油よりも、ヤクートの天然ガスの方を望んでいる。硫黄分をふりまく石油と硫黄分ゼロの天然ガスでは公害問題からいっても大変な差があるし、エネルギー革命は液体から気体へと移っている。また天然ガスは買手市場じゃなく売手市場のような気がする。天然ガスの需要はますます拡大されている。アラスカ、ボルネオなどにあるといってもっているので同じくらいの価格だと思う。

も輸送の面からコスト高になる。やはりヤクート天然ガスはメリットが多い。道としては苫小牧案に大きな期待をかけており、また立消え』になっているサハリン天然ガスに結ぶということも当然話合いになると思う。石油と天然ガスを比べると北海道の立場としては天然ガスにうんと力を入れてほしい。

簡単にいかない二十億ドルのクレジット

成田委員　石油と天然ガスでは、競技でいえば石油はすでに走り出して、いつ届くかだけが問題になっているので、どちらが先かは決まっている。日ソ間で極東の資源を話合った結果の決定で、政府はこの八月現地を見てきたし、残された問題は石油の値段を決めることだけである。石油は二%の硫黄分をふりまくというが、いま日本にきている石油で硫黄分一%以下というのは少ない。中東のは含有率が高いといって中東の石油を輸入しないわけにはいかない。一、二%の硫黄分は石油につきものだし、チュメニのものは中東のものより硫黄分が少ないので、その点条件はよい。

天然ガスが北海道に必要だということはわかるが、石油を買うことが決定し、さらに二十億ドルもの天然ガス・プロジェクトでは金を払う輸出入銀行の問題にもなるだろう。また、ソ連側は、極東ではまだ百億立方㍍の天然ガスを使う状態になっておらず、石炭をガスに切りかえる設備にも、かなり時間がかかるだろう。

またヤクート天然ガスは何億立方㍍もすぐには出せない。鉱床は五～六つ発見されているが、現在は一つだけ開発され、近くの市や町で使っている。他にも鉱床はたくさんあるのだが、ソ連は六五年か六六年で調査をやめてしまった。二十年先まで大丈夫だというくらいの見通しと正確なデータがなければソ連としても、すぐには出せないだろう。

日ソ共同探鉱ではアニワ湾（南サハリン）が有望

もう一つ、サハリンの天然ガスについてだが、二十くらいの鉱床から少量ずつ出ている程度の埋蔵量なので、それでは効率が低い。ソ連がストップをかけたのもそのためだ。しかし、去年コルサコフ（旧大泊）付近でガスが発見され、南サハリンで初めて可能性が出てきた。

サハリン石油日ソ共同探鉱では日本としてはオハの近くの大陸棚かと思っていたら、ソ連側はアニワ湾をつけ加えてきた。石油や天然ガスはどこから出るかは水ものでわからない。オーストリア、ハンガリーなども第二次大戦が始まる頃やっと足元にあることを知ったくらいである。だが、アニワ湾にソ連側は確信をもっているようで、そこを強調しているのには、それだけの裏づけがあるのだろう。石油があるのなら、天然ガスもありそうだが、これは水ものだし、探鉱してみないと何ともいえない。

（文責記者）

国指定の重要文化財のすべてを網羅する
空前の大図録
毎日新聞創刊百年記念出版
文化庁監修
毎日新聞社編
重要文化財
◉全30巻（第1期17冊）
●第1回配本＝第1巻（彫刻Ⅰ）＝11月上旬刊
●第2回配本＝第7巻（絵画Ⅰ）＝11月下旬刊（以下隔月刊）
予約受付中!!
■カタログ進呈
判型＝B4判変型（34・8×25・7㎝）／特製ケース入り
図版＝単色版・平均720図／原色図版・各巻10図（解説付）
概説・索引など30ページ／総一30ページ
第1期分（17冊）＝各巻定価4、300円・全巻73、100円
（全巻一時払い特価66、000円）
（株）毎日新聞北海道出版販売会社
札幌市中央区北4条西6丁目
〒060　振替　小樽17991

激化するエネルギー戦争

―多彩なソ連の資源外交―

石油は今世紀末でなくなる

ごくおおざっぱにみて、世界の石油埋蔵量は七百三十億㍗といわれ、その三分の一にあたる四百六十億㍗が中近東に偏在している。これに対し、世界の石油消費量は一九七一年で約二十六億㍗である。

人類が石油を消費しはじめてからおよそ百十年ばかりだが、その間の石油の累計消費量は三百三十六億㍗、そのうち一九六〇年から一九六九年までの十年間で百五十二億㍗と、全消費量の五〇%をこえている。近代産業がいかに石油を要求しているかということがわかる。

ところで一九七〇年代には六〇年代の二・二倍にあたる三百三十五億㍗という推定消費量が計算されており、この数字は、過去一世紀以上にわたって人類が使った全石油量に匹敵するぼう大なものである。

専門家は石油の可採可能の指標として、R/Pという数値を示す。Rはその年の年末現在の埋蔵量、そしてPはその年一年間に使った（生産した）石油の量で、その答えは、今後何年間石油が生産できるか、いいかえればあと何年もてるかということである。

現在、世界のR/Pは三十三年と計算されているが、七〇年代末には、おそらく二十年程度になるだろうといわれている。だから、今後新しい油田が発見されないとすれば、今世紀末で、世界には一滴の石油も存在しないことになる。

正に驚くべき石油の消費量である。オイル・アンド・ガス・ジャーナル（OGJ誌＝世界の石油とガス専門誌）によると、一九八〇年代のエネルギー配分を、原油五二・四%、石炭二一%、天然ガス一八・一%、合成燃料五・一%、原子力三・四%と推定しているし、エネルギーの大半を石油に依存する時代はまだまだ続きそうである。

天然ガスはどうなのか―。

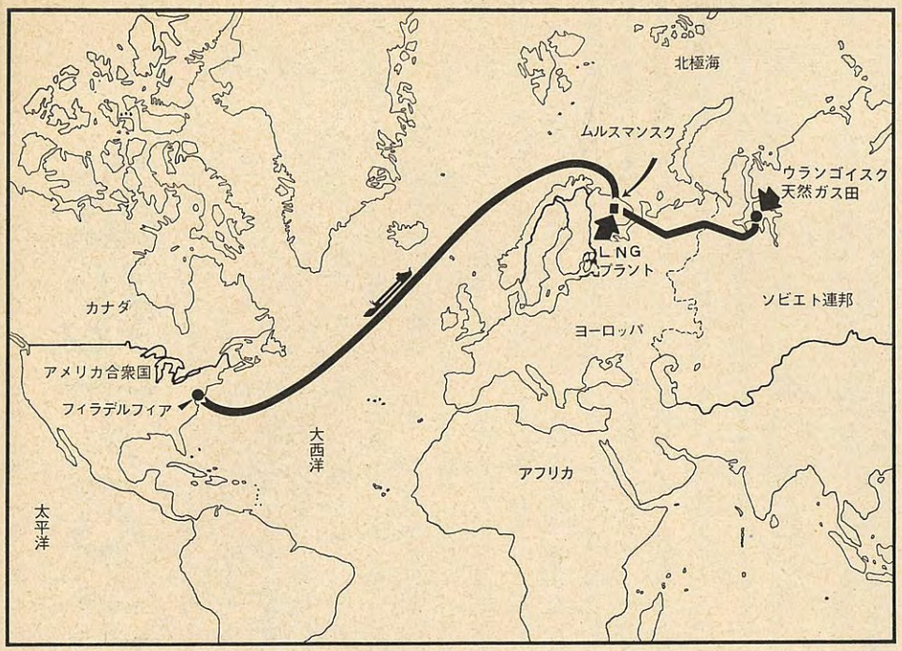
全世界の天然ガス埋蔵量は約四十七兆立方㍍、といわれている。世界最大のガス埋蔵国はソ連で約十五兆立方㍍、次いで中近東が十兆立方㍍、アメリカ八兆立方㍍、カナダ一兆六千億立方㍍といったところがベスト4である。

生産量は一九六九年の統計ではトップがアメリカで五千九百億立方㍍、ソ連千八百億立方㍍、カナダ四百四十億立方㍍、中近東百億立方㍍、オール世界で一兆一千億立方㍍だが、有効に使用されているのは九千五百億立方㍍で、残り千五百億立方㍍は、空しく空中に放散されている。有効消費量からみると約七〇%がアメリカであり、最近ソ連が急激に生産、消費とも増加しているが、中近東産油国のガスはほとんどが、燃やされており、資源的にみれば、もったいない限りである。

公害問題がやかましくなるに比例して、世界各国とも天然ガスに目を向けはじめたため、天然ガスの消費量は急激にふえており、これまた石油と同様、今世紀末までもてるかどうか疑問になってきている。筆者がこのような数字をあげたのは、エネルギー資源はすでに世界的に涸渇してきており、売手市場になっていることを言いたかったのである。

米国は原子力を
過大評価

わが国は石油の九九％を諸外国にあおぎ、天然ガスは皆無に近いので



ソ連天然ガスのアメリカへの輸出プロジェクト

論外だが今日まで〝持てる国〟と思われていたアメリカが、エネルギー危機を迎えようとしているのである。さきごろ全米石油審議会が発表したところによると「一九八五年になると、アメリカはエネルギーの三割を外国に依存し、石油だけでみると、八〇年代の前半には全需要量の半分は輸入しなければならぬだろう」という。

アメリカがこのようなエネルギー危機を肌で感じなければならなくなったのは、原子力に対する過大評価の結果であろうと思われる。〝近い将来原子力時代がやってくる〟との見通しが甘かったことに気がついたときは、すでに遅かった。原子力は環境保全や安全問題等々が作用して、発電所設置のテンポは必ずしも予期したようには進まず、しかもそれが急速に改善するという見とおしは立っていないのが現状である。とすれば、エネルギーの二本の柱である石油と天然ガスにまだ当分依存しなければならない。さきのOGJ誌の推定にもあったとおり、一九八〇年代になっても原子力のシェアは僅か三、四％にすぎないのである。アメリカがその生産力を伸ばしていくためには、不足分のエネルギーを外国に求めなければならない。

アメリカの石油のR／P（可採年数）は一九六〇年の二一・一年から一九七一年には一二年にまで低下している。このままでは七三年ないし七四年をピークに生産が減退するのははっきりしている。

脚光あびる
ノース・スロープ

アメリカの天然ガスは、七〇年現在で六千三百億立方㍍の生産をもち、石油生産量とほぼ匹敵している。すでに幹線パイプラインも総延長百五十万㌔㍍となり、家庭用はほとんど天然ガスにかわり、エネルギー消費のシェアは石油の四五％に次ぎ天然ガスは三二％となり、石炭の二〇％を凌駕しており、さらに石油にとってかわることさえ予想される。しかし、絶対量の不足はどうにもならない壁である。

そこでアラスカのノース・スロープが脚光を浴びてくる。ノース・スロープの石油埋蔵量は約五十五億㌧、天然ガスは八兆立方㍍といわれ、石油ではアメリカ本土よりやや多く、天然ガスはほぼ同量という計算になる。アメリカが五千四百㌔㍍におよぶパイプラインで、ノース・スロープのガスを本土に引っぱる計画を考えるのも当然である。それだけでなく、ソ連の天然ガスや石油に色目を使い壮大なプロジェクト構想をたてたのもそうしたアメリカの家庭の事

情にほかならない。

一方、日本はどうか―。昨年の石油輸入量は二億㌧に達している。そしてこのままのGNPの進捗率で進めば一九八五年には七億㌧の輸入が予想されるという（一九七一年、通産省の発表）。これは、毎日十万㌧のタンカー十九隻が、日本のどこかの港に運び、一日で陸揚げされねばならないという驚くべき量である。

エネルギー資源に乏しい日本は石油に七〇％を依存している。水力発電は一部を除いてすでに限界にきており、原子力だって一九八五年に一〇％のシェアを確保することは、おそらく至難であろう。とすれば、資源をどこに求めるか―。わが国の財界が従来の中近東依存から多角的な視野に立って、特にアジアにおける資源の開発に精力的な動きをしているのも、そのためである。

ソ連はなぜ
貴重な資源を売る？

そこで、浮かびあがってきたのがソ連の石油と天然ガスである。日ソ経済委員会が中心となって、西シベリア低地のチュメニ油田から約七千㌔におよぶパイプラインでナホトカへ運び、これからタンカーで年間三千万～五千万㌧を日本の港にもってくるという大プロジェクト、そしていまひとつは東シベリアのヤクート天然ガスをパイプラインで、ナホトカ、または苫小牧にあげ、ここで液化するという壮大な構想である。

チュメニ油田については、今夏調査団が派遣されてその報告書も政府に提出され、来春には正式に協定調印の運びになるという。一方、ヤクートの天然ガスをパイプラインでもってくるという案も実現性が極めて濃厚になってきた。

世界的にエネルギー資源が不足している今日、ソ連だけが、なぜそれを売り出しているのか。そこにソ連の活発な資源外交の行き方があるように思える。

ここ数年間のソ連のそれをみると――。

まず一九七〇年に、ソ連は西独と鋼管天然ガス交易協定を結んだ。さらにことしも七月初旬に五十億立方㍍の協定に調印し、一九七三年度を初年度に二十年間に、年間七十億立方㍍の天然ガスを西独に売るわけである。またフランスともこの七月、天然ガス供給協定を結ぶことに合意している。この協定は年間二十五億立方㍍、一九七六年を初年度に二十年間輸出するという内容である。またイタリアとの間では、一九六九年に調印されたが、ソ連は二十年間に一千億立方㍍を輸出する。これに対しイタリアは鋼管一億二千万㌦のクレジット、八千万㌦のコンプレッサー、バルブ、建築機械、消費物資を供給するという内容である。フィンランドとは一九七三年から十年間に鋼管六万五千～七万五千㌧の見返りとして、年間最高十五億立方㍍の天然ガスを二十年間供給する（この供給源はチュメニ油田の天然ガスをあてる）などである。したがって現在、ソ連が天然ガスを自由圏に供給しているのはオーストリア（一九六八～一九九〇年まで二十三年間、総量約三百二十億立方㍍）だけである。

一方、共産圏には現在ポーランドとチェコに天然ガスが輸出されており、ブルガリアへは一九七四年から開始され年間約三十億立方㍍が供給される。また将来、チュメニ北部の天然ガスが大量に送られてくれば、将来東独へも輸出される見込みという。

資本と技術
輸入に期待

ソ連が、このように天然ガスの世界的供給国になったのは全世界の二五％というぼう大な埋蔵量を持っているためだが、そればかりでなく、自由圏、共産圏を問わず、鋼管はじめ建設資材や機器をクレジットで輸入し、その見返りとして天然ガスを売ることにより、自国の産業開発のスピードをあげようというのがそのネライであろう。特に自由圏の資本と技術に大きな期待をもっているように見受けられる。ソ連が世界の輸出市場で、先進諸国に対抗して競争力をもつものは、武器か医療器具のごく一部しかないといわれる。そのソ連が必要な外貨を獲得するための売りものといえば、原材料の天然ガスか石油か木材しかないのである。ことしも農産物の作柄が極めて悪く、アメリカから大量の小麦や飼料用穀物を購入しなければならない。貴重な外貨を使わず、しかも国内を早急に開発するためには〝自由諸国のクレジット〟という褌で相撲をとらねばならぬソ連の家庭の事情がそこにあるように思える。

ブレジネフ書記長が、平和路線を強調する陰には〝国内建設に専念できる国際的環境づくり〟こそが必要なのである。

トンネルを抜けた北海道経済

調査マン景気診断座談会

「長いトンネルをやっと出た感じ。これからの景気基調は上昇をたどるだろう」というのが、北海道金融機関第一線の幹部の一致した意見である。〝北海道の景気はどうなる？〟との命題で、本誌は在札幌の金融機関の調査マンに集まってもらい、景気座談会を開いた。

だが……「これから金融が小じまることも考えられるので、慎重な態度が望まれる」と、そこはお堅い銀行さんのこと。しめるところは、ちゃんとしめていた。

出席者 ―順不同―

日本銀行札幌支店・営業課長　清水盛一
北海道拓殖銀行・調査部次長　田辺芳一
北海道銀行・企画部次長　吉田実
北洋相互銀行・調査課長　石川友
毎日新聞（北海道）経済課長　宮嶋勲
北方圏調査会・事務局長　山中文夫
司会

六月を底に上向く

―全国的に景気が上向きの傾向にあるが、北海道の場合はどうか。現時点をどのように把握しているか、語ってください。

清水　マクロ的にみると、北海道経済は六月を底として七月からやや上向きの傾向にある。これは全国と同じパターンである。しかし各業種が軒並みによくなったのではなくて、かなり跛行的な局面を持ちながら上向いてきた。非製造業部門が中心で、その背景には公共投資が活発になってきた。民間住宅の建設が進んでいる。消費が堅調であるといった要因に支えられている。製造業は公共事業や民間住宅建設に関連のある産業は割合い早いが、主力の鉄鋼とか大手機械、紙パなどはいぜん頭が重く、まだ需給ギャップをもっている。しかし八～九月という最近の時点でみると、鉄鋼が大手機械の受注もやや上向きというか、明るさがでてきた。セメント、丸棒、亜鉛鉄板などは一層明るさが増し、今まで暗かった大手製造業も若干明るくなり、徐々に上向いてきている。

吉田　非製造業、中小製造業を中心にして、それが全体を引っ張った形だから跛行性はまぬがれない。道銀でこの四月にモデルを使って分析した予測では、四十六年度は道内経済は実質一・八％の成長率と発表したが、これを今回は四・三％に高く修正した。四十七年度の見通しは四

月には七・九％と考えていたが、これを九％に修正した。その理由は、ひとつは、四十六～四十七年度はドルショックの影響がかなり大きいと過大評価をした。二番目は三次産業はかなり落込むと考えていたのがそう落込まなかった。個人消費の傾向が相変わらず続いたということである。金融緩和も手伝った。もうひとつはサービス業や公務のウエートが高いという点である。また四十七年度の見通しでは農業生産を平年作とみていたが、発表された指数は一一三とかなり高くなったことなどで、景気は全国と同じように跛行現象はもっているものの定着したのではないだろうか。



写真は景気座談会。左から清水、石川、田辺、吉田、山中、宮嶋の各氏

びっことズレが特徴

田辺　景気の基調はそのとおりだと思う。ただ鉱工業の生産指数からみると石炭のウエートが高く、しかも落込みっぱなしという要因があるが、それを除くと上向きにあることは間違いない。ただ本州に比べて何カ月かのズレがあると思う。鉱工業の生産にしても前年同期をオーバーしたのは七月だけであった。また消費の動向をみても販売関係が年初以来二〇％を超える売上げを示しており、消費の堅調を物語っている。

吉田　鉱工業生産からみても全国の底は四十六年七～九月だったが、北海道の場合ことしの一～三月であり、その間にやっぱり半年くらいのズレがある。

石川　景気上昇のスピードは予想以上である。北洋相互銀行で四半期ごとに六業種に限って中小企業の動向を調査しているが、ことしの一月現在で、四十七年の見通しのアンケートをとったところ、ことし売上げ増になるというところが四八％だった。四十五～四十六年が六〇％くらいだったのでかなり慎重感があったと思う。その他純利益、設備投資の増加など総合判断でも四十七年度の上昇は二九％くらいと、四十六年の四一％に比べてかなり下回っていた。しかし実算でみるとかなり上昇基調がみられる。特に一～三月は例年ならダウンするのだが、ことしは製材業、建築業、小売業など良くて、回復に転じた兆しがみられた。四～六月も製材、建築などが引っ張っているし七～九月は三百程度の企業の中間報告を集めてみても、去年より増加というのが六割以上も占めている。最近、中小企業は相当よくなっている。手放しでは喜べないかもしれないが……。

―上昇基調にあるという点では全員同意見ですが、当初、たとえば四月頃考えたものと狂いがあったかどうか―。

清水　私の方はそう予想外とか、意外という感じはもっていない。いろんな経済指標が集まらないので調査マンはいらいらしていた向きもあったと思いますが、やっとトンネルから出てきたという感じだろう。

田辺　拓銀でも四十六年の実績、四十七年の見通しも若干修正してあげています。

石川　北洋相互で昨年、円の切上げが予想されるころ、冷害とあわせて影響の調査をしたが、その時は七二%が影響があるとの回答だった。それがことしの七月の調べでは影響があったというのは三七%だった。結局中小企業はたぶんにムード的であったが、実態はそれほどではなかったといえそうだ。



吉田　従来の景気回復の導き手は輸出産業であり、大企業の設備投資であった。それがこんどは財政支出を主体に、個人消費と民間の住宅建設の三本がとってかわった。主役が交代した。もう出てくるかと心待ちしていた従来の主役がなかなか出てこなかった。

―今度の景気回復のパターンは独得なものといえるか。また、新しいリード役の消費が堅調な理由はなんですか。

清水　私はこんどの景気回復は根がしっかりしていない感じがする。力強さに欠けているように思える。

吉田　中小企業や非製造部門がいいのに、大企業はやっぱり需給のギャップが大きいといわれる。しかし中小企業や非製造業などみんな大企業につながっているんだから、大企業だけがダメだというのもおかしい。だから次第に大企業に浸透していって、大企業が動き、輸出が動けば安定した状態になるのではないか。

田辺　前回不況時の四十～四十一の回復時における全国ベースの寄与率（実績）からみると、民間の需要増が八四%、政府のそれが一六%だった。今回の場合は民間七八・六%、政府二五・八%である。また前回のときの設備投資は二三%もあったが、今回はわずか七%。半面個人の消費は四六%から五七%となり、そのウエートが重くなっている。また輸出は円ベースとして前回一〇%もあったのが今回はマイナス〇・六%とほとんど寄与率がなくなっている。

百貨店売上げ増20%超す

石川　消費直結型経済の動きをつかむため建築着工の伸びを調べてみたが、札幌の場合昨年同期に比べて四月が三%、五月一四%、六月五八%、七月三三%、八月五二%と大巾にふえており、平均しても三〇%となっている。道内主要七都市の場合も北見を除いて二〇～三〇%ふえている。さらに建設関係の前払金が金融機関に預託されているのを調べると、四月が一一%、五月は暫定予算の関係で七・二%減になったが、六月は二七%、七月三七%、八月六三%とふえている。四～七月の公共事業費も七六%が出ている。さらに百貨店の売上げをみると一～三月が二三%、四～六月が一九・八%、七月二六・二%、八月二〇・七%と二〇%ラインをこえるという高い伸び率を示している。こうした消費直結型の経済のなかでの倒産をみると一～九月で四百九件、金額で二百三十二億円になっている。これを昨年同期と比べると件数で二五%、金額で三五%のマイナスになっている。



清水　百貨店の場合は売場面積の増を考慮にいれなければならない。道内十七店で約一〇%の面積がふえている。百貨店の売上げに占める売り場面積の割合いは七割くらいともいわれるから、七ポイントくらい引いてみれば一六～七%ということになろう。

吉田　北海道は第三次産業のウエートが高い。昨年の調べでは全国五五・九%に対し北海道は六二・八%である。これはサービス業も多いが公務が非常に多い。お役人さんの給料もふくめて消費支出が第三次産業を支えているということがいえる。

田辺　百貨店の売上げがふえたからそれが即、消費の伸びとはいえない。全国的に百貨店の売上げの伸びは一五～六%だが…。私の方で推計した個人所得の伸びは一三・六%になっている。消費性向はそう急に伸びることはないからそのへんに踏んでおけばそう大した間違いはないだろう。

返って来ないお札



吉田　いま大企業の不況カルテルが問題になっている。卸売物価は騰勢の一途をたどっているが、これらはカルテルが一応功を奏したと考えられ、それがはずされれば大企業の設備投資が誘発されるのではないか。

清水　需要が出始めたから卸売物価が一・五%もあがる高い上昇率を示しているのだろうが、大企業のカルテルや自主操短などの生産調整が市況を下支えしているのではないか。競争原理が働らいていない。それが何かの要因で、ある部門の需要が伸び卸売物価上昇につながっているところなど、日銀としては非常に気にしている。消費が活発ということは日銀券にも現われている。九月は毎年還収超になる月だが、昨年は五十億円の還収超だったのが、ことしはわずか二億円の還収超にすぎない。返ってくる金が少ないというわけです。全国的にみると、平均残高（一カ月間の平均発行高）が九月は一九・四%のプラスで、この数字は四十五年の一九・五%に次ぐ高いものである。これは沖縄関係などもあったが、そんなものを調整しても一八・一%と高い。平均残高の伸びが対前月比で最も低かったのは昨年十一月の〇・三%だった。それから次第に上向き、それを底として十カ月目の伸びは一・六%である。これは四十年不況の一・一%、三十六年の一・二%。三十三年の〇・七%のいずれよりも高く、上昇テンポが非常に早い。このまま進めば年内には二〇%を超えるのではないか。そうすれば三十六年以来の高い水準になる。

田辺　四十六年の低いときの月末の伸びが一四%台だったが、最近はそれが一七%をこえている。これは閉山ムードにありながら現金需要が非常に多いことを物語っている。

―トンネルを抜けた景気が短期的な展望で、どう推移するとみますか。

清水　基調は上向きが続くという情勢にあるといってよいだろう。日銀で調べた道内企業の設備投資計画でも情報修正の傾向にある。製造業はまだそれほど大きなものではないが、非製造業はかなり高くなっている。公共事業は冬場停滞するが、それまではハイペースで行なわれるだろう。

吉田　主要産業の停滞はあるが農業も一一三という作況指数が出たし、三次産業などが牽引して実質九%程度の伸びは考えられる。

田辺　基調としては上期から下期へ継続すると思う。その背景としては米代が七～十一月に支払われ、それが消費の支えになる。財政面でも、地方交付金の伸びが予想よりも高いと、あとは全国的な景気回復の基調に乗っていくだろう。特に足を引っぱるようなマイナス要因はないように思える。

石川　中小企業のサイドから七月に下期の予想を集めてみたが、七～九月でよくなるというのが四二%だったのが、十～十二月では五〇%と先へ行くほど景気は好転すると見ている。また自分の企業の経済をどのように進めるかという問いに対して、下期はより前向きにするというのが三五%、情勢によっては前向きにやるというのが二六%、もうすこし慎重に見るというのが三六%だった。これは七月段階判断であるが、十～十二月の見透しについては昨年同期に比べて売上げがふえるのが五九%、純利益金がふえるのが五一%となっている。今まで売上げと純利益金の伸びとのあいだには乖離があったが、それが次第に接近してきているのか特徴である。

清水　それとビヘビアというか、前向きな強気な態度が企業に見受けられるというのも景気上向きの要因となるのではないだろうか。たとえば丸棒にしても、これから不需要期にはいるのだが、おそらくはワクいっぱいまで生産し来春の需要期に備える。在庫はふえても金融はいくらでもつくのだから…。そして来春には札幌の地下鉄東西線の着工なども見込むといったことがこういう局面では出てくると思う。

田辺　経済というものは人間が動かすものですからね。景気の波に対する受止め方、それがこれからという考え方ではないですかね。

吉田　たしかにそうですね。企業ビヘビアが鎮静すれば力がつかぬ。そのへんが一番大事なことと思う。

金融は小締まる？

―これからの問題点についてどう考えますか。

吉田　景気は跛行的ながら回復の基調にある。資金需要はますます旺盛になる。しかし日銀ではこれ以上の資金の量的緩和はしないと表明している。とすると一番懸念されることが表面化するような気がする。興信所の調べなどでは、すこしずつだがそれが出てきているように思える。

田辺　基本的には北海道の産業構造というものを頭において考えるべきだと思う。本州から移入というものが北海道の成長を図る大きな要因になっている。北海道のモンロー主義ではないのだが、本州との経済交流が多くなっていくにつけても、二次産業はこれと太刀打ちできず、需要そのものが北海道に落ちるということを企業者一人一人が考えなくてはならぬことではないだろうか。



吉田　最後の帳尻はやっぱり重要なものだ。四十七年度も移入超である。それと一次産業、特に米の銘柄制なども大きな問題点として出てくるだろう。それと石炭だ。閉山交付金はうんと少なくなってきている。

石川　企業がかかえている問題点は景気の回復によっても解決できないものがある。たとえば人件費の高騰、労働力不足である。また原料、原材料、仕入れ価格がかなり上ってきている。それに企業間の競争力が激化したことをあげねばならない。いま調べているんだが、ここ二～三年のあいだに企業間の競争が強まったというのが八一％もある。将来二～三年のうちさらに強まるだろうとみているのが八七％。これが収益の伸び悩みにつながり、景気上昇のなかで常につきまとってくるということを考えねばならない。

吉田　金融緩和のなかでマクロ的には金がだぶついているのだがミクロ的には極めて不足しているという現象がある。これから金融が小じまるという想定で、ミクロの面ではキメこまかに見ていかねばならないと思う。

清水　財政と金融の両面から相当緩和され、その金が株とか土地とか投機的な面にまわっていることはいなめない。各金融機関の資金ポジションに問題があり、せいいっぱい貸すということへの是正があらわれてくるのではないか。顔は一流商社のような顔をしているが、やっていることは今までやったことのないようなことをやっているところがありますからね。

石川　東京で聞いた話だが、八月頃、秋口から金融が小じまるという某新聞の記事が出ると、さっそく融資のワクを拡げてほしい、レートも高くしてもよいという企業があらわれるなどすぐピーンとくる。北海道ではまだそこまでいっていないが、一部の本州出先企業では従来本店で調達していた資金を現地調達に切りかえる動きがボツボツあり、金融が小じまりするという考え方が出てきている。

吉田　苫小牧第三セクターや地下鉄東西線などかなり大きな資金需要があり公共部門が大巾にふえることが予想される。

清水　これは金融機関の資金ポジションを悪化する大きな要因ですよ。ことしの各金融機関の貸出し増は国家財政の伸びなんて問題にならない大巾なものですよ。だから多少はしまってもそれは貸出しの選別ということになるのでしょう。

―どうもありがとうございました。

ガルフという会社

多国籍企業の代表といえば、GM、フォードといった米国の自動車メーカーと並んで「メジャーズ」といわれる国際石油資本会社。その世界への石油の供給の約五〇％を握っているのが、この国際石油資本会社。代表的なものは七社あり、普通セブン・メジャーズといわれている。ガルフ・オイルはこのうちの一社であり、セブン・メジャーズのうち五位にランクされ、米国内の企業としては第十一位にある。

一九七〇年の決算を見ると、売上高は五十三億九千六百十八万ﾄﾞﾙ、純利益は五億五千三十六万ﾄﾞﾙ、従業員数六万一千三百人と、日本の石油会社のトップ会社である日本石油と比較すると、売上げ高が約四倍だが、利益は約百倍という驚異的な高収益をあげている。

総合エネルギー会社

創業は一九〇一年、テキサスで噴出した油井をJ・M・ガッフィーら三人が買取り、ザ・J・N・Mガッフィー・ペトロイアム・カンパニーを創立したのが最初。その後、オクラホマ州のツルサで大油田を当てたのを契機にガルフ・オイル・コーポレーションと現社名にした。一九三六年には多くの子会社を合併し、組織の強化や事業を拡張すると同時に、ガルフ・オイルの今日の原油生産の基礎となっているベネズエラ、クウェートなど海外での油田開発事業にはじめて進出、多国籍企業への道を歩み出した。世界各国に百七十に及ぶ現地子会社を持っており、原油生産、販売を行なっている。現在、世界の全原油生産の約七％を占めており、主力は中東のクウェート原油で、総採掘量の六〇％に及んでいる。石油製品販売量は、アメリカが五五％、世界の東半球が二五％、その他が二〇％となっている。

また同社は、石油化学分野にも進出しており、テキサス州のオレンジ工場は高圧ポリエチレン、ポートアーサー工場はエチレン、プロピレン、クメンなどを生産、その技術力は高く、日本でも三菱化成などが同社の高圧法ポリエチレンの製造技術を導入している。このほか石油以外の鉱物資源の開発にも手をのばし、総合エネルギー会社的な性格も身につけつつある。たとえばカナダ、ニューメキシコでウラン鉱を採掘しており、さらにウラン鉱から進んで、原子力プラントを建設する専業子会社ガルフ・ゼネラル・アトミック・インコーポレーテッドを設立、高温ガス炉の開発などを手がけている。

日ソ共同開発に参加

同社の海外進出のケースを見ると、そのほとんどが一〇〇％資本進出主義を貫ぬいている。しかし日本には、通産省の強い外資規制もあって一〇〇％出資の日本上陸をはたしていない。一九七〇年、ガルフは八百三十九万ｷﾛﾘｯﾄﾙの原油を主に出光興産に販売しているが、これは、日本の総原油輸入量の約六％で、第五位。しかし精製、製品販売の拠点がないのは弱身。このため沖縄返還前に現地に一〇〇％出資の子会社を設立、復帰とともに日本上陸を狙ったが、通産省の行政指導によって、出光興産が四五％、三菱化成が一〇％、ガルフ四五％という出資比率に押えられてしまった。社名を沖縄石油精製といい、精油所を沖縄本島の東約二マイルの地点に位置する平安座島に、月産原油処理一〇〇万バーレルを建設している。さらに同じ平安座島にCTS基の建設を行なっている。一〇万ｷﾛﾘｯﾄﾙのタンク十二基を備え、中東、西アフリカ産原油を三二・六万ﾄﾝのタンカーで輸送し、中小型タンカーに積みかえてアジア各地の自社系精油所や得意先に供給する計画だ。

さらに帝国石油と、日本近海の大陸棚の原油開発を行なうことになっており、常磐、房総沖合の鉱区について共同開発を行なう。また財界が進めているチュメニ、サハリンの天然ガス、石油開発プロジェクトについても共同開発を申し入れてきている。すでに日本から派遣したサハリンの大陸棚開発の調査団には、ガルフの技術者が参加した。こうした日本市場への接近は、ガルフの世界各地における原油開発計画の一環をなすものと見られ、将来の日本の石油市場におけるガルフの地位は大きくなっていくであろう。（毎日新聞東京本社経済部・佐々木宏人）

創刊

（五十音順）

北海道瓦斯株式会社
取締役社長
安西浩

伊藤組社長
伊藤義郎

三ツ輪航空サービス㈱
取締役社長
栗林定四郎

道央信用金庫
理事長
嶋藤忠

桂設計事務所
取締役
境雅敏

丸紅株式会社札幌支店
支店長
桜井明

北海道議会議員
水産委員長
佐々木豊

北海鋼機株式会社
取締役社長
佐藤健二

小樽千秋庵社長
田辺順

㈱辻鉄工所
㈱辻建設
代表取締役社長
辻春四郎

三菱商事㈱札幌支店
参与
支店長
土田弘

石狩開発株式会社
代表取締役
手取眞夫

衆議院議員
中川一郎

長沼町長
中川清

北海道住宅供給公社
理事長
中野正春

稚内市長
浜森辰雄

新日本製鉄株式会社
常務取締役室蘭製鉄所長
原田鼎

松前郡福島町長
深山久三郎

㈱F藤森社長
藤森正章

函館製網船具株式会社
取締役社長
宮崎三善

北海道町村会長
宮野嘉吉

函館市長
矢野康

釧路市長
山口哲夫

三井物産㈱札幌支店
支店長
吉田平太郎

北海道製缶㈱小樽工場
取締役工場長
渡辺久一

小樽市議会議長
渡辺善太郎

祝 季刊北方圏

小樽市長
稲垣祐

岩見沢市長
国兼孝治

さびの効いたソ連のまんが



空びんなど容器を集めますよ。空びんなど持ってきて下さい(「クロコジール」7月19号)



私の住んでいるところはいいところです。人民裁判所(標札)が近いのですぐ苦情が持ち込めるんで…(同)

公害

公害問題はいまや世界的な大関心事。ソ連でもご多分にもれない。

行楽地で空びんや紙くずを放っぽらかすのは、日本人特有の習癖かと思ったら、さにあらず。ソ連でも同病者がいるらしい。そこで〝ガラス容器収集所〟と書いた舟で運ばなくてはならない。これには魚もびっくりして、口あんぐり。

人民裁判所は市民が気がるに利用できるところなので、ちょっとした苦情でもすぐ、かけこみ訴えができる。悪臭、騒音なんでもというわけで……。

〝アメリカに追いつき追いこせ〟というフルチショフ前首相の大号令は、ブレジネフ、コスイギン、ポドゴルヌイのいわゆる〝トロイカ政権〟で修正されはしたが、ソ連が政治、経済、文化などあらゆる部門で飛躍的な発展を意図していることはあきらかである。

現首脳部は政権を担当してから七年を迎え、活発な平和路線外交をはじめ、経済のたてなおしにも自信を持ってきた。とくに昨年から始まった五カ年計画では、消費物資優先を打出し、主要物資の生産もバラ色の数字をはじいた。

そうした計画を達成させるためには、生産の効率化や、労働生産性の促進が必要。そこで技術革新をテコとし、産業の機械化、作業能率の向上、ムダの排除などで、とくに、国民の生活水準を高めようというのがネライではあったが……。

世の中はなかなか計画どおりいかぬのは、社会主義国も、自由圏諸国も同じこと。

なかでもことしは春の雪不足や寒さつづきに加えて、夏の異常な日照りなどの天候異変で、アキレス・けんといわれる農業にひびがはいるという難問にぶつかり、ブレジネフ書記長が、各地に異例の督励行脚をしたほど。

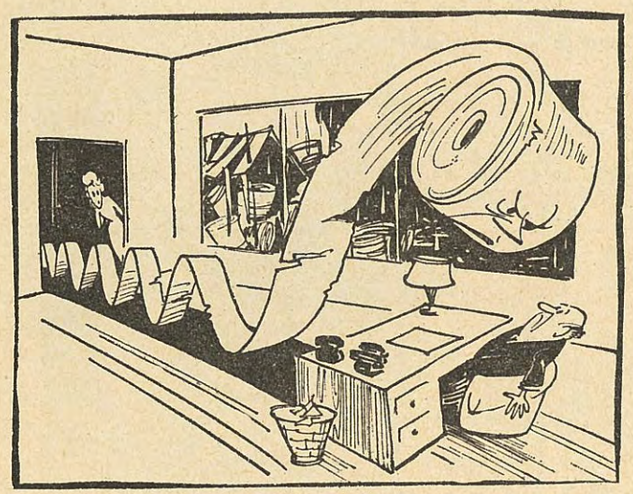
そのうえ、ソ連特有のムダ、スローモーぶり、画一性は拭いきれず、度数の濃いウォツカの製造を禁止するなど、これまた異例の措置で精神面からも引締めに大童だが……。

そうしたソ連の世相の一部を有名な諷刺まんが雑誌〝クロコジール〟をはじめ、新聞のまんがのなかから紹介してみよう。

ムダと画一性



最近の消費者の注文を考慮する、ということがよく書かれています。しかし私どものところでは、この問題にあまり関心がないようです。私の夫は背広では4号もの、息子には同じ型か、それより少し大きめのものが必要です。ところがゼーヤの商店では、そのようなものを見つけることは不可能なのです。‖アムール州ゼーヤ地区オブシャカ村、エレンチェワ。(「林業」紙9月23日)



こんなに扱われては、紙もたまらない(「経済新聞」1972年38号)

ムダもあいかわらず多い。ペルム第一印刷所〝スタチスチカ〟発行(ノボシビルスク市)のイルクーツク執行委第2印刷所で用紙のムダがひどい。紙はなんにも敷かない地面へ直接おかれたり、倉庫には機械の部品などといっしょにつっこまれている。このため多量の紙がダメになり捨てられている。

一方、画一性もあいかわらず、幅をきかしている。消費者の好みや注文はどこへやら。…ということで、洋服の〝ゆき〟がこのとおり短かくて役に立たない。

漫画雑誌「クロコジール」について

ソ連唯一の漫画雑誌で、発行はミプラウダミ紙出版所。発行部数は430万部(1967年)。その歴史は古く、1号から4号は1922年6月4日～25日まで「ラボーチー」(労働者)の名称で、新聞ミラボーチーミの付録として、ついで5号から12号は同年7月2日～8月20日まで「ラボーチャヤ・ガゼータ」(労働新聞)の名称で同名の新聞の付録として発行された。13号からは現在のように「クロコジール」の名称で発行されるようになった。

8月末発行の本年の第23号では通算号数が2033号となっている。ことしは「クロコジール」誌発行50周年にあたるため、50年間の傑作漫画を集めて単行本として出版する、と予告していたが、まだ出ていない。

「クロコジール」誌について、ソ連大百科辞典は「人々の習慣や意義の中にある資本主義の残滓をなくし、人生の否定的現象、官僚主義、高慢さ、追従、俗悪を暴露するのが主要な任務」と記している。

漫画の内容は、ソ連国家の内外に題材をとった辛らつなもので、国内政治も手きびしく批判している。しかし国内政治についての諷刺は、国際政治に対するほど鋭くない、と評するものもある。

漫画のほかにユーモアや諷刺の短文ものっている。最近は経済問題から青少年問題、そして酔っ払い追放、公害など時事に即したものが多くとりあげられ、公式な発表ではあらわれないソ連社会の内情をうかがうことができるので興味深い。外国の漫画も一部転載している。また漫画は一般に難解で、ロシア語に通じ、ソビエト事情に明るくないと、理解できぬものが多い。

ところで雑誌名の「クロコジール」とは動物のミワニミの意味。だが、その由来は明らかでない。東京在住のソ連人に聞いても、一様に肩をすくめて「知らない」と答えるが、ノーボスチ通信記者の一人は「これは私の考えだが……」とことわって次のように語った。

「ワニは大きな口と鋭い歯で人間に食いつく。時には食べることさえある。つまり、漫画で悪い奴に食いついて批判する意味ではないか」。

そういえば「クロコジール」誌のマークはフォークを持ったワニである。フォークで突き刺すことを意味しているのだろうか。

またロシア語で「クロコジールブイ・スリョーズイ」という言葉がある。逐語訳すればミワニの涙ミだが、これはミ空涙ミの意味で用いられる。あるいはそうした意味も雑誌の名称はユーモアをこめて用いているのかもしれない。

(岡田安彦)



▲——クロコジールのマーク

酔っぱらい



何か酔っぱらい追放の本を読みたいんだが……（7月20号）

ソ連では作業能率の向上、党や国家への意識向上のため、先進的な経験を発表する集会がよく開かれる。その会合で有意義な？　ウォツカの洗礼をうけると、かくも盛大にして、貴重な経験をもつことになる。

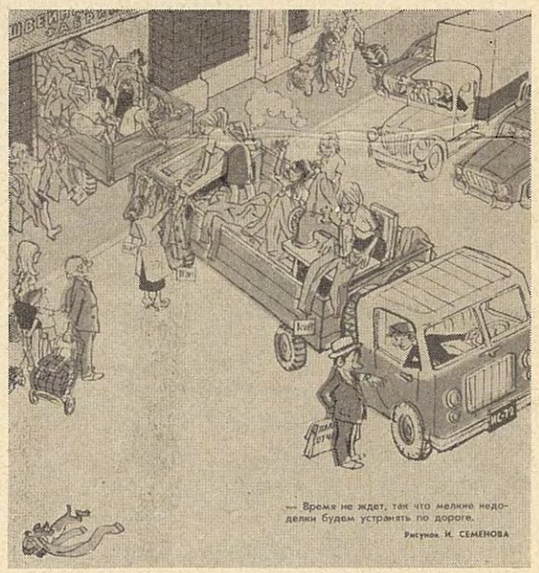
そこでソ連ではこの六月ウォツカ追放のきびしい布告を出した。〝ウォツカをやめてビールやぶどう酒を飲め〟というわけで、一般の小売店や大衆食堂でのウォツカ販売と度数三十度以上のウォツカの製造禁止という、異例の措置……。というわけで、右のマンガの誕生となる。ズボンのポケットからウォツカが顔を出しているのがミソ。（いずれも「クロコジール」）



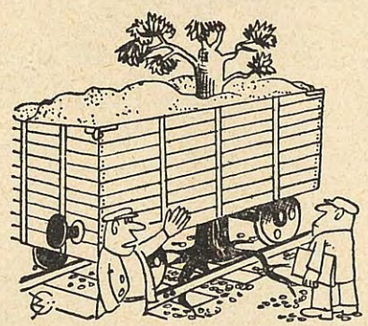
「いい昼食が出たなァ！」
「なんと良い酒をごちそうしてくれたことか！」

ドアに書かれているのは「経験交流集会」

スローモー



時は待ってくれないので、少々のやり残しは運搬の途中で仕上げてしまうんですよ（「クロコジール」7月21号）



貨物を積んだ車両が、長いあいだほっぽらかしてあるんで、作業能率があがらぬことおびただしい。貨車に積んだ肥料がよくきいて、芽がでて、葉になってしまった。

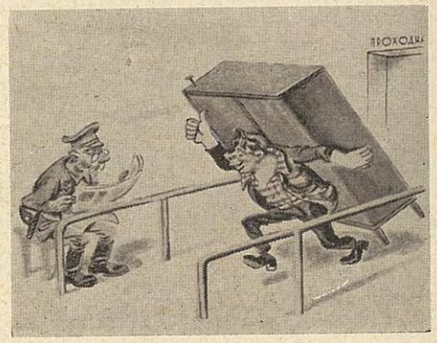
一方、縫製工場でも、納品に間にあわぬとあって、トラックにミシンまで積みこんで仕上げにお忙がし。衣服についている札には〝一級品〟と書かれてある。トラックのそばに立っているのは、計画遂行調査員。

おーい、この車輌から肥料を降ろしてもいい頃だよ（「トルード」9月16日）

ちょっと失敬

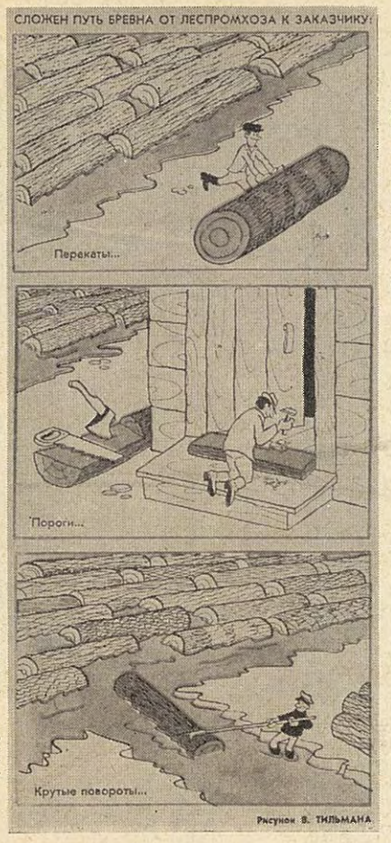


丸太を運ぶにも、タンスを持出すにも、レンガや部品を移動させるのでも、〝ちょっと失敬〟が顔をのぞかせる。この図は、飲み代かせぎの出張販売とある。（いずれも「クロコジール」）



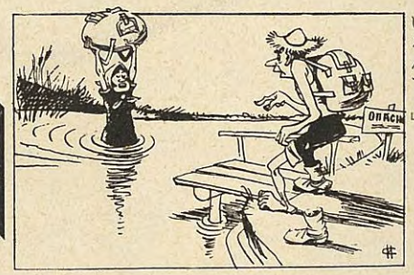
労働者がレンガやクギなど工場の部品を勝手に持ち出し、ヤミ売りして飲み代にあてている。（8月22号）

家具製造工場にて「この釘の持ち出しが許されましたので……（7月20号）

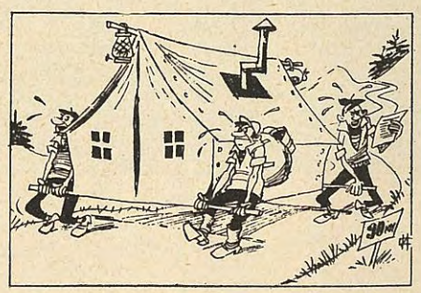


「こうして転がして　家のシキイに　いい丸太だ（8月22号）

旅行



「そこは深いよ。助けようか」
「いや、いいんです。夫が私を肩ぐるましてくれているんで…」



オイ、指導書によると、これは分解できるんだってサ。



いま山道をつけているからなァ

週休二日は労働者にとって、楽しいバカンス。だが、いく先々では、汗が待っている。休暇も〝らくじゃありませんね〟…。旦那の声が水底からボコボコ聞こえるようである。（「クロコジール」7月19号）

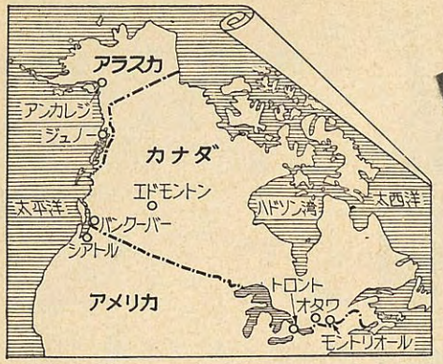
北海道の交流アプローチ

〝北から北へ〟繁栄の道開く



カナダ・トロント市の中心街。
正面の塔は旧トロント市役所。

豊かな国カナダ アラスカ



堂垣内尚弘北海道知事（北方圏調査会会長）を団長にした北海道カナダ、アラスカ経済文化視察団が九月三日から二十日までの十八日間、カナダ、アラスカの主要都市をめぐり、北方圏諸国との親善交流を呼びかけてきた。この視察団派遣を後援した北方圏調査会は、同会事務局員の宮嶋勲記者（毎日新聞報道部経済課長）を同行させ、一行のカナダ、アラスカでの活動ぶりを取材させるとともに、最新の国情、生活ぶりなどを見てもらった。

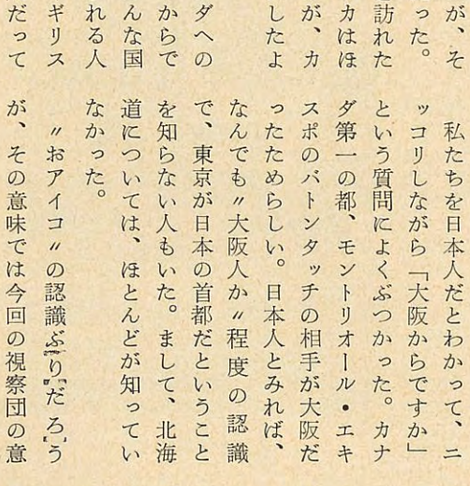
まず相互理解深め

「カナダはいかがでしたか」とたずねられると「すばらしい国」とうより答えようがない。

むろん、新しい国なりの悩みもたくさん見受けられたし、わが国に比べ不便な点もたくさんあったが、それでもなお、魅力のある国だった。

今度、カナダ、アラスカを訪れた親善視察団の一行も、アラスカはほぼ想像どおりの国と受止めたが、カナダには驚き、認識を新たにしたようだった。

というのも、わが国のカナダへの認識は、まことに貧弱だったからである。「カナダという国はどんな国か」と問われて、明確に答えられる人はまず少ない。アメリカかイギリスの属国ぐらいに考えている人だってい



る。もっとも、カナダの方も、日本のことを的確に知っているかといえば、そうでもない。ことにヨーロッパに近い東海岸での日本知識は、まだまだローレベル。

私たちを日本人だとわかって、ニッコリしながら「大阪からですか」という質問によくぶつかった。カナダ第一の都、モントリオール・エキスポのバトンタッチの相手が大阪だったためらしい。日本人とみれば、なんでも〝大阪人か〟程度の認識で、東京が日本の首都だということを知らない人もいた。まして、北海道については、ほとんどが知っていなかった。

〝おアイコ〟の認識ぶりだろうが、その意味では今回の視察団の意義は限りなく大きい。団員が自分の目で、自分の耳で確かめたカナダ像を確立することができたし、相手方も、北海道に親近感を覚え、すくなくとも、今度のアプローチで「一度は行ってみたい」という認識に変わったからである。

カナダ、アラスカ側の北海道に対する考えの変化は、北海道側の新しい発想にあった。日本もそうだったが、カナダ、アラスカのこれまでの外国とのつながりは〝北から南へ〟というのがメーン・ルートだった。地球が暖かい地域から漸次、人がふえていったためか、どうしても縦のつながりが強く、横の提携への考えは薄かった。しかし、今度の北海道側のアプローチは〝北から北へ〟横のつながりの呼びかけだった。

同じような緯度帯での生活環境。そこには寒冷積雪の悩みや未開発地域の問題点が山積している。共通のテーマを、広い国際視野に立って話合い、お互いの発展に結びつけようという呼びかけだった。カナダ、アラスカの政府高官らも、この呼びかけを新しい発想と受止め、心から、あしたの北方圏提携を約束し合った。今回の訪問の大きな成果といわざるをえない。



視察団の成果を語る幹部たち　左端は堂垣内団長

経済文化も手広く

偉い人たちばかりでなく、経済界、スポーツ界、文化界、各界各層の人たちの交流も進めようということも、むろんOK。

経済界では、アラスカとの間ではすでに行なわれている商品見本市か展示会の相互開催を、カナダとも行なうことも合意された。

日本とカナダとの経済的つながりは、もう太いパイプでつながっている。カナダにとって、日本は輸出入ともアメリカ、イギリスに次いで三番目のお客さんだ。しかも、この十年間、イギリスとの取引は約三〇%ぐらいしかふえなかったのに対し、日本は五・七倍もの伸び。来年には、イギリスを追抜き二番目のお客さんになることは間違いないし、連邦政府にある日加貿易懇談会の将来予測では一九七五年の日本との貿易高は二十五億カナダ・ドルとなり、七〇年の五倍にふくれ上がるとみている。お互いに、新しい力強いパートナー意識が芽生えて当然の推移である。

スポーツ界のお付合いも、新しい約束がかわされた。カナダのスポーツ界は、まだ日本ほど競技スポーツが盛んでなく、個々にスポーツを楽しむという形。それでもアマチュアスポーツ大会は、オールカナダで五十種目にものぼるという。

競技スポーツで、カナダをわかせるのは文句なしにアイスホッケー。私たちがカナダを訪れていたとき、ちょうど、ソ連ナショナルチームが来ていた。バンクーバーでの知事招待のレセプションの出席者の出足が、ちょっと悪かったら、地元の人たちは「きょうは、ほんとうに日が悪い。なにせ今晩はソ連とのアイスホッケー試合があり、国中わきかえっているのだから」と欠席者が多いのは当然だというような顔をした。その熱狂ぶりは、日本の野球以上かもしれない。翌日の新聞は、カナダの惜敗を、悲しく大きく扱っていた。

今度、決まったスポーツ交流はスキー選手を北海道に招くこと。これまで、北海道のスキー選手がアルバータ州へ強化合宿に出かけ、州側も快く受入れていたこともあり、同州へ正式に来年三月、札幌での恒例の宮様スキー大会へ、代表選手を派遣してほしいと要請した。

カナダ側は、来年のホルメンコーレン大会（ノルウェー）に選手を派遣するので、この行きか帰りにでもがズラリ。彼らは、今度の使節団に文化団体の代表が加わったことに、文句なしに喜んでいた。そして、レセプションの席上でも積極的に私たちに話しかけてきた。

田上義也道国際文化協会会長、九島勝太郎道文化団体協議会会長らが、カナダ側の文化団体代表と話合った結果では、日本の古典芸能をカナダにもっと紹介してほしいこと、来年カナダでの世界陶器展に北海道からも出品してほしいこと、最新の日本文学のリストを送ってほしいことなどが要請された。田上、九島両文化団体代表は帰国後、北海道や日本の関係団体に働きかけ、ぜひ実現させたいと答え、交流を約束した。

このほか、先住民族の学術資料の交換、文化、学術関係の相互展示会の開催なども、積極的に進めることになった。

カナダの有識者の間では、日本人は、経済的にすぐれているより、むしろ芸術的にすぐれた民族ではないかという評価があった。エコノミック・アニマルでさんざんの日本も、この際思いきってイメージ・チェンジしたらどうだろう。案外ウケるかもしれない。

具体的には、州知事クラスの交流。お互いを知合うのは、もっともっと人々が行きかわねばだめだというわけだ。イーガン・アラスカ州知事も「日本には三度行っているが、残念ながら北海道へは行っていない。それをいま後悔している。今度行くときは必ず訪問したい」といっていたし、カナダ・アルバータ州の首相代理格のホーナー農業大臣も、ゲッティ連邦・州政府問題大臣も「今度の訪日のときは、ぜひ北海道へ行く」と外交辞令なしに北海道との交流に力を入れる姿勢を明らかにしている。

寄ることは可能だとして、十月末までに返事を寄せるといっている。これとは別に、道は二月にソ連極東地方からスキー選手を招くことを、堂垣内知事が今春訪ソしたときに決めており、これと一緒にカナダ選手を招き、北方圏国際試合にしてはどうかというプランも出ている。今度のシーズンにはカナダ・スキーチームの来道が、かりにムリだとしても、来年度には実現の可能性が十分にあり、新しいスタイルの国際大会ができる公算が強い。

スキーもさることながら、柔道熱が非常に高いのには、一行もびっくり。アルバータ州からは「ぜひ柔道を教える使節団を派遣してほしい」という要請もあった。堂垣内知事が北海道柔道連盟の会長で、高段者だというと、目をまるくして「彼は、黒帯か」とたずねてきた。「もちろん。五段だ」というと、あらためて畏敬の念を深めたようだ、若き宰相として人気のトルード・カナダ連邦政府首相も初段の腕前だ。

柔道どころか、空手もよく知っていた。カナダのバンクーバーでは、日本人の柔道場が押すな押すなの人気。バンクーバーの郊外で、和歌山市と姉妹都市を結んでいるスターベストンには、日本スタイルの武道館もある。

海外移住事業団のカナダ移住者名簿によると、釧路市出身の鳴海英忠さん（二八）は、バンクーバーで空手の先生で、りっぱに食べていることになっている。とにかく、柔道、空手ブームは過熱の一方らしく、堂垣内道柔道連盟会長も「これが、親善の橋渡しになるのなら、連盟と相談し派遣も考えたい」ともいっている。

スポーツに国境はない。オリンピックでも各種国際スポーツ大会でも実証ずみのように、新しいカナダ、アラスカとの契りは、スポーツが先行することも考えられる。

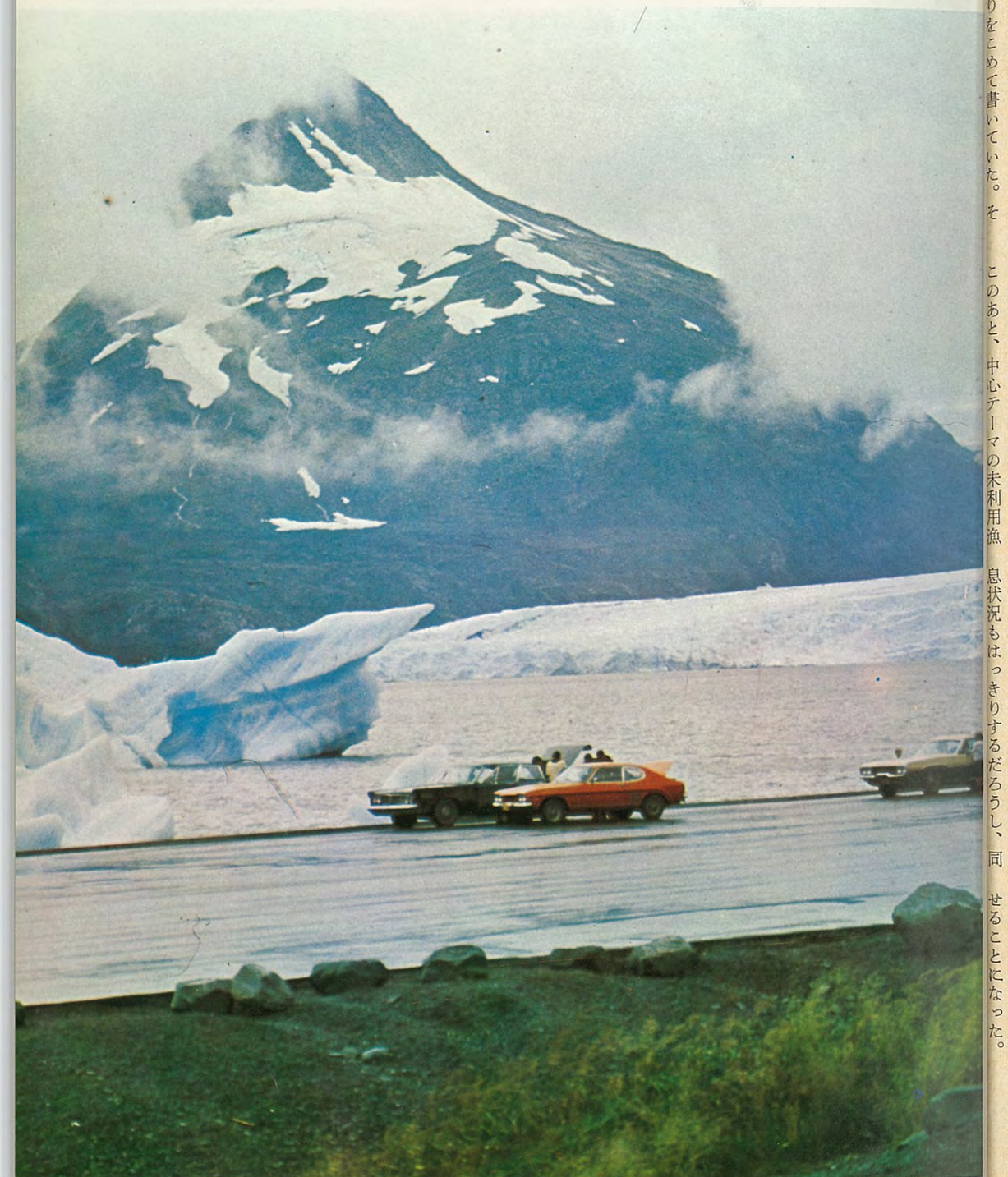
文化交流は、今度で初めてトビラが開かれる。正式なミッションにしても、とかく経済先行がこれまでの習わし。文化団体が独自に使節団を派遣することなどはなかったし、ミックススタイルでも珍しかった。その意味では、今度の北海道ミッションは、親善交流に新しい一ページをつくったといっていいかもしれない。

各地で開かれたレセプションでは、大学の先生を中心にした文化人がズラリと顔を見せた。バンクーバーでは、ブリティッシュ・コロンビア大学で日本文学を担当しているジョン・ハウズ教授や同じ大学の脳外科主任教授で、札幌医大、和田寿郎教授の実弟、和田淳氏、エドモントンでは、アルバータ州立大学で文化人類学担当のダビッド・ヤング助教授など、親日家で知られる人たち



カナダの若者たち

美しい北方圏



《ポーテージ氷河》アラスカ州最大の都、アンカレジから東へ77㌔、汚れを知らぬポーテージ氷河がある。青白く輝やく氷塊。1日37㍍ずつ湖へおりている。

漁業資源を共同調査

各界にまたがった今回の視察団の中でも、漁業団体の力の入れ方はとび抜けていた。道内漁業協同組合の総元締、北海道漁業協同組合連合会（道漁連）の浜森政雄会長、北海道機船漁業協同組合連合会の瀬戸常蔵会長、北海道水産物加工協同組合連合会の佐々木清治常務理事と三団体からトップを送り込んだだけに、その意気込みからして違った。これに反し、農業団体からは一人の参加もなく、そのアンバランスは、ことさら目立った。

水産界のハッスルに、道側も細田豊水産部長を団員に加え呼応、アラスカ、カナダでの話合いは、一応の成果を収めた。

水産代表は、まず七月中旬、わが国のサケ・マス漁船六隻が、アラスカ州海域のトリニティ島近くにはいり込み、領海侵犯でつかまった事件に対し、心から詫びた。この六隻のうち二隻は道内の船。このところ日本漁船の領海侵犯に対し現地はものすごく神経質で、この事件のときも、地元の新聞はトップで〝ジャップ帰れ〟と怒りをこめて書いていた。そのあと、中心テーマの未利用漁業資源の共同調査に話を発展させた。アラスカ海域のコンブは、空からの推測調査では七百三十三万㌧の生息状況ともいわれているが、まず無尽蔵といって差しつかえないほどの量。アラスカでは、コンブ資源にはまったく手をつけておらず、海中のコンブは自然に生き、自然に枯れるという原始的循環だった。

かつて、サケの子、スジコを投げ捨てていたアラスカで、日本漁業者が、日本向けに塩蔵技術の指導を行ない、市場価値を持たせたように、コンブへも新しいスポットを当てようという試みである。

アラスカ側も北海道側の要請がもっともな話だし、第一、おひざ元のアラスカ各地の漁業組合が「ぜひ共同でやりたい」という賛成の意向を明らかにしていたことから、州政府も、この申入れにOKした。この結果、来年夏にでも道漁連から海草栽培の担当者がアラスカを訪れ、沿岸コンブの生息状況、その種類、市場価値、採取方法、乾燥技術、輸送手段など、あらゆる分野からの調査、検討が加えられることになった。

この調査と同時に、道漁連側はコンブ以外のワカメなどの海草類の生息状況もはっきりするだろうし、同じ海域に住む、ウニ、アワビなど、わが国では高い市場性の海産物にも、光が当てられるのではないかと期待している。

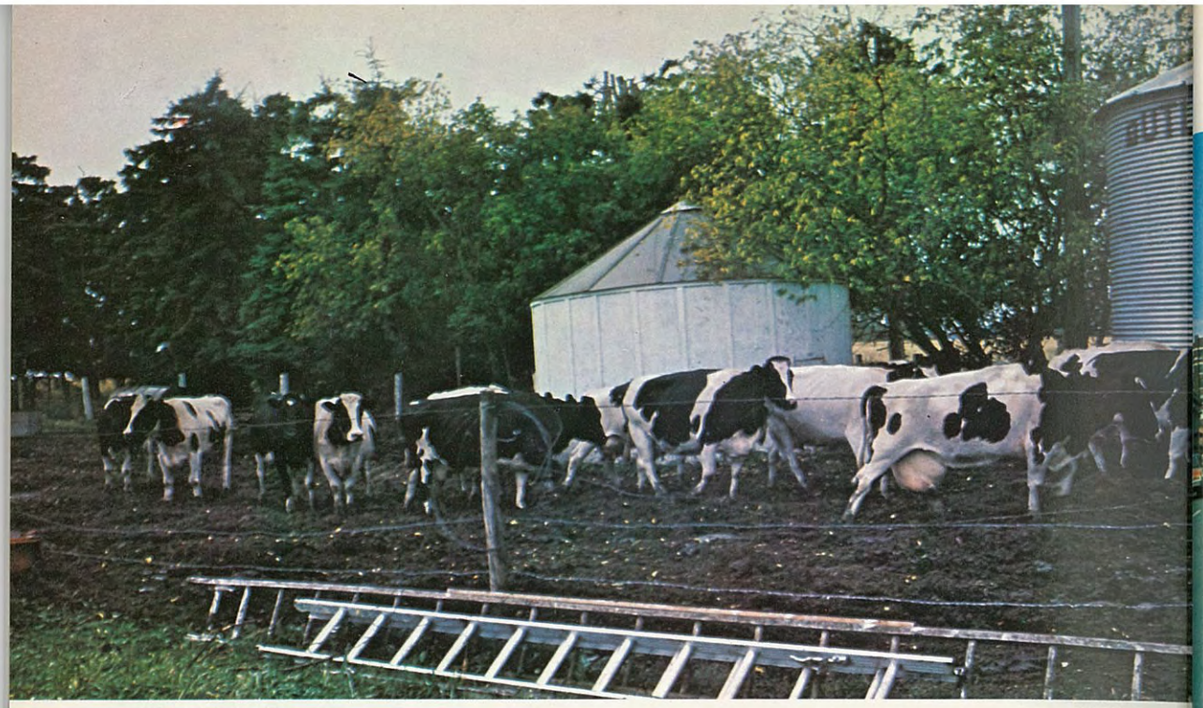
ただ、アラスカ州政府のハーバード天然自然局長、ハンセン国際漁業局長、ブルック漁猟局長などは、北海道側の積極的な申入れを歓迎する一方、その調査がアラスカの自然を破壊したり、他の生息動、植物へ影響を与えることには、心配の色を隠さなかった。とくに、ウニは沿岸一帯に住むアザラシに似たラッコの食物になっており、これを取ることにより、その生息が保てなくなるのではないかという心配もあり、十分配慮を重ねたうえでの調査にすべきだという条件もつけた。道漁連側は、調査に当たっては当然、共同調査の建前からも、カナダ側が納得する方法で着手することになるので、その心配はないといっている。

道側は、いま随時行なわれているシケ時の緊急入域につき、もう一歩進めて、正式の海難救助協定を結んではどうかと提案した。アラスカ側は、人命に関する問題なので「大変結構なこと」として十一月行なわれる日米加漁業協定交渉のテーマにのせることになった。



カナダ西海岸の漁業基地ステベストン

このため、道漁連側も業界代表としてルール違反を率直に認め、頭をさげたわけで、その態度は相手側から好感をもって迎えられた。



《大規模酪農》カナダの酪農は日本とは比較にならぬほどスケールが大きい。エドモントン郊外の農場。



《オタワ市民》明るく大らかなカナダ人。国会議事堂前でバスを待つ市民。



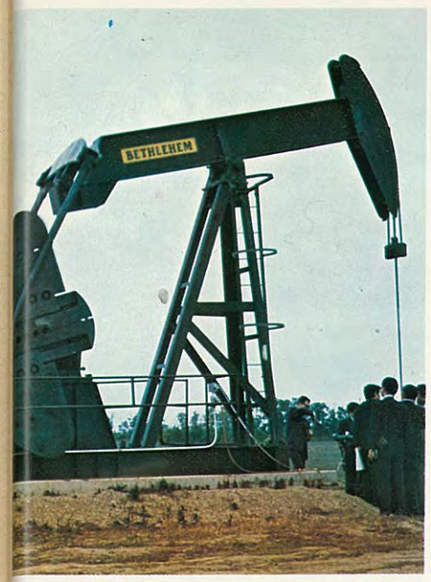
《そ上するサケ》アラスカの川にはサケがウヨウヨ。ジュノー郊外の川では使命を果たしたサケが息も絶え絶えになっていた。



《水産加工場》バンクーバー郊外、スターベストンの水産加工場。日本人も多く働く。



《ナイアガラにかかる虹》風向きで観覧席はしぶきにぬれる。そのあとに見事なニジがかかる。



《石油採掘》アルバータ州、エドモントン郊外の油田。24時間、米つきバッタのように働く採掘機。

《トロント新市役所庁舎》世界の建築家の設計競演で生まれた変わった形の高層庁舎。



《マイ・プレーン》五人に一機というアラスカの飛行機保有率。アンカレジ郊外の水上飛行場。



アラスカではトントン拍子に話が進んだ〝水産使節団〟もカナダでは、予想以上に難航した。道側のカナダへの要望は、現在、輸入しているニシン、カズノコの輸入量をもっとふやしてほしいというものだった。しかも、浜森会長がバンクーバーで聞いた話では、カナダ側にニシンの輸出を規制しようという動きが起きていることから「そんなことがないように」という訴えも加えた。

ところが、カナダ側は「輸出規制の話などまったく聞いていない」と否定、さらに「ニシンの輸出量をふやしてくれというが、日本はニシンの輸入を規制しているのではないか」と逆に切返してきた。これには、道側もびっくりしたが、現実には、たしかにニシンは非自由化品目。

現在、わが国は、年間二万㌧のニシンしか輸入していない。これを全量、道漁連が引受け、加工して売っている。かつては、これをソ連だけにたよっていたが、ソ連側の輸出量は年々縮小傾向。このため、現在はカナダ、アラスカにもたより、カナダからは、今年三千㌧輸入することに決まっている。道漁連の申入れは、この三千㌧のウエートをもっとふやし、ソ連一辺倒から脱却しようというネライだった。

しかし、カナダ側にしてみれば、総ワクで規制しているものが、部分的にふやしても、たいして意味を持たないのではないかという見解で、両者の歯車はなかなか、かみ合わなかった。結局、輸出禁止の声が起きた場合、北海道側の意向をよく理解して、規制の方向に進まぬよう要望、カナダ側も「そのように対処したい」と答え、ケリとなった。

カナダ全体の傾向として、魚ばかりでなく木材でも油でも、ナマの資源のまま輸出することは、好ましくないという意見が圧倒的で、ニシンの場合も、その傾向の現われとみられる。これからの日本とカナダとの関係も、この傾向をふんまえての提携でなければうまくいかなくなるという声が現地でも高かった。

持てあます原油生産

別にいいところばかり回ったわけでもないのに、視察団員のカナダの印象は鮮烈で、しかもすばらしくいいものだった。

帰国後、ゆっくりその印象を整理してみると、結局、わが国にない豊かな自然が強い印象となって残ったような気がしてならない。旅行中も団員同士で、その〝豊かさの度合〟がよく論議の対象となった。カナダと日本はどちらが豊かな国か。生活環境基盤、国民的価値判断の相違などから一概に、どっちがよいと結論づけにくいが、国土の広さ、地下資源の豊かさなど、将来両国が歩む上での条件からは、決定的な差が出てくるのは、いかんともしがたいという思いはだれもが抱いた。

「二十一世紀は日本の時代だ」といわれるように、未来予測学者は、近い将来、日本がGNPも国民一人当たり所得も、アメリカを抜き世界一になるだろうと予測している。しかし、石油九九・六%、鉄鉱石九八%、ウラン一〇〇%とほとんどの地下資源を海外にたよっている日本が果たして、単なる成長率計算のみで世界ナンバーワンの座につけるのだろうか。ニッケル、亜鉛鉱石、硫黄、銀といずれも世界一の生産を誇り、原油も、天然ガスも、ウランもたっぷりあり輸出もできるカナダと比べて、ほんとうに〝幻のナンバーワン〟に終わるのではないだろうかという気持をだれもが抱いたようだった。

人口増加率がヨーロッパなみになったとはいえ、日本の人口は微増の道をたどる。この狭い国土に押しあいへしあう日本と、日本の二十七倍の国土に、わずか二千二百万人しか住んでいないカナダ。人口密度から比べると日本はカナダの百三十四倍の混みようだ。資源がない国土にギュウギュウ混み合う日本と、豊かな資源の国土にゆったりのカナダ。あまりにも対照的な両国。豊かさの度合の論議の終着駅は、いつもここへやってくる。日本は、おそらく、この悪条件を克服しながら高度成長の道を歩み続けるだろう。国民生活も日に日に向上するだろう。しかし、行き着くところまで行った場合はどうなるか。かりに地球にもう一度、世界を二分するような戦火が見舞ったらどうしよう。日本のパンクが目に見えるような気がする。カナダの森林は六億エーカー（約二兆四千億平方㍍）。一エーカーにある立木は、年間二十人の人間が吸う酸素量を造り出す。現時点でも世界の人口の三倍もの人口を収容できる森林資源がある。過密日本の将来は、この面でもまったく暗い。酸素不足状態が起き

はしないか。未来予測学者は、すでに地球の酸素供給量の限界点につき警告を発している。

最後は、やはり国土の広さだろうし、地下資源の豊かさが勝負を決めるのではないだろうか。だれもが、こんな気持になり「カナダ恐るべし」そしてソ連、アメリカ、中国という広大国の重味があらためて実感となってよみがえったようだ。

しかし、豊かな資源もやや持てあましの感もある。四億バーレル強の原油生産のうち三分の一もアメリカへパイプラインで輸出、ほとんど同じ量をクエート、イランなどの中近東から輸入している。石油のとれるところは、アルバータ、サスカチェワン両州で全カナダの九二%にのぼる。ここから、カナダ大陸を横切って、ケベック、オンタリオ州へ運ぶ方が、中近東から輸入するより高くつく。このため、連邦政府は、西部カナダから西部アメリカへ輸出させ、さらに輸入原油に関税をかけて、国産油との価格バランスをとっている。

ところが、買い手のアメリカは、一方的に輸入量を減らしたり、カナダ側を悩やます。しかも、アラスカのノースロープ大油田の開発計画が登場するにつれ、アメリカの態度はいっそう冷たくなっている。一方、マッケンジー・デルタ・ビンフォト海地域、北極海諸島からの新油田も続々発見され、これをどう本土へ運び、商品化するかも大きな問題になっている。ノースロープとの競合も起きる。

さらに、OPECの原油値上げは、当然、カナダの輸入原油も波をかぶる結果となり、西部原油まで右へならえするありさま。自国であまるほど産出されながら、海外資源にたよる奇妙な石油事情の余波で、連邦政府も、いまオンタリオ州サルニアまできているパイプラインをモントリオールまで延長、西部原油を東部へ結び、完全な自給自足体制をとる計画の実現に真剣に取組んでいる。

アメリカとの〝資源戦争〟は、実に深刻な問題に発展している。カナダ側の言い分は「アメリカは勝手気ままに自国の利益を追求しすぎる」というもので、一方的に原油やウランの輸入をストップしたり、制限したり、ひいては資源会社を乗っ取る手段にも出るという。これに対抗するカナダは、アメリカがほしがる天然ガスの輸出にブレーキをかけたり、水資源も自由にアメリカへ送り込まないようにしようなど、エスカレートの方向へ進んでいる。

外貨かせぐ地下資源

本にとってはなくてはならぬ石油をくみ上げているのかと思うと、うらやましいというより、バカバカしくなる。

ここから、一キロぐらい離れたところにあった集油施設も簡単そのもの。無人の機械が各所の井戸からパイプで集められた石油をどんどん貯蔵していた。採掘場所さえ決まれば、あとはごく簡単で、しかも人出はかからない。無人の機械が二十四時間、休みなく働く光景は、見方によっては〝不労所得〟でかせぐ富める国の断面をのぞかせる。エドモントンの周囲には、こんな油井が四千五百もある。ある団員は、カナダの失業率の高さと結びつけ「地下資源の豊富な国は働かなくても食えるからさ」と解釈していた。

カナダからの帰途に寄ったアメリカのロサンゼルスでは、街のまん中で、この採掘機が動いていた。それも、一つや二つではなく無数といっていいほどの林立ぶりで、カナダののどかな採油風景とは、まことに対照的。いかにも、アメリカらしいエネルギッシュなフル回転の姿だった。ロスの街中、どこを掘っても石油が噴き出すそうで、乱掘すると地盤沈下が起きるため、国は採掘場を規制するとともに、掘った分だけ海水を注ぎバランスを保っているそうだ。いずれにせよ、カナダもアメリカも石油資源には恵まれすぎるほど恵まれている。

天然ガスも石油に負けぬほどの埋蔵量だが、石油ほど産出されていない。一九七〇年の天然ガス生産量は二兆三千億立方フィート。ドル換算で三億五千万ドル。はっきりわかっての日本の資源開発協力を「セール・ザ・ランド」（国土を売る）行為だとしてきびしく反対の声を上げている。また、オタワやモントリオールの新聞には、日本向けの石炭や銅の開発に見られる〝露頭採掘〟に対し、自然破壊だと反対の投書も、ちょいちょい登場している。

新しい経済提携は、このような現実をよく理解したうえでの縁結びでなければ、いまカナダ全土に広がっている「ヤンキー・ゴー・ホーム」と変わらない叫びになるだろう。



（バンクーバーの高級住宅街）

いる埋蔵量で五十二兆立方フィート。その後、メルビル島、キング・クリスチャン島など西北準州一帯で、続々と新鉱脈も発見され、その開発はこれからの課題となっている。

このほか、無尽蔵といわれるカナダの地下資源は、ニッケル、亜鉛鉱石、硫黄、アスベスト、銀の生産が世界一、ポタッシュ、モリブデン鉱が世界二位、アルミ地金、金が三位、鉛鉱石四位、銅鉱石、鉄鉱石五位。総合で、アメリカ、ソ連に次ぐ世界三位の地位にある。

これらが、かせぐドルは五十七億七千万ドル（七〇年）にのぼり、全輸出の三分の一を占める。オタワの連邦政府の幹部の言葉の端々に出る「カナダは後進国のような資源輸出スタイルを脱皮したい」という考えも、この現状からは「ぜいたくをいいなさんな」というよりほかにない。

日本だって、カナダからの資源を無視することができない現状だ。ウランが一〇〇%たよっているのをはじめ、銅三三%、鉛二七%、亜鉛一五%、原料炭二%といった状態で、そのウエートは高まるばかり。日本とカナダとのパイプが急速に太くなっているという、明らかな証拠にほかならない。

しかし、最近、急増している日本警戒の声も無視はできない。ことに東部カナダでは対岸の火事的なヤジウマ根性も手伝って、西部カナダで

緑と花咲く住宅街

「カナダってひょろ長い国だね」と評価する人がいた。なるほど、バンクーバー、エドモントン、トロント、オタワ、モントリオール、ケベックといった主要都市は、ほとんどが北緯五〇度前後に位置している。最南端で四一度四一分、青森県のむつ市付近、最北端は北極に近い。しかし、人が住み、開発が進んでいるのは、アメリカの国境沿いの五〇度前後で、あとは未開発のまま眠っている。

空からのながめは「とにかく広い」の一語に尽きるが、私たちが飛んだ空の下は、みごとなほどきれいに耕作され、ちゃんと道路網も走っていた。一九六二年完成したカナダ大陸横断の〝トランス・カナダ・ハイウエー〟は、全長七千七百キロ、世界最長の舗装道路だ。これから分かれる枝道も、ほとんどといっていいくらい舗装されたみごとな道路だった。日本とカナダのもう一つの大きな差は、公共施設、社会環境の整備状況の違いだった。

とくに、住宅環境の違いは決定的

だった。日本がいま住宅、不動産ブームのせいか、また、カナダの豊かさを強調したいためか、私たちをガイドした現地の人たちはどの街でも、決まって住宅街を見せた。

それが、どの住宅街を見ても、濃い緑と四季の花々が咲き乱れるみごとな環境の中に、きれいな住宅が並んでいた。バンクーバーの高級住宅街を見た視察団一行は、ただただ驚くばかり。「この違いはどうしようもない」とだれもがシャッポをぬいだ。

カナダは売家はあっても借家はない。住宅とは、土地つきなのが原則で、そして、だれもが簡単にマイホームを持てるからだ。普通の規格として、平屋造りで、寝室が三つ、リビング・ルーム（居間）とダイニングルーム（台所）これに地下室があり、ファミリールーム、倉庫、セントラル・ヒーティングのボイラーが収まる。これで土地つきで三万ドル（約一千万円）である。土地は三三〇平方㍍一一、〇〇〇平方㍍くらい。ほとんどが三十歳代で購入、日本流に直訳すると住宅抵当金融会社へ家賃相当の金を長期月賦で返済していく方法をとる。

団地には必ず小、中学校、ショッピングセンターがおさまる。そのセンターには金融会社もはいり、住宅の月賦返済受入れの仕事もする。四〇㌫〝生活優先〟の考えが、早くから住民意識の根底にあったため、ことさら豊かな住宅づくりへとつながったようだ。

若いカナダはそれなりの悩みもたくさんあった。

第一は、いろいろな国民の複合体であるむずかしさ。イギリスが四三・八㌫（八百万人）フランス三〇・四㌫（五百五十四万人）合わせて七四・二㌫になる。このほか、イタリア、西独、ギリシャ、中国、スペインとさまざま。日系人は約三万人、全カナダの〇・二㌫ぐらいと少ない。

現地のエスキモーは一万四千人、インディアンは二十三万人（いずれも推定）。日本のように単一民族国家でないため、とにかく行政はやりにくい。とくにイギリスとフランスの抗争は深刻味を加えるばかりで、ついにはケベック解放戦線のような騒ぎにまでなる。フランス系のトルード連邦政府首相は、ケベックへの重点的財政援助、英語、佛語の併立公用語指定など、あの手この手の融和策を講じているが、成果はなかなか上がらない。このため、万国博の開催、オリンピックの開催と、新しい

カナダの花

どの街にも咲き乱れる花に目を奪われる。〝国花〟とはっきり定めたものはないが、国旗に登場したカエデ（メープル）がやはり国花格。短い秋の瞬間な美しさは、カナダ人の心をとらえて離さないらしい。しかし、一般的にはチューリップが多いという。首都オタワの五月は百万株のチューリップのみごとな供宴となる。クロッカス、アスター、パンジーも多い。

酒

プロテスタントが多いためか、酒にはきびしい。禁酒州のオキテもやっととけてきているほど。酒類提供にも〝リッカー・ライセンス〟がいるし、酒屋は全部、州の直営店。この店が全カナダで千三百店。味はカナディアン・ウイスキー（CO）がスコッチと変わらない。ビールはうまい。ヨーロッパ本場物もなんでもある。

トーテムポール

インディアンの神話に基づき、十九世紀の初め、部族の誇りと繁栄のしるしとして刻まれた。クマ、ワシ、カラス、オオカミなどさまざまな動物が刻まれているが、いずれも神秘的でファンタジックなムードをかもし出している。バンクーバーのスタンレー公園のポールはとくに有名。

ゴルフ場

広くて緑が売物のカナダだけに、ゴルフ場王国。トロント市五十㌔内には九十四のゴルフ場がある。高級ゴルフ場には〝ロイヤル〟の名がつく。それでも七、八ドルで楽しめる。普通は三ドル五〇セント（約千円）北方ではクマやシカがコースを横切る。ノースウエスト州では二十四時間ぶっとおし、白夜の〝ミッドナイト・ゴルフ〟が呼物。

釣り・狩猟

最近はわが国からの遠征組が急増。釣りはキング・サーモンやマスが中心。バンクーバーのサーモン・ダービーには毎年札幌からも参加者がいる。狩りはムース（大シカ）カリブー（トナカイ）マウンテン・シープ（山羊）が中心。狩猟許可を得るのに五、六ドル（獲物により違う）射止めた獲物を持帰るのにもムースで六十ドル（約一万八千円）かかる。

新聞

国土が広いため、日本のような全国紙はない。全部で百十六種、最大の新聞は〝トロント・スター〟で発行部数約四十万部。続いて〝トロント・グローブ・メイル〟の二十九万部〝バンクーバー・サン〟の二十六万部など。〝トロント・グローブ・メイル〟がもっとも権威ある新聞といわれている。通信社は〝カナディアン・プレス〟が最大。

石油開発

〝ラスト・フロンティア〟アラスカ油田開発の目玉事業。北極圏に近いノースロープからアラスカ湾のバルディーズ港まで千二百八十㌔のパイプラインを敷き、二百億―三百億バーレルといわれる石油を開発しようというプラン。しかし、全米自然保護協会の反対でストップ中。近く公聴会のあと裁判所の判決もおりる。

資源開発と自然保護の調整

佐藤健二



カナダ、アラスカの各地をめぐり、財界人から決まって指摘されたのは、日本の資源問題だった。カナダもアラスカも、世界きっての資源国で、それぞれ問題をかかえながらも、新しい方向を目指し、まい進しようという意欲があふれており、今後強まることが予想される日本との提携にも強い関心を抱いていた。

アラスカの場合は、ノースロープの大油田開発が第一の課題だったが、これはわが国でも論議の対象になっているため詳述は避けるが、イーガン州知事の開発に対する姿勢も、相当きびしいものがうかがえた半面、アラスカにとって、ノースロープの開発が、将来どうしても必要であるという切実な願いが、ヒシヒシと感じとれた。資源開発と自然保護は、どこの国でも避けられない宿命のようなテーマになったが、これを積極的に、あらゆるきびしい条件をつけてでも解決しようという姿は見習っていいことだと思う。

☆

最大の悩みはアメリカ

☆

カナダの資源開発問題の最大の悩みは、隣大国、アメリカとの調整をどうするかにかかっていた。

現在、すでに資源産業の六三㌫は外資によって占められ、そのうちアメリカには八一㌫も占拠されている。

イギリス支配が弱まるにつれ、アメリカ支配は強まるばかりで、カナダ国民は、このままではアメリカにすべてを支配されてしまうという恐れを抱くようになった。「このため法人および労働組合申告法」（ALURA）で、毎年一回、外資支配状況を国が調査し、これを公表する制度もつくったし、ことしの五月には、懸案だった「外資規制法案」ことでない半面、世論はその方向を強く求めている。このギャップを静かに波乱なく埋めることができるかどうか。総選挙（十月三十日）を控えた国内の争点は、こんなところにしぼられていた。

しかし、建国百年の若いカナダ。そのあしたには、輝く道が開けているように思う。〝脱アメリカ〟〝脱イギリス〟の代償は、新しい大国日本への接近でもあるとみる人もいる。北海道カナダ、アラスカ経済文化視察団は、そんな情勢の中でのタイムリーな訪問でもあった。カナダもアラスカも、その積極的なアプローチに、新しい盟邦への考えをより強めたのではないだろうか。

アメリカ資本が、カナダへ進攻して一番大きな問題になったのはウラン会社の乗っ取りだった。カナダのウランの生産量は、いま世界二位。わが国のウランは全量カナダにたよっている。乗っ取りは、アメリカ資本が、カナダ資本の〝デニソン・マインズ〟というウラン会社の株を買占めたわけで、それ以前から、カナダからアメリカへのウラン輸出は、アメリカ側のペースで進んでいた（一方的に量を減らしたりする）だけに、カナダ側はこの乗っ取りには強く抵抗、結局は外資を三分の一に押えることに成功した。

日本のこれまでのように外資法で、がっちり外資攻勢を制限している国でないため、外資は大手を振って登場、企業乗っ取りも一年間に六十件以上も起きる始末。

それが、一般の製造業の場合はともかく、資源会社であることに大きな問題があり、カナダとしても、この規制には本腰を入れざるを得ないようだった。

☆

セール・ザ・ランド

☆

「セール・ザ・ランド」という言も明らかにしている。

アラスカ・カナダの文化的考察

田上義也



初秋、九月三日より十八日間―。北海道経済文化使節団の第一日はアラスカ訪問であった。北緯四十五度線、極光の地アラスカ州の空は明けて行った。

北太平洋の寒流に洗われている海岸線は曲折し、山脈は海に迫り、深いフィヨルドの周辺の溪谷に氷河は原始を伝えていた。ロッキー山脈は延々とグレート・プレーンをつくり、巨大なツンドラの平原が最大限の鈍角をうちひろげ北極洋の果てまでつづいていた。この巨大な凍土の深層に堆積するアラスカ未開発の豊かな地下資源！それこそ人間の手をよせつけなかった厳しい氷壁に守られていたのである。

今日、アラスカが当面する問題点はその資源開発の方法論にかかっている。たとえばノースロープより不凍港バルディースまで（千二百八十キロ㍍）、アラスカの大動脈といわれる石油パイプラインの実現の可能性も、自然と人間の共存するための清新な環境保存の問題がきびしくも論議され、その実現はいまだであった。

ジュノーで逢った、イーガン州知事は、アラスカの生活文化の向上も、資源開発のテクニックいかんにかかっている。物に判断が左右されることなく、理性と豊かな良識が解決の道となるであろうと信じ、静かに判決の成果を待っていた。控え目なこの人のアラスカ人特有のたぎるような州政にかける情熱は印象的であった。

北方圏のエスプリ

☆

バスにゆられて街からスプルスの樹間をぬけ、溪谷と湖沼のほとりを清流にそって北上すること二時間、カナダ人の雇用を促進するものであれば、まったく文句なしだと思う。

わが国のこれから生きる道は、資源問題を解決しなくてありえない。海外での貴重な体験を大いに反映させようではないか。

（北海鋼機社長・札幌商工会議所副会頭
北方圏調査会理事）

葉が、カナダの経済誌によくのっている。「国土を売る」という意味だろうが、資源開発会社が、外国資本に牛耳られてしまい、その産出した貴重な地下資源を国外へ持っていかれることは国土を売るようなものだというわけだろう。わが国も、この風潮を十分に考慮に入れて海外への資本進出を考えねばならない。

といって、カナダ資本独自で、あの膨大な資源を開発する力はない。結局、外国資本の手を借りなければならぬところに悩みがあるわけだ。

わがままなお客さん

☆

もう一つ、カナダとアメリカのあつれきは、産出した資源の使い方だ。カナダの資源開発地区は、ほとんどが西部地区。ここから東部カナダへ約五千キロを運ぶよりもせいぜい千キロから二千キロのアメリカ西部へ直送した方が、はるかに安くつく。アメリカは、カナダにとって、大変なお客さんでもあるわけだ。膨大な資源を売らなければ、国の経済は成り立たっていかない。このお客さんが、結構わがままで、自分の好き勝手に、引取量をコントロールする。そのたびにカナダ側は、生産調整のはめに追いやられ、不安定このうえない。感情的にもいたって面白くない。ビッグ・アメリカを相手にカナダの悩みは尽きないことが、両方の国を回ってよくわかった。

外資規制の方向へ

☆

振返って、わが国の海外投資を考えるとき、カナダは絶好の土地のよに思える。しかし、カナダはアメリカとの関係から、外資規制の方向に動いている。この間の問題をうまくコントロールするのは、第一にカナダの地域に役立つ企業であること、言い換えれば、カナダ側が進出を望んでいる企業であること。さらに資源を直接持ってくるより、現地加工も考えること。もっと欲をいえば、付加価値の高い製造工業であり、

ポーティジグレーシア（氷河）の前に立って私は息を呑んだ。

地球は回転の息を止め、死の滝のように、数万年の原始がそこに氷結していた。鮮烈な青が夕日に映え、無数の光芒が、前面の湖に屈折し、浮かんでいる氷塊の群は超現実派のオブジェのように変幻きわまりない美しさだ。さらにオブジェの痕跡は、ジリジリと現代文明から遠く去ってゆく氷河の後退を暗示していた。

生きているグレーシア！。

現代から原始に―私の想念は回帰し、極北の深層に沈潜している〈北方圏のエスプリ〉は私の精神の軸に、超現実派的感動をあたえずにはおかなかった。

新しいカナダ型文化

☆

カナダはアメリカ大陸の中で建国百年の青史を築きあげた若く新しい大州である。今日、世界第二位といわれる巨大な高北緯度圏の豊かな自然環境の中に形成された生活文化の象徴として、都市圏のいたるところに翻る白地に赤い楓の葉を染め抜いた、カナダ国旗の意味するものは、経済の独立を推進し、社会的自立性を発祥するためのシンボルを祈願とに煮えたぎっている。北欧は合理的美学の実践であり、カナダは実験心理学的に内面性の追求により、新しい未来を切り開く可能性を、新しい「カナダ型」文化の創造に打ちこんでいる。それは外形的には実験的であり、ミズレニアス文化〈雑〉の様相を呈しているかもしれない。内面的相克の雑、多様化の中から、生れ出ずるカナダ文化は、ジワジワと今日、混迷した世界情勢の中でもっとも新しい方向を示す文化の〝第三勢力〟として注目したい。

☆

日本の〝第三勢力〟

☆

今日、創造性の中心は北上している。高北緯度等位線上にある北海道はカナダ文化の築きあげつつある内省的な創造性を学びとることが必要である。カナダはアメリカの地方文化体として発足し、北方圏的独立を宣言し、新しい大州を建設した。

北海道も日本文化圏に位置しているが、北海道開発のテクニックは世界観によりどころを求め強靱な主体性を堅持し、北海道の文化創造こそが新しい日本の〝第三勢力〟として期待されていることを自覚すべきである。

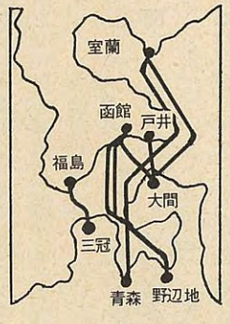
（道国際文化協会会長）

北海道と本州を結ぶ
海のハイウェイ

毎日36便運航
7航路 虹のコース

東日本フェリー

海を渡ったら景色も道もまるでちがう。そんな旅に出かけませんか。ひとり旅でもふたり旅でも、家族づれでも、フェリーに乗って出かけると楽しさがぐんとちがうから不思議。東日本フェリーは7つの航路と豊富な運行ダイヤで注目されています。ドライブマップ片手にお好きな上陸地点をお選びください。



本社 函館市末広町74番6号 T（代表）(0136) 23—1151
札幌市中央区北5条西21丁目篤井ビルT（代表）(011) 641—1311

旅行も北方圏ブーム

「大阪の万国博が道民に旅行の習慣をつけてくれた」と、旅行業者がにんまりしたのは、つい一年前だが、なんとことしは、月平均千六百人が海外へ。中でもいちじるしい伸びをみせたのが、北方圏諸国だ。ひところの香港、台湾など東南アジア諸国に完全にとって代わった形。

□ ヤングも気軽に □

海外旅行が、社長など特定のお金持に独占されていたのは過去の話。最近では、国内旅行の延長として、若い人たちが、どんどん外国に出かけて行く。中でも目立つのが、若いOLのグループ旅行や、ひとり旅。日本交通公社海外旅行センターの本間札幌支店長は「若い女性がよく一人で相談にみえます。係員が適当なコースをおすすめしますと、その場でさっさと決めておしまいになる。家に帰って相談してからなんてめんどうなことは考えないですね」という。

小樽市内の中学生が一人で、約一カ月間、ヨーロッパを旅行して帰ったのはつい最近のこと。この夏休みには、札幌の光星高校など四高校が、イギリスやハワイで、学校ごとに語学ゼミナールを開き、多数の高校生が海を渡った。ミュンヘン・オリンピックには、札幌から二つの観光旅行団が参加したが、外国にいる息子を訪ねて、母親が出かけたり、定年退職した老夫婦が、そろって、世界一周旅行に旅立つケースがふえるなど、旅行層はグーンと厚味をました。

□ ワインの視察団も □

こんな傾向に加えて、ことし目立つのが、団体の視察旅行だ。堂垣内知事を団長とする「カナダ・アラスカ経済文化視察団」が九月三日から十八日間の日程で、各地を視察して帰ったが、ワインの町、中川郡池田町ではブドウ研究所が「欧州ワイン業界視察旅行団」をヨーロッパに繰出した。このほか、道内経済人による「欧州物流施設視察団」などさまざまな文化、経済の視察団が続々北海道から出かけて行った。

ところで旅行先は、同センター札幌支店の調べでは、一番多いのがグアム島だという。これは手軽で、比較的安い費用で行けるためで、新婚旅行などが多い。次いで、ヨーロッパ、それからアラスカを含む北米西海岸地帯の順。北米西海岸地帯は昨年あたりから急にふえたが、これは、北海道と北方圏との交流が急速に進んでいることの現われだろう。

このほか、インド、アフリカ、メキシコ、ニューギニア、中南米など、旅行先は、世界の各地に広がっている。

□ マイプランに人気 □

道の海外渡航旅券交付統計でみると、昨年は、九月末までに九千八百八十五人に旅券が交付されたが、ことしは、同じ期間に、一万四千八百八十五人が交付を受け、四〇%もの大幅増。一カ月平均千六百四十九人が、北海道から海外に出かけた計算だ。

旅行がこんなにふえたのは、生活のレベルがそれだけ上がったことの現われでもあるがもう一つは旅費が安くなったため。本間同支店長は「海外旅行に大金をもっていく時代ではなくなり、若い人ほど小遣いは切りつめている」という。大体五百ドルから七百ドルというのが相場だそうだ。銀行ローン利用の旅行者がふえているのは、そうした傾向を裏付けている。

海外旅行がポピュラー化してくると、いままでのような〝パック旅行〟では満足できなくなってくる。そこで往復の旅費とホテル代は、団体旅行並み、向こうに着いたら自由行動ができる新しい形の旅行が人気を集めるようになる。〝あなただけの個人旅行を楽しむ〟というキャッチフレーズで日本航空が売出し中の「ジャルパック・マイプラン」などはその一例だ。これはいくつものコースがあるが、例えば、パリ十二日間滞在の場合は、従来の単独旅行だと五十万円ぐらいかかるのが「マイプラン」だと二十三万九千円で、半額以下。日本交通公社などでも独自の同じような企画を用意しており「お仕着せの旅行をきらい、冒険を求める若い世代の人気をさらうことはまちがいない」と業界は今後を期待している。



サハリンを訪れて…

稚内市長　浜森辰雄

サハリンへ
―初の直航船―



天気の良い日　稚内公園から六〇キロ、宗谷岬から四七キロ、肉眼でみえるサハリン。

私が招待を受けたネベリスク市（旧本斗）までは一五二キロ、船で六時間から八時間、もし稚内空港からユジノサハリンスク（旧豊原）空港に空で行くとしたら三〇分のところである。

サハリンと稚内は文字通り「指呼」の距離、それが今まではあまりにも遠すぎた。稚内からサハリンを訪れた人々は、稚内―札幌―東京―ハバロフスク―ユジノサハリンスク―ネベリスクと逆な道三、五〇〇キロを遠まわりして訪れたものである。

また道内の各市がサハリンに一番近い位置にある稚内市を頭越しに続続と遠まわりで使節団を送り込んでいた。そして帰って来て、異口同音にサハリンは「遠くて近い国」だと、あたたかい歓迎と交流にこたえて、そう語ったのを幾度かきかされた。

近くて遠い国から
―近くて近い国へ―

私は五年前にもネベリスク市の招待を受けたが、肉眼でみえるサハリンには船で直航するか、空から直接でなければ行かぬと主張し、いれられず断念した。

本年六月、再び招待状が届いた。こんどもまた船で稚内港からネベリスク港に直接行きたいという私の強引な主張。それがこんどはいれられてついに実現のはこびとなった。

私の待ち望んでいた直航には「稚内とネベリスク」「北海道とサハリン」を「近くて近い国」にしたかった。

船で六時間、空で三〇分でサハリンに行けるのだ。その実現なくして人の心の交流も経済の交流も文化の交流も、あたたかく近いものにならない。

北方圏開発サハリン、シベリア、アラスカ、カナダの開発と北海道の将来を考えてみるとき、かつて稚内が樺太と結んだ「稚内―大泊」「稚内―本斗」間に定期連絡船が就航していたように、それとは異なった意味をもつ定期航路の開設をしたかったこと。いま問題になっているオハ

や、ヤクート天然ガスの「サハリン―稚内」間のパイプライン交渉等を考えても、稚内空港とユジノサハリンスク空港の空路の開設の必要性等……。

また稚内は水産都市である。シケのときの緊急入域、避難港の問題、病人、けが人の緊急措置等、これらを含めた安全操業の問題を解決をするためにも、心の交流をはからなければならない。

直航できるようになれば「遠くの親戚より近くの他人」として大切である。急速に高まって来た日中問題誠に喜ぶべきことだが、日ソの問題もまた一層友好と平和のため、大きく前進させなければならない。こんな願いをこめてのサハリン訪問であった。

遭難？　だ捕？
時差が生んだ騒ぎ

九月四日午前九時、友好親善使節団としては日本で戦後初めての直航である。

吉田市議会議長、大和田日ソ協会市支部長と私の三人で構成されている使節団は、市民の盛大な歓送にすっかり感激をして稚内港を出港した。船は東日本海フェリーの利礼丸（一三五㌧）である。宗谷岬をかわすまで海上保安部巡視船〝さろべつ〟に見送られ一路サハリンへ。

天気晴朗波穏やか、追い波に乗っていたって快調な船旅である。やがてあと一時間ぐらいでネベリスク入港の連絡。デッキに出て見たが、鉄のカーテンならぬ濃い霧のカーテンでサハリンの島かげすら見えない。一同は〝やはり厚いカーテンか〟と苦笑。あと一㌔で入港というところで、やっとネベリスクの全容が見えほっとしたものである。だが出迎えの船影もない。港内には巨大なクレーンがいくつもありひっそりと人影もない。はたしてわれわれの入港の連絡がついているのか？と心細くさえなった。

港は日本人が建設した当時そのままで変っていないが巨大な取付クレーンが四、五台もある。丘の頂上から海岸まで行儀よく四、五階の建築物が白い色でたちならんでおり、私どもの想像とは別に、全くヨーロッパの街に来たという感である。

あと百㍍で接岸というところで、やっと水先案内の小型船が姿をあらわし、胸をなでおろした。日本時間とサハリン時間には二時間の差があるので、われわれも海馬島を迂回して一時間多くかかったので、この待ちぼうけとなった次第。われわれがあまりにも遅いため、ネベリスクの幹部たちは「遭難したか、国境警備隊にだ捕されたのでは…」と問合わせ中だったとのこと。時差が生んだとんだ騒ぎとなったものである。

霧雨の降るネベリスクに上陸、旧本斗駅の前の四階のホテルに落着く。ズドール・ネベリスク市長、副市長ほか少数の人々の歓迎の晩さんにのぞむ。親善の食卓は豪華な料理。やっと「遠い国」という気持がうすらいで来た。

あたたかいもてなしを受けた。立派な部屋であるが家具調度品は簡素、風呂は燃料が石炭とマキ、お国柄をよく表しているホテルである。サハリンでの一夜は午前一時頃から激しい雷雨、稲光がまぶしく、雷鳴豪雨の音が耳をつんざく歓迎の中をねむりについた一夜であった。

われわれの訪問は六日間であり、ネベリスクを中心にしたものであったが、ユジノサハリンスクも、ホルムスクも訪れることが出来たこの三都市について思いつくまま紹介する。

豊原神社跡は
ジャンプ台に変身

ユジノサハリンスクは人口十万人でホルムスクは六万三千人、ネベリスクは三万七千人であり、日本時代の人口の二倍半から三倍になっている。

ソ連共産党の第九次五カ年計画はあと二年を残しているが、住宅と福祉が優先であり、三都市とも住宅建設に力を入れ、四、五階建アパートが大変な勢いで建てられている。

ユジノサハリンスクはサハリン州の首都で、道路行政も立派であり、街路樹は北国に強いポプラ、アカシヤ、ナナカマド等の若木が完全に根をおろし、古いヨーロッパを思わせる丈夫で暖い、古めかしい建築の街づくりに何かぴったり。出かせぎ根性でない街のたたずまいを思わせて、たのもしい。

ユジノサハリンスクの駅前にレーニン広場があり、レーニン通りが一番の繁華街である。駅は日本時代のもの、鉄道もそうである。拓銀、郵便局、樺太庁長官邸等が残って使われているが、かつての豊原神社のあとはスキーのジャンプ台。これは札幌オリンピックの時ソ連選手が札幌に来る前に練習したというものである。

ユジノサハリンスクホテルはこの頃出来た建物で、なかなか実用的な良いホテルである。ここでもエレベーターは荷物用のみで人間の乗るものはない。州副知事のところにも行ったがどこにもエレベーターがない。質素である。

ホルムスクにも、かつての真岡の面影はわずかにパルプ工場と港の一部に残っているくらいで建物も同様八〇～九〇％は変ってしまった。ネベリスクも同様である。

私はネベリスクの水産学校の校長からサハリン旅行記という、日本訳の一冊の本をいただいた。それを早速読んでみた。ところがサハリンとは「宝の島」「極東の黒い真珠」ということだと書かれてあったのでびっくりした。

こんな北の端がと思った…。ところがそうでない。南サハリンは温暖の地である。物も豊富だと書かれてあった。考えてみると、ここより寒いシベリヤ大陸があり、北サハリンがあることを思えば……。

サハリンにはうっそうたる森林資源、水産資源、石炭、石油、ガス等の地下資源。それに酪農適地、ジャガイモ、キウリ、トマト等もとれ、彼昼等は大変よいところだと思っていると同時に、モスクワを含むヨーロッパ大陸にこれらの資源を送る大切な拠点の一つでもある。

うっそうたる森林があり、それにはわれわれもおどろかないが、次々と子孫のために若木の植林が強くおし進められている立派さ！サハリンの森林政策はすばらしいものである。


高層建築が立ち並ぶネベリスク市街

サケ一本の密漁
罰金一万円ナリ

また海の資源保護についても、ニシンの産卵前のものはとらないと言っていた。私がホルムスクのカリーニン孵化場を見に行ったとき、二、三日前からサケが川にのぼり始めたとのことで、土のうで入口を作ってあるところを次々とサケが海からのぼって来る。大きなため池に三万匹くらい入っていた。

ここの孵化場は一、〇〇〇万粒のサケの卵を幼魚にして放流する義務があると言っていたが、そんな数字の達成は極めて簡単である。私どもが行ったときはちょうど昼であったが五、六匹列をなしてのぼっていたので、サハリンのサケは朝夕でなく昼でも川にのぼるのかと質問してみたら答がおもしろい。「もし朝夕に限ってのぼるとしたら自分ののぼる順番がなくなるから昼でものぼるのだ」と笑って答えた。正にサケの天国である。日本の原始時代のような気がしてうれしかった。

サケやマスの密漁をすれば一本で二五ルーブル（一万円）二本で五〇ルーブル（二万円）の罰金、三本では裁判にかけられるという保護政策ぶりである。沿岸のコンブ、ウニは大変豊富であり、色つやのよいコンブが浅い波打ちぎわにたくさん繁茂しているのがうらやましかった。

農業についてはホルムスクからユジノサハリンスクに行く途中アニワ市（旧留多加）を素通りしたが、ここが穀倉地帯で、サハリンのジャガイモ、キウリ、トマト（日本のと種類がちがう小さいもの）牛乳など自給自足である。

ネベリスクにも乳牛一、〇〇〇頭の飼育をしている。草に対する研究もなかなか進んでおり、青草を塩づけにして土の中のコンクリート槽に入れて保存する方法、青草をかげ干にして粉末にする方法、これらは冬期の食糧（牛の）にすることで、こんな立派な研究がなされているにはおどろいた。牛はホルスタイン種であり、三々五々個人所有も許されていた。

ネベリスクは水産基地
ホルムスクは貿易港

ネベリスクには三万七千人の人口があり、これらの人々のほとんどが水産関係者である。サハリンの水産はネベリスク、ホルムスクに大きな基地を置き、この基地がその中心になってヨーロッパ大陸への水産たんぱくを供給している重要なる食糧供給基地であることを知った。

ネベリスクには母船六隻二万㌧、

一万八千㌧のほかトロール一千㌧級十九隻、四百㌧、五百㌧級七十一隻、調査船、輸送船等三十三隻の一船団の基地で海上従業員六、〇〇〇人とその家族。陸上には事務所、乾ドック、船舶修理工場、エンジン、無線関係工場と実習船四隻をもつ生徒一、三〇〇名、先生二〇〇名の水産学校。四年制技術者を養成する職業学校、三年制六〇〇名の生徒をもつ学校病院、小中学校、幼稚園、海員のクラブと水産が中心の都市である。そして作られた製品、ニシン、サケのポーチカ漬（日本のように冷蔵がまだ盛んでない）がそれぞれの港からヨーロッパ大陸に送られるようになっている。

ネベリスク船団でとる魚を参考までに紹介をすると、年間でニシン三万五千㌧、スケソウ七万㌧、その他で十三万㌧から十四万㌧である（製品にして）。これはサハリンの二五％から三〇％にあたるものである。

そして私が驚いたことには、その母船大船団はサハリン沖ではわずか。あとはベーリング海、カムチャツカ等世界の海に君臨してとっていることです。

港は木材船を始め大陸中継基地として建築資材および生活物資を入れたり、製品の積出しをしなければならず、ホルムスク港は大きくその基地として改修工事が急がれている。また外国貿易港としても税関その他の機関がそろっているところである。

港が大きい役割を果しているせいか、道路はネベリスク―ホルムスク―アニワ―ユジノサハリンスク等四〇〇㌔間の悪路。がけくずれは日本の戦後二十数年前の悪路である。橋も木橋である。車も少なく各市の中には自転車の通勤者が非常に多いのがめだっている。

生活必需物資も少くしたがってぜいたくなものは極めて少い。おもちゃも少く、日本のそれと比較するとおよびもつかないほどである。満たされている住宅、食生活に満足し、何の不平もなく開発に注ぐ情熱と、北方圏に住む誇りをもっている彼等にはただおどろきと頭が下る思いがした。

暖たかい歓待 ――盛大な見送り

六日間にわたるサハリン訪問の旅は終った。利礼丸は螢の光が流れるなか、多勢の見送りを受けてネベリスク港を発った。

思えばあっという間の六日間であった。船は一路稚内港へ。驚いたことに岸壁の人々は一人として去ろうとはしない。人影がはっきり見えなくなっても手をふりつづけているのである。その人情のこまやかさは、去るときになってはじめて知らされたのである。

能登呂半島を左に見ながら、鏡のような秋晴れのナギの中を船足は快調。右に海馬島左に西能登呂岬を望むころ、前方に利尻岳がくっきりとうかぶ。やがてノシャップ岬が波間にかすんでみえる「ああわが稚内に帰るのか」と感慨にひたったものである。

晴れた日稚内から見えるサハリンである。サハリンからわがふるさとを見るのはあたりまえのことである。しかしひとしおの感がいにひたって「ほんとうに近いんだな」…。あと別な実感がわいて来た。

思えばこのサハリン訪問は大きな収穫があった。要人が何を考えているかを知った。そこに住む人々の生活も知った。北方に住むことの誇り開発に注ぐ情熱……。これらはすべてわれわれと共通するものがあった。それを知ったことだけでも同じ北方圏に住む者として、何とも心強かった。

生活は簡素である。娘さんはミニで濶歩している。だが派手さ、華美を求めていない。現在の簡素な日常生活に満足している。そして日本との交通を心から望んでいる。それからの一つ一つが、いま帰国の途にある船上であざやかに思い出されるのである。

宝の島とよばれるサハリンは、われわれの手のとどくところにあり、そのサハリンとの交流のかけ橋は、稚内から直航という形でいま架けられようとしている。

サハリンとの交流 ――これからが本番

西能登呂岬をまわるころ、五～六、〇〇〇㌧の母船と遭遇した。カムチャツカ帰りの引揚船である。男の人も女の人も船上から手を振ってわれわれとすれ違った。ちぎれるほどの手の振りようである。そこにもまたサハリンの人々と同じく人を恋しがるものを見た。

やがて利礼丸のメーン・マストの上にたった一つ大きく輝く星が現れた。北極星である。キラキラとわれわれの安全航海を祝っているかのようである。ノシャップ灯台、宗谷灯台の光も見え始めた。その光はわれわれを「早く帰れ」と招いているかのよう。利尻岳がヤミのなかに消えるころ稚内の灯が見えた。

明るい活気に満ちあふれた灯、その一つ一つがサハリンの旅の労をねぎらってくれる……〝ご苦労さんと―〟わがふるさとの灯はあたたかく、そして大きく、やわらかい光である。これほどわがマチの灯がたのもしく、あたたかく感じたことは初めてである。

その灯に向って進みながら、これからのサハリンとの友好のことが脳裡を占める。いま橋はかかろうとしている。この橋を少しずつ大きく頑丈にして「交流」という大きな荷物を運ばなければならない。稚内とネベリスク、サハリンと北海道、日本とソ連の交流を深めるために、さらに双方が努力をしなければならない。

われわれはその一歩として、サハリン直航という使命を達成した。大きな収穫であったと思う。しかし本番はこれからである。

「市民の船」と北方圏



函館市長　矢野康

マチぐるみで編成した市民の船

函館は北洋漁業が契機となって栄えた街で、今でも漁業関連の産業が多く、漁網や船舶、機械類などが北方圏地方を主に輸出され、北方圏交流に対する市民の関心も極めて深いものがある。

今年六月、市制施行五十周年の記念行事として行われた「市民の船」によるソ連への親善訪問は、これまでの経済中心の交流、あるいは特定の視察調査を目的としたものとは異なり、一般市民を中心として、いわばマチぐるみで編成され、しかも友好親善を主たる目的としたところに大きな特色があったと思っている。

当初は、果して参加者が所定の三百人に達するかどうかという一抹の不安もあったが、いざ蓋をあけてみると希望者が予想をはるかに上回り、やむなく抽せんで選ぶという一幕もあった。

もちろん私も使節団長という立場で参加したが、市民の盛大な見送りをうけて函館港を出港したあと、チャーターしたソ連船の女船員が中心になって企画したパーティーに招かれた。そして興が進むにつれて誰かの発声に端を発して「カチューシャ」の大合唱がはじまり、相手側からは「サクラサクラ」のコーラスのお返しがあるといったぐあいに、なごやかなムードが船内いっぱいに漂よい、スクェアダンスに興じたり、肩を組んで写真をとりあうグループなどもあり、私自身、あまりにも楽しいふん囲気のなかにいつしかとけこみ、ぎこちないダンスをつきあわされるやら、飲めないアルコール類までついつい飲み干してしまうという状況だった。

異例の大歓迎 親善サッカー試合

訪問先のナホトカ市や、ハバロフスク市でも、異例ともいえる大歓迎をうけ、パーティーやサーカスの特別公演に招かれたり、親善サッカー試合も行ったほか、日本人墓地で持参した墓標をたててきた。

また、公式会合では、貿易やハバロフスクとの定期航空路の開設問題などが前向きに話しあわれ、わずか一週間の日程だったが、参加した市民それぞれが楽しい思い出と、大きな成果を残して帰路についた。

今回の行事を通じて、平和、友好という人間の共通した素ぼくな願いに国境はないということをまさに実感として受けとめてきたが、これからもこの種の友好親善の輪を、都市単位にとどまらず、あらゆる機会をとらえて、大きく拡げてゆくことが必要であると痛感している。

私どもの函館圏でも、国際化時代に備えて、近距離国際線の基地をめざし、空港の整備に力を注いでいるが、同時に立地条件に恵まれた函館港の特性を生かし、北方圏交流の基盤を築くためにも、港の整備と臨海工業地帯の造成などを積極的にすすめていきたいと考えている。

広州交易会 参加の道内企業

日中国交回復で日本と中国の交渉が注目を集めてきたが、北海道とのつながりはあまりにも少ない。中国の東北地方（旧満洲）は北方圏諸国の一つ。新潟県などが、国交回復以前から経済交流で相当な実績をあげているのと比べると、北海道はお粗末の限り。それでも、十月十五日からはじまった恒例の秋の広州交易会には、道内からこれまでの最高の十八社が参加、取引額も相当ふえるものと期待されている。

□　□　□

意義大きい拓銀の参加

参加企業は、北海道友好貿易、石川物産商事（陶磁器販売）登喜和産業（ドリルのピットメーカー）寿原産業（商事会社）五番館（デパート）小川商店（繊維問屋）北浜商事（同）金市館（衣料品小売）大金畜産（肉販売）三ツ輪商事（繊維販売）日本健康自然食（食品販売）コンチネンタル貿易、小林洋行北海道支店、拓銀、それに華僑商社の信華貿易、振興企業、生和商事、七行貿易の十八社。

この中で初参加が五番館、小川商店、北浜商事、大金畜産、拓銀の五社。春の参加企業は四社だったから、初参加だけでこれを上回る。とくに拓銀の参加の意義は大きい。拓銀は広州交易会に参加といっても中国銀行の招待に応じて訪れる。商品を買うわけでないので、中国貿易をする道内企業の窓口になるほか、企業全般の立場から、道内から輸出できる物資、輸入できそうな物を調査して、情報を流すパイプ役もつとめる。商社とちがい客観的な目でみれるので、これから中国貿易を希望する道内企業にとっては、たよりになるセクションになるだろう。潮田隆同行外国部長も「単なる金融機関の役目だけでなく、幅広く中国と道内のつながりを保つように接触してくる」と、語っている。

□　□　□

中国ブームが拍車

初参加企業の意欲は、中国ブームも拍車をかけて増すばかり。小川年情をつかむのが主目的。ファッションものはだめでも下着類、作業服などは品質、サイズとも十分に日本国内で通用する。来春から店頭に出したい」と、目を輝かして訪中した。道内の小売店の店頭に中国製衣類が顔を見せることになりそう。

オーストラリア、ニュージーランドから羊肉を輸入している大金畜産は中国産のブタ、牛肉に期待を寄せている。現在はまだ、ブタ、牛は輸入できないが、いずれ許可になることは確実。とりあえず、トリ、アヒル、ウサギ肉の三種類を輸入して、将来に備えることにしている。中国産肉の輸入の見通しは明るく、貿易額は相当ふえていくとみられている。

□　□　□

今回で三度目の金市館

初参加のこれらの企業に対し、今回で三度目の金市館はおもしろい見解を示している。「中国ブームはもう終わった。これからは実質を求める段階にきている。衣類は下着などの輸入品目は、民芸品、食料品、衣類が主体。北海道としては、シベリア、アラスカ、カナダだけにとどまらず中国にももっと目を向け、本格的な経済交流に取組まなければならない時期にきている。道商連は昨年末に訪中団の派遣を提案しているが、一日も早く実現させて道と中国一つ一つ商品価値はあるが、これは北海道から道産の漁業設備や木材、農産物を輸出し、同国からは鉄鉱石、銑鉄、野菜などを輸入しようというもの。昨年七月二十九日、政党関係者や二十四商社からなる「北海道日朝友好貿易協会」（佐野法幸会長）が発足したばかりだが、早くも朝日輸出入商社（東京）から「近く道産の漁業機械設備を中心とした展示会を平壌（ピョンヤン）で開催しよう」との非公式な打診があった。

平壌での展示会開催は、ことし八月十四日に同協会と朝日輸出入商社が朝鮮総連道本部の橋渡しで会談したさい持ち出された。同協会では〝地場産業育成〟の原則から、交易の窓口を協会一本にし、参加商社も道内の三十数社にしぼり、展示品目をすべて北海道方式の冷凍・冷蔵、貯蔵・流通施設、珍味加工設備、それに魚群探知機、漁網、ポンプなどの製品に限って数千点、総額数十億円にのぼる大型の展示会開催を正式に同商社を通じ本国に申入れている。まだ正式な招請状は来ていないが、昨年発足した超党派の「北海道議会日朝友好促進議員連盟」（深山和圀会長）が朝鮮民主主義人民共和国を訪れ話合いをする。

国交のない同国で展示会が開かれるのはわが国で初めてである。

また、朝鮮総連道本部は文化交流の面でも積極的な動きを見せている。ことし四月の金日成首相生誕六十周年を記念して札幌で開かれた朝鮮総連中央委員会の金炳植副議長の記念講演で金副議長は『われわれは、金日成首相の政治的には「自主」、経済的には「自立」、軍事的には「自衛」の三原則に基づき、すべての国、すべての人民に友好の手を差しのべる』と語り、これまでわが国がとってきた在日朝鮮人への圧迫をなくしてほしいと訴えた。

道民との理解と友情を

朝鮮民主主義人民共和国を本国とする在日朝鮮人は道内に約八千人いる。朝鮮総連道本部は金昌植委員長以下、崔啓光、呉祺植、李珍沢の三副委員長をはじめ道内八地区にある地方委員会と手をたずさえて在日朝鮮人の権利擁護と道民との友好親善に積極的な活動をしている。

李珍沢副委員長は「わが国と日本との今後の友好促進は、道民と在日朝鮮人の理解と友情を深めることができるかどうかが大きなカギである」と語っている。

ップしてきている。買い付けが大幅にふえれば価格アップの速度は早まり、それだけ商売としての魅力が失われることになる。また大量注文で中国側の製品の納期が遅れるなど問題もある」と、語っている。ブームに乗ってやみくもに突進するのでなく、中国側の実情を十分掌握してかからなければならないといえる。

□　□　□

一日も早く関連強化を

道内の四十六年度の対中貿易は、輸入が大豆の十六年度の対中貿易は、輸入が大豆の十二億八千万円をトップに、ふすまなど十三億五千五百万円、輸出が亜鉛鉄板の四億九千三百五十万円など八億八千二百二十万円と往復で二十億円ちょっとにすぎない。これには広州交易会の数字はいっていないが、ソ連と比べると五分の一以下。新潟県では輸出だけで五十六億円に達している。交易会での輸入品目は、民芸品、食料品、衣類が主体。北海道としては、シベリア、アラスカ、カナダだけにとどまらず中国にももっと目を向け、本格的な経済交流に取組まなければならない時期にきている。道商連は昨年末に訪中団の派遣を提案しているが、一日も早く実現させて道と中国

橋渡しに大活躍

―朝鮮総連道本部―



札幌で開かれた朝鮮民主主義人民共和国の建国二十四周年記念式典（円内は金昌植委員長）

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の建国二十四周年を祝う記念式が九月八日、札幌市平岡の北海道朝鮮学園初中級学校で道内の同胞約千人が集まって開かれたあと、在日本朝鮮人総連合会北海道本部（以下、朝鮮総連道本部）主催の祝賀パーティーが、在札の政財界人、報道関係者など約五百人を招待して札幌グランドホテルで盛大に催された。

席上、金昌植委員長は「日朝友好の機運はまさに最高潮。今後、経済、文化交流をさらに活発にして、お互いのキズナを強めよう」と述べた。

これは「対立」から「共存」へと国際情勢が激しく変化している中で金日成首相の自主独立を旗印にした〝チュチェ思想〟が確固不動のものになったことを示す自信のあらわれで、内にあっては南北統一を目ざす韓国への積極的な呼びかけ、外に向かってはわが国を含めた国交未回復の国に対する友好促進などがその背景にある。朝鮮総連道本部は、ここ数年、本国と北海道の平和のかけ橋として目を見張るほどの活躍ぶりを示している。

近く平壌で機械展も計画

北海道日朝友好貿易の促進もその

北海道の企業と人　展望と分析①

伊達火力原発建設に自信


山田達副社長


四ツ柳高茂副社長


岩本常次社長


岡松成太郎会長

北海道電力

十月十九日―北電にとっては記念すべき日となった。伊達火力発電所の建設の認可がやっとおりた日だった。認可の関門、電源開発調整審議会のマナ板にのるのが、四度も見送られ、建設反対のウズは、大きく深まるばかりだった。一時は、伊達をあきらめる声も出たほど。

北電にとっては初めての試練。ねばっこく、伊達周辺五市町村との公害防止協定を結び、伊達漁協組へも四億七千万円の補償金・振興資金を払い、内堀、外堀を埋めて、やっと道知事の同意書をもらい、電調審をパスしての〝発車オーライ〟だった。

にわかに銀髪がふえたという岩本常次社長は「長い道のりでした。尊い勉強もしました」とホッとした表情を隠さない。半面「北電はけっしてムリ押しして火力発電所を建てようというのではない。住民の納得のいく条件で、よく話合って建てます」と相変わらずの慎重ぶり。

建ててほしい」とお百度を踏んだものだ。それがどうだろう、伊達市はじめ原子力発電所建設の候補地に決まっている洋、共和、岩内、浜益の各町村も、いい顔しない。変われば変わるもの。

ないといわれるほど、にこやかムード。いかにも、北海道のマンモス企業のトップらしく、おっとり、ソフトである。もっとやんちゃぶりを発揮しては―という声もあるが、紳士岩本社長へはムリな注文である。

第一、北電そのものの体質が、おうよう、ゆったりしていると評価する人が多い。悪くいえば独占企業、競争相手がいない。電力という商品は、必要ならばいくらでも買ってくれる。商売そのものがパッシブである。北電社員は「いや、需要開拓のため汗みどろだ」と反発するかもしれない。しかし、本来のパターンは、あくまでも受身の商売である。社員が知らぬ間に、会社の体質ができあがる外部からみれば、やはり殿様ムードなのである。

だが、そのイメージも変転のときにきた。「大変ですね」平社員さえ、家族や友人から同情される。電源立地がてこずるからだ。つい数年


写真は北電が原子力発電を予定している泊地区（点線内）

試練に立つ

副社長自ら陣頭指揮

伊達火力建設問題の先頭に立ってきた四ツ柳高茂副社長は「数年前と隔世の感がある。いままでの考えでは通用しない。これから立地に際してはその土地の歴史、住民感情を事前に調査し、しかも住民とヒザつき合わせて話合ったうえで進めねばだめだ」と、しみじみ語っている。

第一、副社長自らが陣頭指揮をとったことなどまったくなかった。担当課長にまかせておけば、だまってレールにのっかっていた。

その四ツ柳副社長、社内外でぐんと株をあげている。いやな公害闘争の矢面に立ったのだから当然。伊達周辺へ何回足を運んだか、本人も忘れてしまったほど。がっちりした体軀、いかめしい顔つきだが、笑うと愛敬がある。社員がたのもしがる。高等学校（旧制名古屋高校）後輩の樫原泰明道副知事も「今度はとにかくがんばりました」とその努力を評価している。

「北電はどうして伊達立地にあんなにこだわったのだろう」という声が聞かれる。

岡松成太郎会長が明解に答えてくれた。第一に、立地を計画した時点では、地元は挙げて歓迎の姿勢だった。北海道の湘南地区にわざわざ建てなくても…というが、伊達は新産業都市の一角。企業誘致にはいたく熱心だったし、街自体の将来志向が工業化だった。

第二に、燃料輸送コストの問題。伊達火力の燃料は重油。一、二号機が完成してフル回転すれば、一日三千八百㌔㍑の重油をたく。かりに六㌔㍑容量のタンク車で運ぶとざっと六百台も必要。室蘭―伊達間二十五㌔に、四十㍑に一台ずつつながる。文字どおりのジュズつなぎ、物理的にもパイプ・ラインを敷かねば操業は不可能。そのパイプ・ラインの建

設費は一㌔五千万円。二十五㌔敷くと十二億五千万円になる。かりに伊達の立地をやめ、室蘭、苫小牧から百㌔離れた海岸線に建てたとしよう。（内陸部は用水が足りなくなるため）パイプ・ライン建設費だけで五十億円になり、四倍も高くつく。重油供給地から離れれば離れるほど、建設コストはかさむ。

電気を起こすだけがマイナスポイントではない。売る方も離れるほど損。送電ロスが起きるからだ。つくった電力量を、そっくり売れればロスはゼロ。しかし、実際は送電線をつなぎ延々と送っている間に、生き物の電気は、容赦なく大気へ逃げる。広大な北海道は、これが大きな悩みだった。現在の北電の送電ロス率は九・五％。かつての二五％から半分以下に落ちている。企業努力のバロメーターだとして、自慢のタネのひとつ。

発電所が需要地から遠のけば、遠のくほど、この悩みはつきまとう。









伊達は供給、需要の適地

そんな企業サイドからのみみた有利な条件で、立地を図るのは、企業のエゴイズムだという。岡松会長は「しかし、どんなところにも適地があるわけではない。水があり、燃料供給が可能なところで、そして需要地も遠くないというのは基本的条件で、候補地もおのずから限定される。この条件をまったく無視して、人がほとんど住まない辺地への立地は、電力事業の存在を無視した考えだ」と抗弁する。

岡松会長は三十五年、商工次官、東京商工会議所専務理事という華やかなポストから北電入り。四十二年会長へワンステップするまで、いまのような大波はなかった。石炭の値段が、一㌧当たり三百円引上げられ、そのシワ寄せは甚大だとして、電気料金の値上げが騒がれた程度だった。

それでも、社長の激職から去って、岡松さんは余裕が出たという。カゼをこじらせ耳が遠くなっただけで、元気はつらつ。一歩離れて、余裕ある展望は、マトを射て正確である。

いずれにせよ、伊達火力は、やっと発車オーライ。百億円を投じ工事は始まる。これからの焦点は、計画の四十九年七月にできあがるか。当初の着工予定より、すでに一年四カ月遅れているのだから、しょせんムリな話という見方もある。しかし、突貫工事を重ねれば、ギリギリ間に合うともいう。かりに二、三カ月あるわけだ。

伊達は、供給地からも需要地からもほど近い格好の適地だったというわけだ。

つくる方は、できるだけ、電気をうんと使うところへ発電所をつくりたいと願うのは、ノーマルな姿勢でもある。能力ストック（予備率）が足りなくなる。普通は一〇％ぐらい。北電の場合はそれより二―三％増。つまり、本州よりも多めに能力をつくっておかねばならない。周囲海に囲まれた島国だからである。

もうひとつ伊達火力の前に大きく立ちはだかっているのは〝環境権訴訟〟。北電のこの発電所は伊達地方の自然環境をそこなうとして、伊達市の開業医らが七月二十八日、札幌地裁へ訴えたのがはじまり。四日市公害のように因果関係がはっきり出て、大気を汚染させた企業群が、罰を受けた例はあっても、まだ建設されない発電所に〝容疑濃厚〟として待ったをかけたのは、全国でも初めてである。

果たして裁判がどう進むか、経済関係者ばかりでなく司法関係者も注目している。ことに全国電力業界は、四日市公害訴訟で中部電力が敗れたばかりだし、このまま、訴え側の言い分どおり、未被害の発電所さえも規制できるようになったら、電源立地は完全にアウトとなるため、その成行きに深い関心を払っている。

このため、北電としては全電力会

合会の支援を得て、サリドマイド裁判、田子の浦裁判などを手がけた山根篤弁護人をリーダーとする中央グループと地元の若手弁護士三人の合計九人の弁護団を構成。

裁判の方は、北電側が「伊達火力発電所は人畜に被害がない」ことを立証するだろうし、訴えた方は「被害が出る」の必然性を立証するだろうし、これを裁く方はどう裁くか、みものでもある。

しかし、北電は、訴訟として、着工に踏切る。原告側は工事差止めの仮処分を申請する強硬手段で対抗することも考えられ、伊達火力は、依然、嶮しい道を歩まねばならない。

伊達が終わると泊・共和地区への原子力発電所が、いやでもクローズ・アップされる。

「伊達よりもこっちの方が大変だ」と早くもささやかれている。革新団体も、伊達は前しょう戦、泊・共和が本番とみている。



金川武司取締役



末広英二取締役



中野友雄取締役



佐藤一郎取締役

黒字微妙な料金値上げ

電源立地に悩む北電のもうひとつの課題は、近い将来予想される料金値上げへの対処の仕方である。

すでに〝経営努力も限界にきた〟というアドバルーンも上がった。火力発電所の熱効率も一九・八％から三六・五％へアップ、送電ロスも二五％から九・五％へダウン。支店統合、事務の機械化も進んだ。従業員一人当たりの販売電力量も百五十四万㌔ワットアワーと創立時の七倍へジャンプ。岩本社長も、岡松会長も「合理化への手当ては最大限尽くした」と胸を張る。

一方、用地費は上がる、補償費も高くなった、燃料代もアップの一方。しかも、新たに公害対策の費用もどんとかさむようになった。いわゆる発電、販売にかかる費用は増大するばかり。昭和二十九年から十八年間ストップのままの料金では、もうやっていけない段階にきているという。

しかし、四十六年度一年間の経営の収支じりは、依然〝黒〟。昨年一年間に、道内の一般家庭、企業へ売った電灯、電力代金は六百六十一億四千万円。前年度より三十七億八千四百万円の増収。これに対し、かかった費用は、六百二十一億千七百万円。差引き四十億四千九百万円の黒字。前年度より二億六千五百万円の減益、創業以来初めての減益だったというが〝黒〟には変わりない。

経理上の操作は、しろうとにはわかりにくいが、黒字で値上げというのもピンとこない話。「もっと困っている図が決算に出ないものか」と皮肉まじりの社内の声もある。同じ値上げムードの関西電力などは、九電力最低の決算を、強引に前面に押出している。正直なこと、道民にはまことに結構なことだ。

しかし、四十八年三月期ごろからは、修繕費のかけ方が少なくなり、退職給与金の積立て方が少なくなったり、繰越金がなくなったり、経営のモノサシに微妙なヒダが出てくるかもしれない。そのときこそ、料金値上げ問題は、ほんとうのマナ板の上にのる。

こちらもまだ、ほんの前しょう戦。会社側は経営効率推進本部を発足させ、本部長に岩本常次社長、事務局長に岡本利雄前企画部長を据え、総務部内に広報課を独立させ、着々とその体制づくりにはいっている。

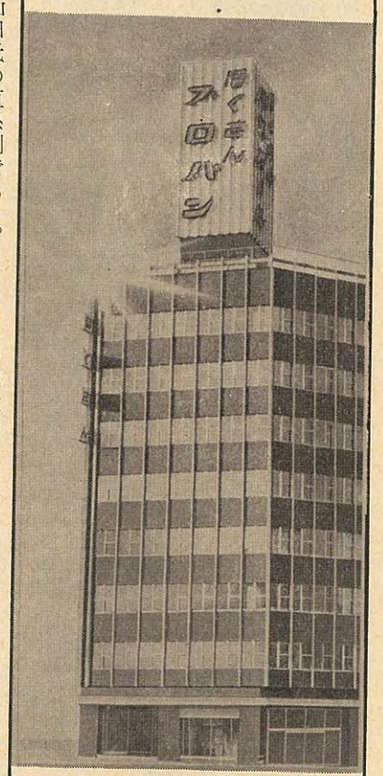
一方、全道労協、北海道消費者協会などは、手ぐすね引いて北電の出方を待っている。岩本社長が昨春「二、三年中には料金値上げもありうる」と口をすべらせただけで「けしからん」「ほんとうか」といった問合わせが、ワンサとあったほどで〝反対戦線〟は神経をピーンと張りめぐらしている。

共和・泊への原子力発電が、お先まっ暗なところへ、料金値上げが加わっては、北電もつらい。同情の声も出る。

「社内一丸となって」―北電にしては大げさな言葉での決意も聞かれるようになった。昭和二十六年、北電がスタートしてから初めての大試練の年といえよう。

この試練を、新しい役員スタッフ

技術力で未来をひらく——!!



株式会社 ほくさん

取締役社長　水島健三

《本　社》
札幌市中央区北3条西1丁目
☎（大代表）271—3331

《事業所》
札幌ガス／札幌燃料／旭　川／釧　路
室蘭／東京ガス／東京／名古屋／大阪
設備ユニット／公害防止事業部

現スタッフで乗切る

で固めるのか、現状維持か、と注目された。六月の役員改選期は、五十嵐俊彦経理部長の常任監査役就任だけで終わり。結局、勝手知った現スタッフで難関突破という体制となった。

岡松会長、岩本社長に四ツ柳、山田達両副社長がサポート。山田副社長は火力畑。電力会社は、どこも、水力畑が主流。北電も故藤波相談役岩本社長とトップは水力発電所づくりの土木技術屋が、その栄えある座についてきた。しかし〝火主水従〟は時の流れ。三十八年にその主従の座がひっくりかえってから、いまは七対三の割合になり、〝土木でなければ人でない〟時代は過ぎた。山田副社長は、その新興勢力の親玉だ。火力部門からの期待の声は大きい。ことに伊達も、数多い石炭専焼も、みな山田氏の直系列である。

常務陣は、川瀬英雄、大橋康次、篠原敬三の三氏。川瀬氏は、総務、営業、経理の部門の担当。その切れ味、多才ぶりは有名。四、五年までの極積的な対外活動、作家も顔負けの文筆活動が、最近やや影をひそめたのは、社業一本ヤリの裏返しともいう。半面、寂しがる声も多い。

大橋氏は、土木、社長室、労務部門の担当。専門は、岩本社長につながる土木畑。主流意識の強い〝土木一家〟の総指揮者としての地位は、社内的にもぐんと重い。面倒味もいい。

篠原氏も技術屋さんながら、企画工務、火力部門の担当。ち密さが身上。みるからに学者ふう。逆に冷たさが出てソンをしているという評価もある。

取締役陣は、金川武司道央支店長、末広英二火力部長、中野友雄企画部長、佐藤一郎営業部長の四氏。八月十日付で、久しぶりの役員間の異動もあり担当替えとなった。

金川氏は、労務部長として、むずかしい労使問題をテキパキとまとめ、点数をかせいだ。人望もある。

末広氏は、道央支店長から古巣の火力部長に返咲き、問題ズラリの火力のカジ取りに闘志満々。豪放らいらくなタイプながら、ち密だし、期待の声は大きい。

中野氏も技術屋さん、企画部長は電源立地の羅針盤役。原子力発電の直接の窓口。これまた、問題どっさりの部長としての働きっぷりが注目される。

佐藤氏は、一番新しい役員さん。定年を一年延長してのすべり込み。顔は広いし、如才ないし、営業部長にはうってつけ。

監査役は、常任が五十嵐俊彦氏と池田英三郎氏、菖野寿衛吉氏の三氏。池田氏は土木部長からの就任、菖野氏は拓銀常務からの流入。

北電で忘れてならないのは、藤波収相談役。十月十八日、肺炎をこじらせて急逝したが、北電の生みの親であり、育ての親だった。ときどき札幌に顔を出しては、経営の指針になるような鋭い指摘をして帰る。北電の相談役というよりは、わが国電力界の相談役だった。



五十嵐俊彦監査役



池田英三郎監査役



菖野寿衛吉監査役

部長陣は、企画部長から新しいポスト（経営効率推進本部事務局長）に専念することになった岡本利雄氏、道北支店長から経理部長になった武田武氏、東京支社長から労務部長への喜多村幸男氏、火力部長から工務部長になった石沢俊夫氏、公害対策で八面六ぴの活躍中の近藤大八総務部長、阪部一郎土木部長らと多士済々。

支店長は、大野英男道北（旭川）支店長、鎌田克夫室蘭支店長、橋本英寿道東（釧路）支店長、佐藤亮函館支店長。

これら部長、支店長の中から次の役員が生まれることは間違いない。

このほか、部長級、部長代理級にも人材が多い。斎藤宏東京支社長、黒田耕三伊達火力発電調査事務所長、沖崎照司原子力発電岩内調査事務所長、戸田一夫電子計算センター所長。さらに部次長は、企画部が村岸嘉幸、松本晴雄の両氏。総務部は小関清、中西辰夫の両氏、労務部が金子雄二郎氏、経理部が星川聡、岡先俊の両氏。営業部は大世帯で前田米司、大城孝男、植野春雄、小林富治の四氏。工務が舛田正章氏、火力が長島久之、村井利夫の両氏、土木が浜田正氏。

このほか、佐崎幸雄技術研究所長、赤石好正社員研修所長などもいる。

温床育ちといわれた北電マン。初めて迎えた大試練に、その体質から脱皮しなければならないときがきたといわれる。役員から平社員まで、その認識に強く目覚めたのか、社内の空気はピーンと張りつめてきた感じだ。公益企業体であってみれば、当然のこと。その従業員の努力いかんでは、あすの道民生活が、明るくなるか、暗くなるか、大きく左右されるからである。道民はだれもが、北電の健全な歩みを願ってやまないことだと思う。

宮嶋　勲（毎日新聞北海道発行所経済課長）

技術とスピードを誇る総合印刷！

株式会社 藤田印刷所

代表取締役社長　藤田正重

札幌市中央区北3条西2丁目

TEL（221）4111番



白夜に思う

熊本恵見（道銀常務）

昨年十一月、アメリカの銀行視察団に参加したとき、帰りはニューヨークのケネディ空港からアラスカのフェアバンクス経由のルートをとった。

機上から見るアラスカの広大な大地はすでに白一色の銀世界であった。フェアバンクス空港では、時計の針は深夜の時刻を指しているのに、太陽は地平線近く紅くかがやいて、いつまでたっても暗くならなかった。白夜と言うものを初めて経験した。

給油の終るまでの二時間ばかりの時間を空港の待合室のソファに腰をおろして北海道と北方圏と言うことなどをとりとめもなく考えた。

昭和二十七年の四月の初め、創立間もないわれわれの銀行で、幹部行員のために当時、道庁の企画室長であった堀武男氏をお招きして北海道経済の講義をして頂いた。朝、仕事の始まるまでの一時間、一週間の連続講座であった。

北海道の経済の実情を、新しい銀行の行員によく理解させてやろうと言う堀氏の非常に熱心な態度に一同、深い感銘を覚えた。多くの事柄についてお話をして頂いたが、次の一節は今でも強く記憶に残っている。

北海道の人口は五百万人、国の人口一億人の五％を占める。道民所得、国税徴収高、煙草の売上高などいずれも国のほぼ五％である。

したがって北海道は五％経済と言われている。この五％経済を六％、七％にシェア・アップすることがわれわれの任務である。この五％経済が、どのように伸展していくかよく注目していてほしい。

北海道経済はその後、順調にのびて、昭和三十年度において道民所得は国民所得の五・八二％を占めるに至った。

しかし、その後は本州先進工業地帯での新しい産業、例えば自動車、石油化学、テレビ等の急速な発展による国の経済の成長にいっつけず、北海道経済は年年地盤沈下の傾向をたどった。昭和四十四年度では四・四一％にまで落ち込んだ。

北海道経済の将来について必ずしも楽観を許されなくなってきたが、こうした中にあって大きな希望を与えるものが北方経済圏構想である。目を北方に転ずると大きな資源の賦在しているシベリア、サハリン、アラスカ、カナダ等がある。これらの地域に最も近い加工基地としての北海道への期待は大きい。

フェアバンクスの白夜に身をおいて、このような思いにふけった次第である。

日本列島改造構想と、北方経済圏構想は、北海道に新しい時代をもたらすものと思う。

北方のならず者

中野美代子（北大助教授）

この頃、私はエリック・ザ・レッドと呼ばれる千年前のノルウェー人のならず者に興味をもっている。人殺しで盗っとの彼はアイスランドに流されたが、そこから更に西へ航海して、そこで発見した途方もなく大きな氷の島に、なんと緑の地（グリーンランド）と名づけたのだった。ほとんどが北極圏内に属するこの世界最大の島がグリーンランドと呼ばれているのは、このならず者のホラの故である。人類の歴史にはさまざまなホラがつきものであるが、その中でも、エリック・ザ・レッドの壮大なホラはまことに傑作であろう。

もう一つ、北方に関するどえらいホラは、十九世紀初頭のフランスの思想家シャルル・フーリエによって吐かれた。彼の代表的著作『四運動の理論』における「北極冠」なる章のさわりを示せば、次の通りである。

「すべての創造は、男性である北極液と女性である南極液の交接によって行なわれる」また「地球は創造の欲求に激しくかきたてられている。北極光の頻発からそのことが知られる。北極光は惑星の発情の兆候であり、精液の無益な射出なのだ。人類がその準備作業をしなければ、南極液との交接は行なわれない」（巌谷国士訳による）

この途方もない大ホラに口をあんぐりあけて見呆けていると、やがて「北極冠」の影響によって北緯六〇度あたりまで耕作できるようになり「その結果、シベリアや北部カナダのような未開拓地でさえ、五度から一〇度、いや一二度も暖かくなるであろう」などといった、ひどくまともな結論にぶつかる。さきの大ホラと、このまともな結論のあいだの理屈については、



くだんの書物をお読みいただきたい。

さて、私がこの二人のホラ吹きに惹かれる理由はこうである。彼らのホラは、純粋な行動欲と好奇心とから生まれた。そして、彼らは、いかにも極端であったとはいえ、ヨーロッパ人の未知の土地への行動欲と好奇心一般をあざやかに象徴しているのである。これこそが、北方をいち早く征服したヨーロッパ人の思想的基盤である。

一方、わが国の北方への関心はどうか。明治以後の開拓↓開発にまつわる行政や経済のレベルにおける関心が昨今の日本列島改造論における北海道への関心に結びついたこと、言うを俟たない。さような低次元の関心は、きまって行政や経済のレベルで失敗するであろう。従って、私は北方に対する即物的な興味は一片ももたない。われわれが今、必要とするのは、オポチュニストの官僚でも「内地」資本でもない。エリック・ザ・レッドやシャルル・フーリエのような北方のならず者かも知れない。このことの思想的根拠は、近刊の拙著『北方論』（新時代社）で述べたので参看していただきたい。

ソ連のハマナス

荒沢勝太郎（釧路市議会事務局長）

ソ連旅行をする友人にあることを依頼した。レニングラードのカザン寺院の広場の「ドーム・クニーガ」側の植え込みに、ハマナスの花が咲いているはずだから、是非カメラにおさめて来てほしいという願いである。

私が行ったのはメーデー前後で、まだ浅春であった。ネフカ川のほとりに大きなヤナギが黄色い花粉にまみれたネコをつけていた。レニングラードの市民は、この川の上流の湖の氷が割れて川を流れてフィンランド湾へ出ないと、オー



バーを脱がないという。まだその季節は来ていなかった。

「ドーム・クニーガ」は「本の家」である。植物関係の本を買いに行った。開店時間の十一時には間があったので、向い側のカザン寺院の広場をぶらぶら歩いた。



多勢の人々がベンチで休んでいた。陽を浴びて孫のおもりをしている老人と二言三言話をしたが、うまく通じない。迷惑そうな表情をしたので、私はてれてひと廻りを思いついたのだ。

それが予期しない収穫をもたらした。広場の両端にハマナスの植えこみがあったのである。直立した株の群れである。冬を越した実はシワだらけで見すぼらしい。鋭いトゲはほこりを浴びて黒ずんでいた。たしかハマナスである。

遠い北海道の海辺に咲くハマナスを回想し、花のないレニングラードの冬のハマナスの前で、しばし旅愁をかみしめた。

この花の咲く頃、もう一度来たいと思ったが、二度と訪れる機会はあるまいというあきらめが強かった。

そのハマナスの花を見たという人から手紙をもらったが、写真撮影はしてこなかったという。そこへ知人のソ連旅行である。

彼は忠実に約束を果してくれた。「本の家」の標識やカザン寺院の彫刻や尖塔までバックにいれて、位置に間違いのないことを証明するという念の入った撮り方なので、感銘した。

それにおまけがついた。レニングラード郊外のキーロフ・スタジアムの外縁の土堤に自生しているハマナスの大群落の写真も撮ってくれた。私はそこを見ていなかったが、写真では自然の状態に近い。

ネフカ河口の低い丘陵にあるこの大競技場付近の環境はハマナスに適しているようだ。バルト海に臨んだ砂丘であったようだ。

私はハマナスを媒体として、レニングラードに深い親近感を抱いている。それは北方的な感覚からである。

北方圏人類学のすすめ

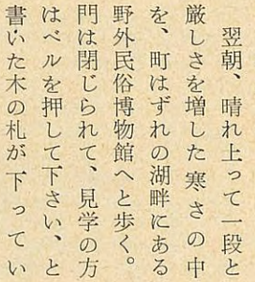
埴原和郎（東大教授）

私は、まだシベリアやアラスカなどの、いわゆる極地地帯に直接旅したことはない。しかし、その地方の住民については、専門の人類学的立場から大きな関心をいだいている。

私の興味は、まず北アメリカのインディアンやアラスカのエスキモーにそそがれた。今では、これらの人びとが一万年以上前に、アジアからアメリカ大陸にわたったことが常識になっているが、そうするとエスキモーもアメリカ・インディアンも、私ども日本人と同じ先祖をもっていることになる。

日本の人類学者としては当然なことながら、私どもの興味はまず日本人の起源に関する問題につながるが、これを明らかにするためには、やはり広く近隣の人間集団のことを知らなくてはならないのである。その手始めとして、私はアメリカ大陸に住む人びとの研究に着手したわけだ。

昭和三十四年、フルブライト交換教授としてはじめてアメリカに渡った私は、さっそくアメリカ・インディアンの骨や歯の研究を始めた。そしてデータが集まるにつれて、彼らの特徴が日本人にきわめてよく似ていることがわかったのである。とくに歯の特徴は人種の系統をよく表わすものだが、私のデータは骨以上の



類似性を示していた。

さらにその後再びアメリカを訪れたとき、私はエスキモーの歯もしらべてみた。そしてこれもまた、インディアンや日本人に共通する、モウコ系人種独特の特徴をもっていることがわかった。彼らはやはり、私どもと同一系統の人種だったのである。

このような点をたしかめたのち、私はアイヌ系住民の、主として歯の特徴をしらべることに着手した。ご承知のように、アイヌはいまだに多くの謎につつまれており、人類学上の大きな問題を秘めている。私どもは目下研究を続行中であるが、多くの点で、アイヌもまた和人やアメリカ・インディアン、エスキモーなどとの類似点をもっているように思える。そうすると、かつて白人系といわれたアイヌの起源については、もう一度考えなおさなくてはならないことになるかもしれない。

いずれにせよ、アイヌをも含めて、日本人の起源を知るためには、北方圏の人類学を強力におしすすめる必要のあることが痛感される。現在は残念ながらシベリアの住民のデータが少ない。幸いにして今後北方圏問題がクローズアップされるならば、古代アジアにおこった民族の歴史についても、私どもの知識は大きな進歩をとげることになろう。そのような日の、一日も早く来ることが切望されるのである。

モーラ小紀行

堀淳一（北大教授）

明るく、かつ静謐な美しさをたたえたシリアン湖の夕日に光る湖面を木の間がくれに眺めながら、湖に臨む小さな町モーラに着いたのは、十月のはじめのことだった。

モーラは、スウェーデン中部の、森と湖水にめぐまれ、明媚な風光で知られたダーラナ地方の主邑である。この地方は文化の伝統も古く、有史以前から農耕が行なわれ、またヴァイキングの時代にすでに沼地に産する鉄鉱から原始的な武器が作られていたということである。夏のうちは民族衣装を着かざった老若男女がさかんに踊り、観光客で賑わうモーラの町も、今は初冬の身にしみる冷気にひたって静まりかえり、人通りも稀だった。

翌朝、晴れ上って一段と厳しさを増した寒さの中を、町はずれの湖畔にある野外民俗博物館へと歩く。門は閉じられて、見学の方はベルを押して下さい、と書いた木の札が下っていた。ベルを押すと、しばらくして横手の住宅から小柄な老夫が現われて、穏和な笑みを浮べながら私を招き入れ、保存されている古い農家の主屋や家畜小屋や物置などを案内してくれた。太い丸太を組んで出来た建物の棟の上には、屋根を作っている材木がV字形に突き出て、そのうち棟のはじ



の二本だけが特別に長いのが、日本の神社の千木そっくりであった。中庭にあった井戸の形も、つるべ井戸を思い起させ、これらの建物をそっくり、たとえば野幌の自然公園に移してもピッタリはまるのではないかと思われた。

建物の内部には、かまど、家具、什器、衣類などのほか、簡素な糸つむぎ機や、かつてこの地方の特産だった種々の鉄器具が陳列してあった。その一つ一つについて、案内の老夫は、観光客のためについ最近習い始めたばかりというたどたどしい英語で、懸命に説明してくれ、おかげで往時の住民のくらしを身近にしのぶことができたのである。

老夫の暖かい手と固く握手をかわして別れてからも、私はシリアン湖の眺めにひきとめられてしばしたたずんでいたが、ようやく肌にしみこんできた冷気にうながされて、ホテルに戻ったのだった。

ダーラナの主邑とはいえ、五分も歩けば町はずれに出てしまうこの小さな町に、小ぢんまりとはしていても趣きのあふれたこのような民俗博物館があるということに、深い感銘を受けたのである。

文学史の削減

佐藤喜一
（旭川市立図書館長）

わたしは「北海道と文学」といった素稿をたずさえて、郷土誌「不死鳥」に載せたのは昭和初年だった。それをふくらまして「北海道文学」に連載しているうちに、稿半ばにして敗戦を迎え「千島、樺太編」までの予定もあったのに中断しなければならなくなった。領土の縮小と舞台の削減は、わたしなりの「北海道文学史」をもみくちゃにし、ずたずたに切り裂いた。捨て去った資料をのぞいてみたい。

岩野泡鳴の「樺太通信」「樺太の思い出」や詩、前田河広一郎の「国境からふと」、小説では宮内寒弥の「中央高地」、中編「白い焔」などは植民地文学という名前で呼べる作品として傑れたものにはいるだろう。久生十蘭（ひさおとらん）「海豹島」はミステリー風な作だ。小熊秀雄の長編叙事詩「飛ぶ橇」や「白い夜」も舞台はカラフトである。寒川光太郎の芥川賞作品に「密猟者」がある。

シベリアに飛ぶと黒島伝治がシベリア出兵に取材した「氷河」「パルチザン、ウォルコフ」「雪のシベリヤ」「渦巻ける烏の群」「リャーリャとマハーシャ」があり、「軍隊日記」等がある。彼の作品のいくつかはアントン・チェホフのサハリン物「グーセフ」などに比して遜色ない作品だった。

最近は「樺太一九四五年」というソ連軍侵入の大混乱をドキュメンタルに描いたものもでている。

東北地方（旧満洲）で刊行されていた雑誌「新京文学」「作文」（大連）「北方圏」など、これらの中には今日、全く価値ないものとしりぞけていいだろうか。

千島については長見義三、木村不二男などがそれぞれ小説化した作品があった。戦後にも木野工が「煙虫」で千島の無為な軍隊生活をかき、赤間武史が「守占島戦記」をかいた。

日露戦争当時を扱った「樺太戦史」などは日本人や樺太アイヌの血が流れていた。たしかに世界の情勢は大きく変ったとはいう。わたしは喪ったそれらの作品群をないがしろにしていいのだろうか。「文学史稿」は霧の中に消えて久しいが、さいごまでかききれなかった不甲斐なさ、不実は残されてしまった。

信州で少年期を過した私は、父の死などもあって十数年ぶりにこの島に戻ったときには、養狐場があって銀狐なども飼われていたが、野生の狐もまだ大分いるということだった。

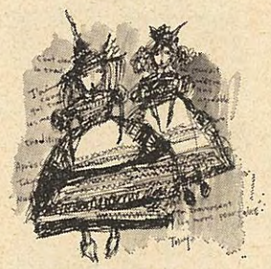


島の狐

竹井清一
（随筆家）

岬の燈台に登ってゆく途中に、招魂碑の建てられている一寸とした広場がある。そこからは小さな町全部が見渡せたし、九十九折（つづらおり）の道を下りてゆくと、風袋（かざぶくろ）と呼ばれている袋小路のような入江もあり、又、燈台のある崖では、海鳥の巣などがいくつも見付けることができるので、この一帯は子供達の格好の遊び場になっていた。季節はいつだったか記憶はさだかでないが、あたりが薄暗くなってきて遊びからそろそろ家路につこうとしていたとき、「あゝ狐の嫁入りだ！」と一人が叫んだ。遙か神社の裏山のあたり、点々と小さな灯が明滅している。それは線香の火ほどのものだが、いかにも嫁入行列の提灯（ちょうちん）のようでもある。薄暮の山裾の林にそってその灯は移動してゆき、やがて見えなくなってしまった。六、七才の頃だったと思うが、今もそのときの灯が鮮かに浮んでくる。

〃利尻の島の神様は蛇が嫌いだから一匹もいない。持ちこんでもすぐに死んでしまう。熊もいない。狐はお稲荷様のお使いだから住ませている〃と祖母から聞かされていたので、このときはほんとうに狐の嫁入りと信じたものだった。



そしてその棲み家の一つが町はずれの丘の、大きな岩石が三つ立っている通称〃三つ岩〃といわれていた。役場に勤めて間もない頃、隣の部落に用たしに出かけた老人が、この三つ岩のあたりで狐に化かされ、いくら歩いても結局はこの三つ岩の道に出てしまうので、別の道を行ったら一キロほど離れている火葬場の前に出てしまい、すっかり恐ろしくなってそのまま町に引返したという。別に危害が加えられたのでもないこの悪戯狐の話は、話題に乏しい島の人達の間であれこれ脚色され楽しく語られていた。

あれから三十数年、この北の果ての利尻島に今年は三十万人もの観光客が押しかけたという。鰊のとれなくなった島の、一つの生き方ではあろうが、あの秀麗な利尻富士のお花畑に、ビニール袋や空缶が散乱し、海の底が手にとるように見えていたきれいな磯が、旅の恥はかき捨てと汚されていると思うと、たまらない気持になる。狐の嫁入りや狐に化かされた話が楽しく語られた昔の島だけが私の故郷であり、やはり遠くにあって想うもののようだ。



みやげ品と観光ガイド

木内綾（エルムユーカラ織民芸館長）

九州から北海道旅行にこられたある大学教授からこんな話を聞いた。

「札幌の観光バスに乗ったのですよ。そうしたらね、ガイドさんが〝場所によってはおミヤゲ品を買う時は値段のまま買ってはいけません。値切れば必ずまけるし、ものによっては半額になります〟と親切にいってくれましてねえ――」

観光地で観光土産品や民芸品が不当な価格をつけて、それを段々に値下げしていかにも安く売るようにみせかけて、それでも最後は正札より高く売っている悪徳な店があるという話は聞いていた。

知らずに買物をした客が他の店でそのカラクリを知ったとき、せっかくの雄大な自然や風景にこころひかれ、たのしい旅行をしていたとしても、その不愉快さのほうがより強く印象に残ってしまうだろうと思う。しかし、だからと言って自分のふるさとでもある北海道を少しでもよい印象で旅をしてもらうためのアシスタントであるバスガイドさんが「半分に値切って買いなさい」と、アドバイスをすることは親切のはき違いである。

そうした悪徳業者はいるにしても、北海道全体でみた場合ごくひとにぎりの人たちである。あと大半は真面目に、懸命に適正な価格で北海道の民芸品を売っているのである。

私たち、ものを作っている者は、今後けっしてそうした店に作品を納めないようにしようと呼びかけている。きっとそのうちに本州から大量に入ってきている機械づくりの安手なものしか売れなくなるに違いないと信じている。北海道も今、その驚くほど安い本州からの粗悪品がアイヌ語の商品名をつけて売られ、時にはその「安さ」に道産品が圧倒されてしまうこともある。

だが土地の民芸品はその本来の価値をとりもどしつつある。念のいった手づくりの良さが高くても売れているという事実である。

それぞれが強烈な郷土臭をもちながら失われつつあるふるさとを呼びおこしているのだ。人々が心ひかれるのは、そこにその土地と風土の匂いをかぐことができるからだと思う。それを大事にしていきたい。

気どった民芸店に民芸品や染色工芸品として作品を並べるよりも、見も知らぬ旅行者が「すばらしい民芸品だ」と、よろこんで買って頂けるようなものを観光地の店にはんらんさせたいとねがっている。



（イラストは竹田季代）

シベリアのマンモス

岡田安彦（毎日新聞調査部・北方圏調査会幹事）

ひと夏数百万ルーブルの牙商人

酷寒のさなか、氷や地面が寒気でバリバリ音をたてて割れると、ヤクート人の老人たちは「あれは氷の牛が通ったのだ」といったものである。生きたマンモスの姿を見たものはいないが、長さ二㍍を越える巨大な牙がヤクートではよく見つかったので、ヤクート人たちは地下に巨獣がいて、時々地上に姿をあらわす、と考えたのだった。

そのマンモスは恐竜とならぶ古生物の代表で、いまから約二万年から三万年前に地球上から絶滅した動物である。マンモスは今もシベリア北部、とくにヤクート自治共和国で多く発見され、学術上の貴重な研究対象となっている。

むかしからマンモスの牙（門歯）は、ロシアの特産物として知られ、古い交易路を通じてアジアやヨーロッパの諸国に輸出されていた。一六〇〇年代にはロンドンにも渡ったし、また日本やアメリカにもはこばれていた。

国立博物館の小畠郁生氏によると、第一次世界大戦前のシベリアからは、毎年三十二㌧以上のマンモスの牙が輸出されていた。そのころイルクーツクの抜けめのない商人たちは、イルクーツクが〝マンモスの主産地だ〟といつわり、各地の商人と交易していた。彼らのひと夏における灌木が茂り、ところどころには樹木がみえる大草原がひろがっていた。

そこにはツメのないサイ、三本の指をもった馬（メソヒップス）象に似ているが牙を四本ももったマストドンをはじめ、現在は地球上でみられないような動物が生存していた。また現在アフリカにいるジラフやダチョウのような動物もいた。

さらに後年となり、二、三万年以前となると、だいぶ変わってくる。

サハリンや北海道でも発見された化石

シベリアからモスクワ地方にかけて灌木がまばらに生え、たけの低い草が生い茂り、泥炭地をもった一面のツンドラ地帯であった。だが、間もなく北方から巨大な氷河の全面が南下してきた。このため気候はきびしいものに変わり、動物や植物は次第に暖かい南方へと移動していった。

こうしたツンドラ地帯になおも生息しつづけていたのは、マンモスをはじめトナカイ、ホッキョクキツネなど、現在は主として極地でしか見られないような動物だけだった。

当時の人間は、マンモスやシカを狩猟して生活していた。彼らの狩猟

はワナによる方法であった。深い穴を掘り、その上に木の枝や草をかぶせて擬装し、穴にはまりこんだマンモスを槍や石によってしとめていたもののようである。

マンモスはヨーロッパ、北部アジア、北アメリカ大陸などに生息していたようで、アジアでは中国の四川省まで分布していた。その化石は、サハリンや北海道でも出たことがある。

語りたくない不吉な〝土の動物〟だった

「Mammoth」の「Ma」は、フィン語やサモエード語では、「土」の意味である。ロシア語では「Mamont」というが、これは「土の動物」という意味で、マンモスが土の中で生活していると考えられていたことからきた、という。

ところで、シベリアにおいてマンモスの発見された正確な数字は不明である。というのは、むかしのシベリアの住民の間では、土中から出てきたマンモスを見たものは、何かの災禍がその身におこると信じられてきたからである。マンモスの発見者は原因不明の病気にかかって死ぬかまたは猛烈な吹雪に見舞われる、などいわれていた。

一九〇一年、ヘルツとともにマンモス発掘にあたったE・W・フィッツェンマイヤーは、その著書の中で、ヤクートの古老が「いっぺんこの動物を見た眼は、どの眼でも泣かなけりゃならない。この動物のじゃまだてをした人間は、こんりんざい、その報いから逃げることはできない。ちょっとでも触れたものは、かならず禍いが返ってくる」と語った、と書いている。

四つの有名なマンモス発掘

いずれにせよ、現在までわかっているところでは、シベリアのマンモス、はつぎの四頭の発掘がもっともよく知られている。

(1)レナ川の三角州で一八〇六年に見つかったアダムスのマンモス

(2)一九〇一年、コルィマ川支流ベリョゾフカ川左岸で発見されたヘルツのマンモス

(3)グレート・リャコフ島のステンボック、フェルモーのマンモス（一九〇六年）

(4)ヤナ川口東北の北氷洋に注ぐサンガ・ユラク川岸のオムラク・ツンドラで一九〇七年に発見されたウォロソビッチのマンモス

このうち(1)と(2)がとくに有名である。

貧乏公爵が見つけたアダムスのマンモス

(1)はロシア人植物学者で、科学アカデミー会員だったアダムスが調査したもの。地誌学者モディスト・クロトフの著書「故郷ヤクーチャ」によって、発見のいきさつをたどると…。

一七九九年、レナ川のデルタにあるブィコフ岬で、オシプ・シュマーホフという貧乏公爵が小屋を建てようとしていた。あたりは一面に褐色の凍土がひろがっていたが、風当たりの少ない場所を探しているうち、彼は海岸の断崖に何やら黒い大きなものを見つけた。それは木の切株に似ていた。

レナ川下流地帯の夏は短く、温度も低い。日照時間もわずかで、いつも霧がかかり、風も冷たい。地下五百㍍にわたり凍結していた氷の層が融けるのに時間もかかる。

だから融けた氷の下から、褐色の縞模様のある巨大な動物の脇腹と一本の牙があらわれるのに二年もかかった。その動物の死体が地表に出たのは一八〇三年のことだった。それを見つけたオシプ貧乏公爵は翌年春、動物の牙を二本切って、商人と物々交換した。商人はそれをヤクーツクに持っていったが、氷の下から現われた動物はマンモスであった。

そのころ偶然にもアダムスが中国旅行からペテルブルグに帰る途中、ヤクーツクに滞在していた。彼は北

氷洋岸で、ばかでかい動物の発見されたことを聞いて興味をそそられた。

しかし、アダムスがブィコフ岬に行ったのは一八〇六年秋のことだった。彼が現場に着いたとき、マンモスはもはや元の姿をとどめていなかった。放置されていたため、野獣や犬がマンモスの肉を食べてしまったのである。それでも相当量の骨、十人かかってやっと持ちあげられるほどの皮膚の部分、約十六・五㌔の毛、片目、頭蓋の中の乾燥した脳髄、三本の足などを集めることに成功した。

マンモスの肩高は約二㍍で、さほど大きなものでなかったが、アダムスは全部の骨と二本の牙をペテルブルグに運んだ。ペテルブルグの科学アカデミーでは、これを集めてマンモスの完全な骨格を組み立てた。

それは貴重な発見であり、学者たちはこれに基づいて大昔に死滅した巨大な動物について、初めて具体的なイメージを描くことができた。

鳥のようには現地に飛べなかったヘルツ

(2)のマンモスは、科学アカデミーの探検隊員O・F・ヘルツの名にちなんだもの。この発見のいきさつも興味深い。

それはアダムスのマンモス発見から約百年後の一九〇〇年八月のことだった。ベリョゾフカ川（コルィマ川右岸の支流）の岸をエベン人の猟師セミョン・タラブーキンが歩いていた。野鹿の跡を追って猟犬が走った。突然、犬がほえはじめた。



1901年、ベリョゾフカ川岸で見つかったヘルツのマンモス

不審に思ったタラブーキンは足を早めて近づいてみると、岸辺の断崖の土と氷のかたまりの間に、何やら動物の頭に似た、奇妙なものが目についた。それには一本の黄色っぽい、半円形の牙がついていた。

間もなくベリョゾフカ川岸の部落からヤクーツクの県知事にあてて、一通の封書をもった急使が出された。封書には一本の鳥の羽根が封蠟でとめてあった。それは「馬を能力いっぱいに走らせ、鳥が飛ぶようなスピードで、宿駅から宿駅へと大至急に送るべし」ということを意味していた。

しかし「せっかくの通報もヤクーツクでとめおかれ、ヤクーツク市長スクリブツィンがあらためてペテルブルグの科学アカデミーにベリョゾフカで新しいマンモス見発について通報したのは、一九〇一年四月のことだった。

科学アカデミーは調査隊派遣とマンモス収容を決め、政府から一万六千ルーブルの予算を獲得した。調査隊長には昆虫学者のO・F・ヘルツがなった。彼は科学アカデミー動物学博物館の動物学主任研究員で、このほかE・W・フィッツェンマイヤー、学生セバスチャノフが同行した。

交通の不便なときだけに、彼らはペテルブルグからベリョゾフカまで列車やソリなど乗りつぎ、約四カ月半を要する大変な旅であった。現地に着いたのは、八月下旬のことで、夜は氷点下一五度以下に下がった。

マンモスの遺骸は堆積物に埋もれ、泥と氷の中にあった。発掘のため、人夫を約十人やとい、小屋を建設した。

注意深く掘り出したところ、マンモスはまだ若いオスで、肩高約三㍍、身長は四㍍もあった。肩や骨盤に複雑な骨折があるところから、このマンモスは亀裂に落ち込み、抜け

出すことができずに死んだものと推測された。舌の上には草が、また胃の中にも十分消化していない植物が残っていた。口の中に残っていた植物に、実や種子のついているのが多いので、マンモスの死んだのは秋の季節と推定された。また皮の厚さは二㌢以上もあり、皮下脂肪は九㌢もあった。

「筋の多い肉は、見たところ牛肉か、馬肉のように、きわめて新鮮でおいしそうであった。犬はそれを大喜びで食べた」とヘルツは報告書に記している。また、尾、肛門、陰茎が完全な状態で発見されたのは大収穫であった。

発掘作業は約一カ月かかり、十月十日に終了した。マンモスの遺骸は梱包され、十台のソリに乗せてイルクーツクに出発した。イルクーツクでは準備されていた冷凍車に積みこまれ、シベリア鉄道でペテルブルグに着いたのは、一九〇二年二月十八日だった。

動物学博物館におさめられたマンモスは大変な評判で、皇帝夫妻も見学にきた。部屋はペチカで暖房してあったので、腐肉の臭気がむんむんとたちこめ、皇后はハンカチを口にあてて館長の説明を聞いていた。

ベリョゾフカで発見された、ヘルツのマンモスは、骨格が組み立てられ、また復元された模型もつくられ、現在もレニングラード動物学博物館に展示されている。



一九七〇年、チレフチャコフ川岸で発見されたマンモスの足
（現在はヤクーツク地質博物館所蔵）

成熟は完全だった サンガ・ユラクの発掘

〝ヘルツのマンモス〟がペテルブルグに送られて六年たった一九〇七年に、ヤクーチャのヤナ川口東北のオムラック・ツンドラでマンモスを発見した通報がペテルブルグに入った。科学アカデミーは調査隊を送ることを決め、正式隊員としてK・A・ウォロソビッチ、それにさきにベルツとともにベリョゾフカに行った経験をもつフィッツェンマイヤーの二人が選ばれた。

一九〇八年四月、彼らはサンガ・ユラク川右岸の現地に着き、永久凍土の中に埋没しているマンモスの発掘にとりかかった。気温は昼間でも氷点下三〇度より上昇しないので、一行はふるえながら作業をした。

ペトログラードへの通報では、マンモスは「完全」ということだったが、着いてみると頭や鼻、背中など土の外に出ていた部分は鳥や野獣に食い荒らされていた。マンモスは完全に成熟したもので、しかも歯などからみてかなりの年齢のもの、それもメスとわかった。これが〝ウォロソビッチのマンモス〟で、また〝サンガ・ユラクのマンモス〟とも呼ばれている。

一九七〇年〝墓場〟が二カ所から

このあと何度かシベリアでマンモスは発見された。第二次世界大戦も終わって、一九四九年にもシベリアでマンモスは発見されたが、ベリョゾフカ川岸のものにはおよばなかった。ところが、一九七〇年にあいついで二カ所から〝マンモスの墓場〟が発見され、うち一カ所はベリョゾフカのものに匹敵するともいわれている。いずれもソ連科学アカデミーによって本格的な学術調査が行なわれた。

最初のものは、七〇年春に北氷洋に近いインジギルカ川の支流ベレリョフ川のほとりで、高い絶壁の側面に埋っていた。七月、ソ連科学アカデミーは調査隊を編成し、ヤクーツク、レニングラード、マガダンなどから地質学者、永久凍土学者、古生物学者が集められた。

彼らは現地で天幕に起居し、作業はまず消防ポンプを使って水を放出し、表面の土砂を洗い流すことからはじまった。このあと調査隊は手で掘らねばならなかった。だが、永久凍土は岩石のような堅さなので、作業は困難をきわめ、なかなか進まなかった。

こうして三・五㍍から四㍍の地下で、赤ん坊にはじまり巨大な年老いたものまで、各年齢層にわたるマンモスの骨が数千個見つかった。このほか野牛、トナカイ、ウサギなど百二十種の動物の骨もまじり、その総数は七、三六七個にのぼった。

また当時の人類が使用したとみられる石の武器も発見された。この〝墓場〟は自然のものでなく、古代人の狩猟のあとと推測されている。

いちばんの収穫は、頭部や内臓を除いたマンモスが、ほぼ完全な形で見つかったことであった。その後脚は美しい金色を帯びた褐色の毛で覆われていたが、柔毛のまじっていることから、春または冬に死んだものと考えられた。発掘に従事したニコライ・クジミッチ教授は次のように語っている。

マンモスは第四紀の指示盤ともいうべきものである。ベレリョフ川での発掘により、むかしは現在よりずっときびしい気候だったことがわかった。というのは、骨の見つかった土地から、木の株や幹などが発見できなかったからである。またマンモスの体に柔毛が濃く生えていることは、きびしい寒さに適応するためのものである。

マンモスが絶滅した原因はいろいろ考えられるが、その一つは春または夏の増水にあって動物は台地に逃げた。そのころ世界の海の水位が上昇したため、孤立した動物たちは飢えや病気で死んでしまったということと。もう一つの仮説は天体の異変である。そのころ惑星が太平洋の海中にとびこんで、このため巨大な波が沿岸を襲った。それはヒマラヤや中央アジアを越えるほどのもので、マンモスを含む多くの動物はこれで死滅し、マンモスは永久凍土の中に葬られてしまった。



一九七〇年、チレフチャコフ川で発見された
長さ二・五メートルの牙と骨

〝牙のある頭骨〟で論争に終止符

同じ一九七〇年秋のある日、ヤナ川の小さな支流チレフチャコフ川のほとりの急な坂を歩いていたアブィスキー・ソフホーズの猟師フリスリフォル・ストルチェフは、突然つまずいて断崖からころげ落ちそうになった。彼は必死になにやら木の小枝らしいものをつかんで、あやうく一命を救われた。この〝小枝〟は、実は永久凍土の中で化石となった巨大な動物の一部であった。

彼はいままで見たこともない、この動物の毛の生えた一部をサンプルとしてヤクーツク市のヤクート地質学研究所に送った。それがマンモスとわかったので、科学アカデミー・シベリア総支部ヤクーツク支部とレ

ニングラード動物学博物館から特別調査隊が派遣された。

長さ約二・五㍍の牙をもち、肩高約四㍍のほぼ完全な骨格を発掘したが、発掘隊長の地質学研究所副所長のV・ルサコフは、次のように述べている。

「この〝墓場〟は約八万年前のもので、有名なベリョゾフカより二倍も多くのものが発掘された。

マンモスの骨を組み立てた標本はかなり多いが、全部の骨がそろっているのはわずか十四体で、このうち十体がソ連にある。こんどのチレフチャコフでの発見は十一体目にあたる。ヤクーツク市にはこばれ、共和国の地誌博物館に展示されるだろう。

チレフチャコフでわれわれは貴重な情報を得た。諸君はマンモスのいろいろの絵を見て、描かれた牙が内側に向いたり、外側に曲がっているのに気づいただろう。

これまで世界の学者たちは〝牙のない頭骨〟をもって論争をしていたのだが、いまやこの論争に終止符がうたれた。

マンモスの牙は内側に曲がっており、これをシャベルのように使って飼料をとっていたのである。

牙は雪の下から餌を取り出すシャベル

マンモスの牙の向きが内側か外側かは、長年にわたって学者の論争の的であった。

マンモスの牙の生え方についての定説は「牙は一般に大きく、螺旋状で、外向きに生えている」とされていた。これはアダムスの発掘したマンモスが、アダムス監督のもとに十九世紀前半に復元されたのが根拠となっている。そのマンモスの牙は「外向き」に生えているのである。

ところが本当はそのマンモスの牙は、アダムスがヤクーチャの現地に着く前に現地住民が抜きとって、ヤクーツクで売りはらっていた。こうして牙は欠けていたので、アダムスは復元作業のとき、ほかのマンモスの牙の破片をつなぎあわせて、はめこんだ。連結した部分には色を塗ってごまかしたのが事実だという。

フィッツェンマイヤーは「こうして復元されたアダムスのマンモスの牙は、大きさも、長さも、湾曲の度合や、方向も実際のものとはかけはなれていて歯槽にきっちり合うようなものでなかったことはもちろんである」と記している。

だから、こんどチレフチャコフで発掘されたマンモスから、V・ルサノフは「牙は内側に湾曲している」と、明確な断定をくだしたわけである。そして地質学研究所の研究員たちもこれを支持し、マンモスは内側に曲がった牙をシャベルのように使って、雪の下から餌をとりだした、という見解が確証されたとしている。

牙に刻まれた絵から新しい問題……

マンモスの牙と関連して、最近また新しい問題が提起された。モスクワ大学で生物学を研究しているV・E・フリントによってである。フリントは、自然環境調査隊の隊長としてヤクート自治共和国各地を踏破した。

それは一九六五年六月十八日、アライホフスキー地区ベレリョフ村を訪れ、ベレリョフ川のほとりに着いたときだった。彼は川の小舟からおろされるマンモスの牙のいくつかの破片を見かけた。村内のベレリョフ川上流五〇㌔の断崖で発見されたものである。

若いマンモスの右の牙の破片で、長さは五・六五㍍、末端の周囲は二〇・二㌢である。牙のエナメル層の保存状況はよく、色はコハクのような褐黄色と鉄色とがまじり、一部は暗黒色である。表面はつややかで、光沢があった。

注目すべきことは、その牙の表面に線画が深く刻まれており、それは長い脚で立っているマンモスの絵であった。

絵のマンモスは、肩骨の高さで一八・七㌢額から尾までの長さは五・七㍍であった。もともとマンモスの絵画は、ソ連以外の土地でも発見されている。南フランスやスペインの洞窟に残された石器時代の人物により描かれたとみられる一連のデッサンは有名だ。しかし、これはマンモスの牙に刻まれた絵である点に特異さがあった。

フリントの脳裏にまず浮んだ考えは、こうだ。―この絵は、マンモスと同じ時代に生きていた旧石器時代の人類が、目で見たそのままを描いたものだろう。だが、この線画は非常に珍しいものなので、慎重に決定を出さねばならない。

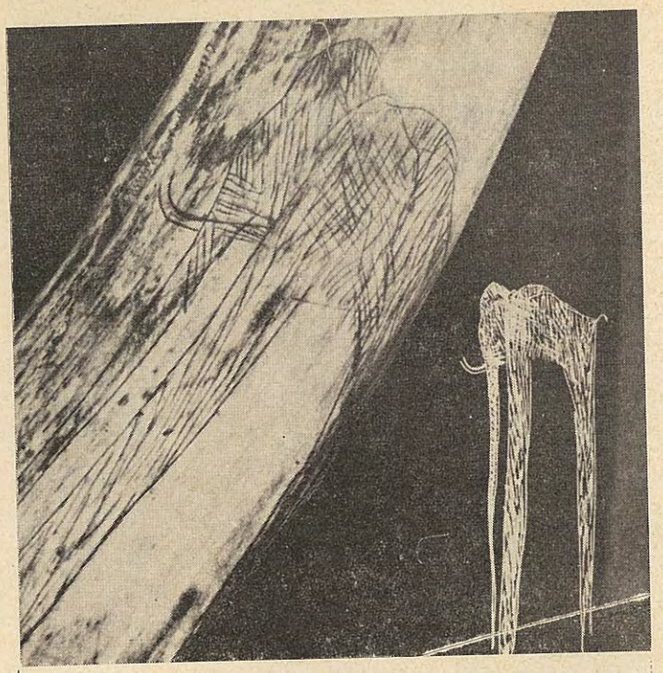
そこでフリントは、何人かの古生物学者ら専門家に会って、彼なりにいくつかの仮説を立てた。

仮説の第一は、マンモスの絵は古代人が描いたものでなく、ごく最近に現代人の誰かによって描かれたのでないかろうか、ということである。

これを立証するため、フリントは自身で牙の表面に鋭利なもので掻き傷をつけようと試みた。昆虫ピンでやってみたが、牙は予想外に堅くピンはつるつるとすべるだけだった。また牙を水に浸して軟かくして試みたが、結果は同じであった。

また絵そのものが長い年月の経過を物語っていた。というのは、線で傷つけられた牙のエナメル層は、酸化した鉄色を帯びていることである。

第二の仮説はこうである。絵は五十年ほど前か、またはそれより少し以前に描かれた。そのあと牙の破片は捨て去られ、最近になって再び現地住民が見つけ出し、そしてフリントの手に入ったものではなかろうか。これは牙の発見された場所が川の断崖で、毎年いつも川水によって洗われるところである。それにもかかわらず、長い期間にわたって発見されなかったのは、牙の破片が永久凍土の奥底に埋っていたためであり、数万年もの長年月にわたり眠っていたことを物語る。



1965年、ベレリョフ川岸で見つかったマンモスの牙とその線画　（右の図は拡大したもの）

はね上った尾は古代人しか描けなかった

フリントはそこで線画のマンモスそのものについて、さらに考察を進めた。すると彼は非常に驚ろくべきことに気付いた。それは絵のマンモスが、尻尾をピンと上に持ち上げて描かれるいることである。

彼はかつてアフリカで自然の状態にある象について、数百頭も観察したときのことを想起した。そのとき、絵のマンモスのように尾をピンとはねあげているのは、発情時の象であった。アフリカでそのとき「こうした象の行動は動物園では観察できるものでなく、自然のままに置かれたときだった。彼は川の小舟からおろされるマンモスの牙のいくつかの破片を見かけた。村内のベレリョフ川上流五〇㌔の断崖で発見されたものである。

若いマンモスの右の牙の破片で、長さは五・六五㍍、末端の周囲は二〇・二㌢である。牙のエナメル層の保存状況はよく、色はコハクのような褐黄色と鉄色とがまじり、一部は暗黒色である。表面はつややかで、光沢があった。

注目すべきことは、その牙の表面に線画が深く刻まれており、それは長い脚で立っているマンモスの絵であった。

絵のマンモスは、肩骨の高さで一八・七㌢額から尾までの長さは五・七㍍であった。もともとマンモスの絵画は、ソ連以外の土地でも発見されている。南フランスやスペインの洞窟に残された石器時代の人物により描かれたとみられる一連のデッサンは有名だ。しかし、これはマンモスの牙に刻まれた絵である点に特異さがあった。

フリントの脳裏にまず浮んだ考えは、こうだ。―この絵は、マンモスと同じ時代に生きていた旧石器時代の人類が、目で見たそのままを描いたものだろう。だが、この線画は非常に珍しいものなので、慎重に決定を出さねばならない。

そこでフリントは、何人かの古生物学者ら専門家に会って、彼なりにいくつかの仮説を立てた。

仮説の第一は、マンモスの絵は古代人が描いたものでなく、ごく最近に現代人の誰かによって描かれたのでないかろうか、ということである。

これを立証するため、フリントは自身で牙の表面に鋭利なもので掻き傷をつけようと試みた。昆虫ピンでやってみたが、牙は予想外に堅くピンはつるつるとすべるだけだった。また牙を水に浸して軟かくして試みたが、結果は同じであった。

また絵そのものが長い年月の経過を物語っていた。というのは、線で傷つけられた牙のエナメル層は、酸化した鉄色を帯びていることである。

第二の仮説はこうである。絵は五十年ほど前か、またはそれより少し以前に描かれた。そのあと牙の破片は捨て去られ、最近になって再び現地住民が見つけ出し、そしてフリントの手に入ったものではなかろうか。これは牙の発見された場所が川の断崖で、毎年いつも川水によって洗われるところである。それにもかかわらず、長い期間にわたって発見されなかったのは、牙の破片が永久凍土の奥底に埋っていたためであり、数万年もの長年月にわたり眠っていたことを物語る。

はね上った尾は古代人しか描けなかった

フリントはそこで線画のマンモスそのものについて、さらに考察を進めた。すると彼は非常に驚ろくべきことに気付いた。それは絵のマンモスが、尻尾をピンと上に持ち上げて描かれるいることである。

彼はかつてアフリカで自然の状態にある象について、数百頭も観察したときのことを想起した。そのとき、絵のマンモスのように尾をピンとはねあげているのは、発情時の象であった。アフリカでそのとき「こうした象の行動は動物園では観察できるものでなく、自然のままに置かれた象でないとわからない」と説明されたものである。

だからフリントは「マンモスの牙に描かれたマンモスの尾の形状は、マンモスと同時代に生きていた旧石器時代の人類が、見たそのままを描いたものに相違いない。ピンとあがった尾が何よりも証拠である」と結論を下している。

このほかヤクート地方には、多くのマンモスの墓地がある。たとえば延長百㌔におよぶオイヤゴツキーの断崖である。ここには永久凍土の下に古代動物王国がそのまま埋っているという。またダレレフスコエ地区、チュコチャ川のいくつかの露頭、リャコフスコエ墓地、東シベリア海岸にある延長五十㌔のハハルタシンスキー断崖などもそうである。

一九七一年六月、ヤクート自治共和国閣僚会議はアライホフスキー、ブルンスキー、ウスト・ヤンスキー、ニジネコルィムスキー地区のマンモス埋蔵地を「立入禁止地区」と指定して、その保護にあたっている。

日本では北海道でもマンモスの化石は発見されたが、シベリア開発が進むにつれ、マンモスの発見と解明はこんごも続くことであろう。

ヤクーチャの人たち

明治大学経営学部教授　山本敏

★

ヤクーチャにこういう言葉がある。

「四〇度――それはウォツカではない。

六〇度――そんなことでマローズ（酷寒）とは言わぬ。

九〇才――それではまだ婆さんとは呼べない。

一〇〇〇キロ――それはまだ距離と言うに足りない」

★



ビリュイ川の春　（ミールヌイ・ラボーチー紙提供）

神さまが落した宝の袋

☆

ことしの夏、ヤクート地方を旅行していて数多くの人からこの言葉を聞かされた。ヤクーチャの人たちからこの言葉を聞いたのは、ウォツカがかなり入ったときであった。もっともその言葉の中に出てくる数字は、人によって多少の違いがないでもない。いずれにして、もこの言葉は、ヤクーチャの生活の一面をよく物語っているであろう。

ヤクーチャを代表するのは、まず寒さである。土地の大半は永久凍土帯にある。それは人間が生活するための条件として、地球上で最もきびしいものである。ヤクート人たちがそのようなきびしい条件の中で、西にも南にも眼をやらずに、ヤクーチャでの生活を続けているのは何がゆえであろうか。しかもかれらは、喜々として、また、誇らしげにヤクーチャの生活を語るのである。

それには、ヤクーチャのもう一つの特徴、すなわち、そこに埋蔵されている無限の自然資源をあげねばならない。「むかし、神さまが、天地創造の後で宝の袋をもって各地に宝をバラ撒きながらヤクーチャの上空に来たとき、あまりの寒さに手をこごえさせて宝の袋を落してしまった」これはヤクート人のあいだに言いふるされて来た伝説である。この物語を、何人かのヤクート人から聞かされたが、その時の彼らの顔は、心からの喜びに満ちていた。

一アラスに一墓地

☆

ヤクート人の祖先と言われているクルイカン族が、アンガラ川やレナ川の上流地域に住んでいたのは、紀元前三世紀から二世紀頃のフン族（匈奴）の政治支配の時代である。二十世紀に入っていきなり社会主義が飛び込んで来るまでのこの地方の生業は、大きな川の周辺の定着漁業、タイガの中での狩猟とトナカイの飼育、ツンドラ地帯のトナカイ飼育、極北地方の海獣の狩猟であった。牧畜や農耕は、シベリアの南部地方にしか成立の条件がなかったのである。

し、墓地だけはもと住んでいたアラスの丘に残していて、三四〇キロのこのコースを走ってみて、ハンでおしたような「一アラス一墓地」の原則を確認することができた。アラスの中の大きなものは一〇〇〇以上もあり、それが出来るのに数百年を要したと言う。「一アラス一墓地」の原則を目のあたりに見て、数十世紀に及ぶこの地方での自然と人間のかかわり合いに、私は非常な興味を覚えた。

自然と人間と

☆

この地方の森林が、地球上の酸素を確保するためにもっている役割は、幾何級数的に増大している。現在、アマゾン流域で無計画な開発を押し進めているブラジル政府のやり方や、欧米、日本などの公害行政を見るまでもなく、自然と人間とのかかわり合いの問題が、全世界的な規模でこの地方に襲いかかってくるのも、もはや時間の問題になってきている。この地方の人々の過去数千年の間の歩みをふり返ってみて、にわかにそうした全世界的な問題にぶつからねばならぬとはなかなか考えにくいであろうし、悠々たるヤクート人の生活の中から、そのような問題意識を読みとることは、現状ではきわめて困難である。しかし、問題がいざ現実のものとなったとき、社会主義とか資本主義とか言う前に人間社会の基本的な問題が論議され、人間と自然とのかかわり合いの原則的なあり方が、改めて大きな問題としてとり上げられるであろう。

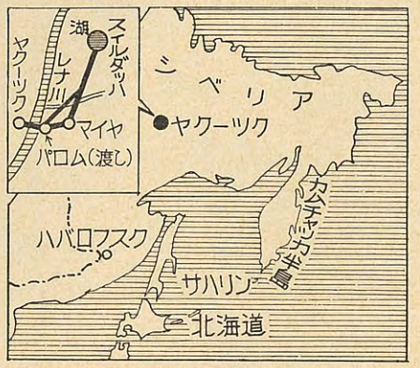
いきなり社会主義へ

☆

チュクチ、コリャークその他、一般にシベリアの原住民たちがつくり出して来た経済的、文化的な類型は、生産力のきわめて低い発展段階の水準のものであった。もちろん、ヤクートもその例外ではない。これらシベリア諸民族のあいだには、原始共同体的社会機構が根強く残されているものもあり、家父長制的氏族機構の特徴を残しているものもある。かれらの間の民族的信仰として、シャーマニズムが広汎に普及していたし、現在もまだこれは残されている。十八世紀の初頭以来、ツァーリ政府の強力な支持の下にギリシャ正教の布教活動が展開されたが、それでもなお原住民たちの民族信仰をかき消すことはできなかった。時としてギリシャ正教の信仰と混淆し、二重信仰と呼べるものも生じた。

ヤクート人は、十九世紀の時点において、まだ数多の部族に分かれ、その首長としてトイオン（家畜の数を多くもった富裕者）が君臨していた。かれらトイオンたちは、貧しく、「持たざる者たち」に、さまざまの形での封建地代を課していたし、二十世紀になるとかれら有産者たちは、ロシアのブルジョア経済と密着するかたちをとってきた。

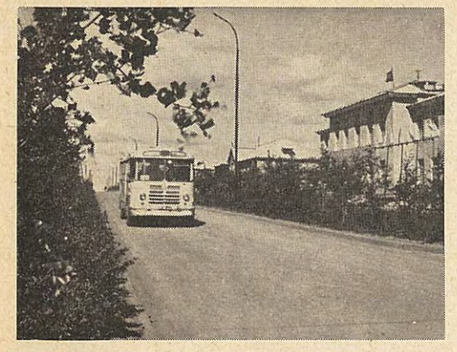
この時期のヤクート人とロシア人とのかかわり合い、それは他のシベリア諸民族の場合もそうであるように、まず「不等価交換」のかたちをとっていた。シベリアの奥地で、経済的にまともな発展の過程をとるた



である。

ヤクート人の牧畜は、必ずしも定着したものではなかった。定着して有角家畜のトナカイや牛を飼養するに足るだけの草地が足りなかった。永久凍土帯であるこの地方の表土は厚いところでも、一㍍程度しかなく、検土杖を突っ込んでみると場所によっては六〇㌢ぐらいで固い凍土にぶつかってしまう。凍土の層の厚さは二五〇㍍以上もあると言われている。このような永久凍土帯にタイガと呼ばれる密林が続いているのであるが、山火事が起こったり、人間が入って道を拓いたりすると、その部分の凍土が融けて一〇㍍前後も地盤沈下を起こすのである。そうして出来た盆地（アラス）は、トナカイや牛を飼うための格好の牧草地となり、そこにヤクート人の一家族（しばしばそれは大家族である）が住み着くことになる。今夏、ヤクツークからマイヤを経て、チュンギュリュ、スィルダッハに到るコースをジープによる旅をしたが、これはアラスの数の多い典型的なコースである。ジープで約二十分も走ると次のアラスに到着する。そこに住んでいたヤクート人たちは、今ではコルホーズやソフォーズの集落に移り住み、アラスには住

めに、シベリアの自然条件はいかにしてもきびしきに過ぎて、大きな障壁として立ちはだかったのである。だから、一九一七年にソビエト政権ができて、国の経済が社会主義体制をとって進められたとき、シベリアの奥地では、資本主義時代を経過することなしに、いきなりこの社会主義体制に応対しなければならなかったところがほとんどである。ソ連を構成する十五共和国の中には、このような例は少なくない。一九一七年十一月十五日の「ロシア諸民族の権利についての宣言」にはじまって、これら後進諸民族には、経済的、文化的にあらゆる援助手段がとられた。とくに北方諸民族の援助のために、一九二四年に北方委員会が設けられたが、これより先、一九二二年にブリヤート・モンゴル自治共和国（現在はブリヤート自治共和国）と並んでヤクート自治共和国が設けられた。



ミールヌイ市内

町造り村造り

☆

以来一貫してソビエト政府の物心両面からの援助が続けられて今日に到っている。多くの都市や村落の建設が行なわれ、農村のコルホーズ建設も進められた。今、ヤクーチャのどこを歩いても、すさまじい勢いの町造り、村造りが進められている。ただ、われわれにとって気になることは、そのようにして進められている村造り、町造りが、どこの村、どこの町を見ても、ハンで押したように同じ形式で進められていることである。すなわち、中央部に広場があり、そこにはレーニン像が立っていて、その周辺に学校、病院、文化と休息の家、ピオネール宮殿、クラブという風である。もちろん、これらの場所には、以前はまったく何もなかったのであって、そうした町の施設ができることによって、一気に「文化」の域に到達した現住民たちにとっては、その劃一性に対する不満や不適合性などまるで問題たり得ないのであろう。ソ連政府は賢明にも、教育、出版の面でそれぞれの民族語を尊重した。このことは、とくにアメリカにおける民族政策の失敗例と比較して、ソ連の対内政策の成功をもたらした。

物質的生産の面では、運輸、通信網の整備を背景として、生産センターが創り出された。狩猟、遊牧諸民族のあいだに定着農業が興され、次いでその協同化がすすめられた。ブリヤート、アルタイ、ハカス、トゥワなどの諸民族がそうしたように、ヤクート人たちもコルホーズの部落をつくった。

北方地域での協同化の成功は、この地域の生産作業が集団による協力を必要とするものであったことにもよる。一九三〇年の末ごろになると、従前の氏族的な生産単位から協同組合（アルテリ）が結成され、生産手段の協同化にまで進んだ。北方地域に広く社会主義的生産関係が浸透しはじめるとともに、これらの地域の産業開発に応じて、技術をもったロシア人たちが多数入り込んできた。その数、今や人口の半ばに及んでいる。

折返しのないズボン

☆

定着生活が始まると、ヤクート人も丸太作りの家に住むようになり、かつての住居である土小屋には今では家畜を住まわせている。服装も、とくに第二次世界大戦後に大きく変わった。今ではソ連のどこの都市の住民とも相違はない。

私がとくに驚いたのは、男性用ズボンの裾の折返しのことである。モスクワはじめ各都市を回ってきて、折返しのついたズボンをはいている人のいないことに気がつき、ヤクーチャに入ってからもこのことに何時も眼をやっていたが、ついに一人も発見できなかった。

折返しのないズボンが世界のモード界に登場してから何年経ったのかは知らない。私自身はまだ旧式のズボンしかもっていなくて、今度の旅行も旧式モードのまま歩いていたので、このことにとくに注意していたのであろう。旧式ズボンの人が三人や五人ぐらいいてもよいだろうという気持もあって「何か上からの指示でもあったのか」と聞いてみた。私が聞いたのは三人のヤクート人であったが、三人の誰もに「それはモードですよ」と、軽くいなされてしまった。

りの中の唯一の男性である私が、まず最初にダウンする仕儀となってしまった。女性にして然りである。まして男尊の風が残されているこの地方の男たちの酒豪ぶりについては、ヤクート語を以てしかその実感を表現し得ないであろう。レナ川の渡し船に十七年も働いているというスベルドロフスク生まれの叔母さんが「ヤクーツクは世界で一番良いところだ。家族全部連れて来てここに住みなさい」と言ってくれたとき「自分はウォツカがあまり飲めないから駄目だろう」と言ったら、「それではしかたないな」と、情けなさそうな顔をしていたことを思い出す。



ヤクートのタイガにて
（ミールヌイ・ラボーチー紙提供）

まった。

「ウォツカが飲める？」

☆

ヤクーチャに入る資格の一つに、ウォツカが飲めるかということが言われている。私は次男のペンフレンドの一人をヤクーツク市の外れの彼女の家に訪ねる機会を得た。彼女はマリーナと呼び十三歳、妹のナターシャは十一歳、二人姉妹で、機械技師である父親は隣りの町に出張中であった。4DKの住宅に、祖母、母、叔母二人が集まって遠来の珍客を招いてくれた。初めは軽く盃を合わせていた彼女をとりまく大人たちも、次第次第にピッチをあげ、集ま

スィルダッハの村に着いたとき、中学の校庭に建てられた第二次大戦の犠牲者の碑が、まず眼についた。四百名を越す戦没者の名前が克明に記されていて、私はその数の余りにも多いのに驚いた。東部戦線でヒットラー軍を悩ませたのがシベリアっ子たちだったことについては、多くの記述がある。中でも狩猟民族だったヤクート人の射撃力がその原動力であったと言う。しかし、それなりにまたヤクート出身兵の犠牲も大きかったのであろう。碑のまわりには生花が飾られていた。一年の大半を厳寒の中で過すこの地方では、生花を供えることのできる期間もほんの僅かしかないであろう。飾られた生花が如何にも痛々しく、戦争の傷跡がソ連全土の隅々にまで残されていることをあらためて思い知らされた。

大らかにのびのびと

☆

ヤクーツク市の中心部からやや外れた位置に、ヤクーツク国立大学の本館がある。学部によってはまだ市内の別の建物に入っているものもあるが、堂々たる本館の威容は、現代ヤクート文化の象徴と呼ぶことができよう。学生の七〇％がヤクート人で占められ、ロシア人が一四％、残りが他の諸民族である。ヤクーツクからレンスクまで、船で四日近くレナ川を上ったとき、ヤクーツク大学を出てモスクワ大学大学院佛文科に学ぶ学生と一緒だった。何でも知ろうとする旺盛な知識欲をもった彼に、私はデッキやサロンで夜となく昼となく話しかけられた。かれは、新しいソビエト文化の担い手たらんとする抱負に満ち満ちていて、ヤクート人意識を失っているのではないかとさえ、私には思われた。「卒業したらヤクーチャに戻って、ヤクート文化のために働くのか」という質問には「それが必要ならば喜んで戻って来る。しかし今はフランス文学、一般に西ヨーロッパ文化を学ぶことでいっぱいだ」と答えた。どうも私のこの質問と彼の返事との間には、少なからぬ隙間があったようだ。ヤクート人とロシア人の間には何らかの確執があるべきだし、ソ連には何が何でも事あれかしという姿勢、それは日本における一般のソ連認識の風潮であるが、それがしばしばマト外れであることが露呈されて、私は独り自らを恥じた。今やヤクート人たちは、民族の相違や自然条件のきびしさを乗り越えて、大らかにのびのびと歩いているのである。

日本語の中のロシア語

清水威久

〔1〕

「ロシヤ」と「ロシア」

ながい『ロシア遍歴』――といってもシナ浪人のような豪放な打ち込み方をしたわけではなく、ロシアに住んだ期間も十年と少しに過ぎないが、大正の末期からロシア語に携わり、ロシア語を生活の手段とし、朝・昼・夕べの友としてきた関係で、筆者の頭の中には日本語の文献および日常会話の中に出てくる、または『日本語』として使われてはいないが、日本語に何等かの関連のある、それ故に筆者に特別の関心を呼び起させる古くからの、または、新しく取り入れられたロシア語（単語）が相当多く蓄積されている。それらの中には自分なりに納得の行く『解決』ができたり、あるいは、所詮『解決』不可能と分かったりして、今では別に気に留めてもいないのが多いが、同時に、三―四十年も前から気にし出し、いまだに疑問が解けずに、気になっているものもある。

この拙文では、それらのロシア語について、筆者の知り、または、考えていること、感じていることを述べ、読者読賢のご参考に供するとともに、筆者の思い違い、杜撰、粗漏その他、お気付きの点についてご教示いただきたいと思う。ただ、筆者は目下、別の仕事に忙殺され、資料あさりが意にまかせないので、ちょっと調べれば分かるはずのことも、分からぬままで提起しておくことを、あらかじめご寛恕乞う。

さて、ペンは執ったが作者は一体に育った年輩の人たちには、こよなく懐かしい歌であろう。少し遅れて誰だったろうか、白秋だったか、御風だったか、それとも……。

行かうか、戻ろうか、
　オロラの下を
ロシヤは北国、はてしなく、
西は夕焼け、東は夜明け
鐘が鳴ります中空に……

いい歌である。明治に生まれ、大正（？）「流れ流れて落ち行く先きは、北はシベリヤ、南はジャバよ」だの「おれは河原の枯れススキ」だのが、はやったが、それらにくらべて、この歌は、歌詞もメロディーも一段と詩的で、頽廃的、絶望的なところがまだ少なく、その上に、欧亜両大陸にまたがる、東と西とでは六―七時間も時差のある『オーロラ』も見える広大な国ロシアを、まことに見事に描き出している。最後の句「鐘が鳴ります……」は、古いロシアを知らない人たちにはピンと来ないかも知れないが、ギリシャ正教が華やかだった時代（革命後も十年ぐらいは何とか続いた）の復活祭などに、教会という教会の一際高く聳え立った鐘楼から、一斉に、にぎやかに打ち鳴らす三連鐘（ロシア語では「トレスヴォン」という）は、まさしく中空（なかぞら）に響きわたったものである。

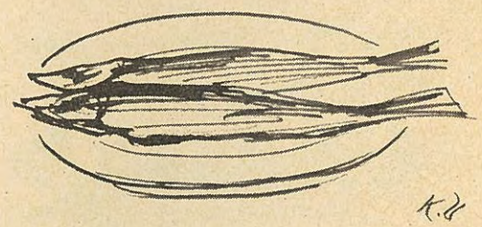
ところで、この歌を歌う時「ロシア」（原作も、多分、こうなっていると思うが）を厳格に「ロ・シヤ」と発音する人は、恐らくあるまい。あっても例外的で、大多数の者は「ロシヤー」と発音するだろう。古いロシア通は、普通の場合でも、好んで「ロシヤ」「ロシヤ」と言っていたものである。それが、あたかもロシヤ通の『ロシヤ通』たるゆえんでもあるかのように――。

『スラヴ説』と『ノルマン説』

それはさておき「ロシア」という言葉は、語源が不明なのである。

この言葉の起源については、最初はノルマン説が圧倒的で、この言葉は九世紀後半スカンヂナヴィア半島、詳しく言えば、今のスウェーデンのストックホルム地方から、一族郎党の武装団を率いて北部ロシアのノヴゴロド（レニングラードの少し南、当時はロシア第一の商業市だった）に渡来して、ロシア最初の国家ノヴゴロド公国を興し、まもなくキエフに遷都、複雑な迂余曲折を経はしたがともかく、十六世紀の末までロシアに君臨していたリューリク朝の祖・リューリクの氏族名か、出身地名から出たのだろうとされていた。その他、当時スカンヂナヴィアの各地から続々と船出して、ヨーロッパ沿岸、地中海方面まで荒し回っていたバイキングの片割れとしてのリューリク一党の素性を裏書きする『舟漕ぎ』の意味の言葉から出たのだろうとの説などもあった。いずれにしてもノルマン系のリューリク朝とのツナガリが強調されていたのである。

ところが、それではロシア人の沽券（こけん）にかかわる。そこでロシア最初の世界的大学者ロマノーソフ（一七一一―六五年）がノルマン説に反対し、「ロシア」という言葉はスカンヂナヴィアから伝来したものではなく、ロシア平野（ポーランドとウラル山脈との間）に古代からあったのだとするスラヴ説を唱え出した。ロマノーソフは現在のソヴィエト政権からも愛国主義者として称揚され、宣伝されている学者で、彼がスラヴ説を提唱した背景には、当



時のロシア・アカデミー（一七二四年ピョートル大帝によって創立されたもので、現在のソ連科学アカデミーの前身）がドイツ人を主とする外国人学者たちに牛耳られていたことにたいする反発があった。だから、スラヴ説はロシア人の学者たちに大きな刺戟と勇気を与え、彼等が続々とスラヴ説に加担して、ノルマン説を排撃する研究を発表するにいたり、ノルマン説派との間に激しい論争が展開されることになった。だが、スラヴ説にも、ノルマン説にも、これといったキメ手がなく、スラヴ説派はドニェプル河の支流のロッシ川の名称などを持ち出したりしたが、ロシア人の中にも科学的見地からノルマン説を支持する学者たちがおり、結局、水掛け論に終ってしまった。

外国とロシアが語源戦争

ここで忘れてならないのは、外国側の多くの学者たちは、単に「ロシア」という言葉が『ノルマン出』であることを主張したばかりでなく、ロシア国家がノルマン人（ゲルマン民族）によって建設されたことを指摘し、そこからさらに、ロシア人は国家を組織する能力に欠け、他民族（直接にはゲルマン民族）の支配を受けるべく運命づけられた民族だ、という結論を導き出していたことである。ロシア人にとっては、これは何よりも我慢のならないことであった。だから、論争が行き詰まり、幕が下ろされてからも、ロシアの学界では時折りスラヴ説を主張する個々の研究が発表されていた。

そこへ第二次大戦前、一九三〇年代の初め頃から、ナチス・ドイツの学者たちが昔のノルマン説を蒸し返し、それを根拠にしてソ連征服、少なくともウクライナぐらいはドイツの支配下に入るべきだとの意図をムキ出しにするにいたった。それを見ると、ソ連側も黙ってはいず、直ちに学者たちを動員してスラヴ説の宣伝に乗り出し、両国の学者間に再び往時の論争のような、いな、それ以上に緊迫した論争（なぜなら、今度は問題が戦争の可能性に結び付けられていたので）が始められた。だが、やはり双方ともキメ手を出すことができず、ナチスの敗滅とともに、またもや、うやむやになってしまった。

語源はともあれ、「ロシヤ」という言葉は古くは「ルゥシ」で、「シ」は「ス」に近く、ローマ字綴りでは「ルゥス」になった（「シ」は子音「エス」にロシア語特有の軟音符がついたものである）。

17世紀前半までは『ルゥシ』

「ルゥシ」が、いつ頃から「ロシア」――正しくは「ロッシーヤ」と書いて、多くの場合「ラッシーヤ」と読む――となったのか、それはハッキリ

もも「日魯」で押し通している同社もさることながら、この名前を見ても、今時の若い人たちには何の意味か分からないのではなかろうか。

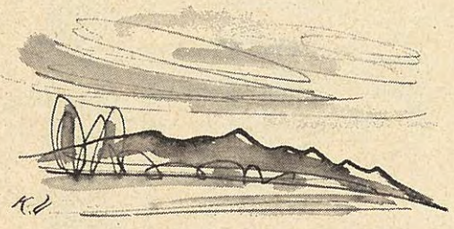
原語では「ラッシーヤ」なのに、どうして末尾を「亜」（ア）としたのか。これは、多分、英語の影響だろう。英語では、ロシア語の「イヤ」ほどではないが、好んで「イア」の語尾が使われているようだ。シベリアの原名は「シビーリ」だが、英語では Siberia「サィベリア」である。せめて《Si》を「シ」と読ませればよかったのだが、英語では、それも駄目なのであろう。

翻訳に困る二つの形容詞

ところで、英語の Russia はロシア語のロシアの古い形「ルゥシ」と新しい形「ラッシーヤ」を半分ずつ取ったものである。「ルゥシ」と「ラッシーヤ」は同じ意味なので、両方から半分ずつ取っても意味に変りはないが、ロシア語では、この二つから作られた形容詞は別々の意味になる。「ルゥシ」から出た形容詞「ルゥスキー」は「ロシア（狭くは昔の大ロシア）の」および「ロシア人（狭くは大ロシア人）の」意味で、例えば「ロシア語」という場合の「ロシア」はこれである。「ルゥスキー」はさらに名詞として「ロシア人」の意味に用いられる。それに反し、「ラッシーヤ」から作られた形容詞「ラシースキー」は「ロシア国家の」または「ロシア国家内の全部の民族」の意味で、固有ロシアおよび固有のロシア人だけに関するものではない。

例えば、昔の「ロシア帝国」の「ロシア」は「ラシースカヤ」（女性）だったし、今のロシア共和国（ソ連を構成している十五の共和国の一つ）の「ロシア」も同じである。もっとも、この二つの形容詞も混用される場合が多く、「ロシア皇帝」の「ロシア」は正式には「ラシースキー」だったのに、一般には「ルースキー・ツァーリ」と呼ばれていた。困るのは、この二つが区別されている場合の訳し方で、日本語には「ロシア」という字の形容詞がないので、初めから訳し分けは不可能なわけだし、形容詞のある英語その他でも、おそらく困難なのであろう。

「ロシア」という言葉は本来はヨーロッパ・ロシア（ロシア平野）を指し、狭義の場合は大ロシア（すなわち、ウクライナと白ロシアを除いたロシア）だけを指す。したがって



で、その他にも「イヤ」の語尾のものは枚挙にイトマがない。あまり不自然でない場合は、一律に「イヤ」に統一（？）されたのであろう。

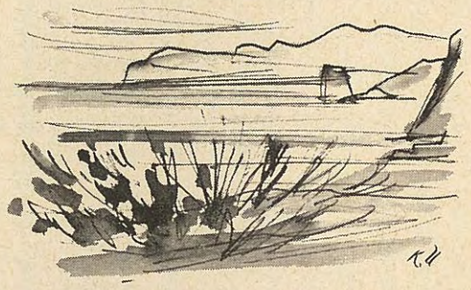
日本では『露西亜』『魯西亜』

日本では以前は「ロシア」を漢字で「露西亜」または「魯西亜」と書いていた。中国でも「露西亜」と書いている。「魯西亜」と書いたのは日本だけかどうか知らないが、「魯」は「魯鈍」等に通じるので、かつてロシア側から北洋漁業の親玉、日魯漁業会社に苦情を申し込んだが、同社は何とか、うまい理窟をつけて、はねつけた、とか聞いている。今では例えば「ロシアからシベリアに来た」とか「シベリアからロシアに帰った」とか、言うことが出来、そうした言い方は文献にも、日常会話にも、稀でない。と同時にシベリアは旧ロシア帝国の領土であり、今もロシア連合共和国に入っているのであるから、「シベリアはロシアだ」と言ってもよいことになる。（ただし、コーカサスやトルケスタンは帝政時代にも「ロシア」とは言われなかった。古来の住民が圧倒的に多く、ロシア人は僅かだった上に、征服された時期がシベリアよりもあとだったからであろう）

『ロスケ』は悪口ではない

ともあれ、「ロシア」という言葉は、本来は「ロシヤ」と書いた方が原語には近いのである。だが、試みに「ロシヤは北国……」と歌って見たまえ。いや応なしに「ロシャー」よりも「ロシァー」に近くなるであろう。その上、書いた字面も「ロシヤ」より「ロシア」の方が、何となく感じがよい。それで筆者も、別に英語に敬意を表してではないが、久しい前から「ロシア」と書くことにしている。どのみち原語通りには行かないのであるから……。

ところで「ロシア」の頭文字「エ」は英語の「アール」よりも遙かに強く発音され、巻き舌とでもいうのか、舌を激しく震わせなければいけない。別に、そう難しいわけではなく、日本人でも最後まで出来ない人はほとんどないのであるが、最初から出来る人も滅多にいない。出来ない人は、前に「アー」とか「オー」とか、母音を入れて発音するとよい。そうやって半年も練習を続ければ、大概の《難症》もなおる。昔の日本人がロシアのことを「オ(ヲ)ロス」（漢字では斡魯斯）または「オ(ヲ)ロシヤ」と言っていたのも、母音「オ」または「ウ」と「オ」の二つを利用したものである。中国語ではロシアを俄国または俄羅斯（この漢字名は日本でも用いられた）と言っているが、やはり、同じ理由からであろう。



もう一つ。わが国では以前はロシア人を「ロスケ」と呼び、「露助」と書いてもいた。これは一般に悪口のように思われているが、本当は悪気があってのことではなかった。

「ロスケ」は、いうまでもなく、「ルゥスキー」の発音が崩れたもので「露助」はそれを漢字にした（ちなみに「助」は人名に多用されている字だ）だけであり、筆者の先輩たちも、ロシア人との交友の自慢話をしながら、「ロスケは、……ロスケが……」と、よく言っていたものである。語呂の感じは、たしかに、よいとはいえないが……。

清水　威久氏　明治三十七年生まれ。大正十五年、外務省ロシア語学生としてレニングラード派遣、以来モスクワ大使館、ハバロフスク総領事館に約十年間勤務。ハルビン学院教授に経て戦後は昭和四十五年まで外務省勤務。「ロシア建国外史」「ソ連邦とロシア人」「ロマノフ朝最後の日」などの著書がある。東京在住。

（カットは道展会員　氏家和夫）



始まった民族語の授業

アラスカ・エスキモーの場合

小樽商科大学・助教授　宮岡伯人

シカゴでの集会

いささか旧聞に属することながら、二年前の夏シカゴ大学で初めてエスキモー語を研究する者の集いがありました。ささやかな集会で招かれた者二十数名、その中には三名のエスキモー人も含まれていました。互いに文通による接触がこれまであったにしても、多くは初対面の人達です。全員の研究発表、休憩時間や晩餐会にまでわたる討論、意見交換のそれぞれが極めて有意義であったことは言うまでもありませんが、何しろ研究者の数も少ない分野であるために、ふだん専門的な問題について直接話しあう相手も周囲にはほとんどいない者同士が初めて一堂に会し得たわけですから、それは喜びと興奮につつまれた三日間でした。

民族意識と言語

ただこの種の集会（少なくとも日本の）には余りみられない予定が一つ組み込まれていました。最終日の午後全部をあててなされた討議は、要するに、これまでの研究の対象としかなってこなかった人々に対する配慮の問題です。ここで大方の一致が得られたのは、次のような点です。(1)エスキモー人相互の文化的交流の必要性（グリーンランド、カナダ、アラスカ、シベリアに分散するこの民族相互間の接触は現在ほとんどありません）。(2)研究者は努力の成果、利益を何らかの形で研究対象とされている人々に還元すべきこと。(3)エスキモー人の中から母語の研究者を育てる努力がなされること。(4)この言語を死滅に向かうにまかせるのではなく、保持され、さらには公用語としての資格がアラスカ、カナダでも認められる方向に積極的な運動が進められるべきこと。(5)相似のある他の学問領域（人類学、民族学、考古学、その他北極に関連をもつ自然科学）および政治、経済、教育等の分野においても認められるような努力がなされること。

この種の問題が学会という場で討議され、確認されること自体が注目に価すべきこと、場合によっては奇異なことのように思えるかも知れません。この討議はしかし単なるハプニングでは決してありません。米国内の研究者が、あらかじめある程度の下準備をしていたようです。ただそれを支える大きな流れがすでに米国には存在するということなのです。民族の誇りとその民族たるの意識（アイデンティティ）を守り続けるための最も有力な支柱を言語のうちに認め、その民族固有の言語と文化を保持していこうとする動きは、最近とみに米国内の多くの少数民族において目立ってきています。一方では国内の政治、教育関係者が多年の同化主義にたつ英語のみによる教育の生みだしてきた大きな弊害にやっと気付きだしたのです。こういった背景のもとに連邦政府やいくつかの財団が多額の資金援助を認め、各地で二言語併用の初等教育の試みが始まったのは、ここ数年のことです。

以下、アラスカで始まったばかりのこの新しい動きを紹介しておきたいと思います。

英語同化は失敗

アラスカには古くからエスキモー人、アリュート人、ナデネ語系のインディアンが住んでいました。公教育がアラスカで始まったのは米国がこの地をロシアより譲り受けてから約二十年あとのことです。そして一八九〇年には内務省がアラスカ原住民を専ら英語で教育すべきだと定め、他の言語で書かれた教科書は認めないという立場をも明らかにしました。

しかしながらアラスカに関するかぎりこの方針は成功したとは言い難いようです。これには様々な原因が挙げられています。すなわち、英語を何よりもまず教えこむことによって同化を早めようとした制度そのもの、原住民向きであったことがない教育内容（彼等の文化に即さぬ教科書など）、教師の質とその入りこまねばならなかった不利な環境等々。

また英語と民族語の著しい構造上の隔たりを指摘する人もあります。

ともかくも八十年以上経った今日、どの原住民の村を訪れてみても（村や民族による多少の差はあれ）、まともな英語の話せる人がいかに少ないかに驚きます。民族語の生きている村の中だけの生活であれば、さほど問題になることもないでしょう。

しかし村を一歩離れた英語社会の中では事情は全く異なります。不完全なコミュニケーションが当人の知らぬ間に生活上の基本的な権利まで奪いさるという事例は珍しくありません。また標準以下のまずい英語そのものが偏見、そして差別の大きな原因となり得ることも忘れてはなりません。

二言語併用教育

アラスカ原住諸民族のうち南西部のエスキモー人（一万五千人）の間で最初に二言語併用の教育の試みが始まりました。二年前のことです。とりあえず小学校三年生程度まで民族語による授業を行ない、次第に英語をいわば外国語として導入していこうという計画です。ところでこのような計画をあらたに実施するには様々な準備が必要であることは容易に想像し得るところでしょう。まず当の民族語を書き表わす文字です。伝統的なエスキモー文化に文字はありません。妥当なところローマ字の使用が決まりました。しかしローマ字を用いるといってもそ、の使用の仕方を定めることが実は大変難しいのです。その言語の音韻組織の正しい理解がどうしても必要です。アラスカ大学では数に前からエスキモー語を教えるのに使う初等文法の作成を手がけていました。このために音韻法の闡明には相当の時間が費やされ、やっとこの文法書に用いる実用的正書法が定まりかけていたのです。民族語の授業に用いることになったのもこの正書法です。原則として一字一音主義です。英語とは音韻組織の著しく異なる言語ですが、移行が容易であるように可能なかぎり文字の選択、使用法を英語に近づける配慮がなされています。これまで原住民村の学校は土地の言語を話せない白人の先生が大部分でした。そこで主に高卒程度のエスキモー青年が補助教員にえらばれ、先の正書法の習得を主とした集中的な訓練が施されました。こうして一九七〇年秋から最初の年度にはクスコクウィーム地方の三つの学校、それに対象校として別の三校がえらばれて、前者で民族語による授業が実験的に始められました。

札幌グランドホテル特製
中華バイキング
毎夕5時～8時迄営業
お一人様1,500円（税金・サービス料共）お子様800円
札幌グランドホテル　3階中華料理・黄鶴

存続に拘る変化

南西エスキモー村のほか、シベリア・エスキモー村のほか、シベリア・エスキモーの言語に近いベーリング海上のセント・ローレンス島、同じエスキモー語と呼ばれながら南西部のそれとは英語とドイツ語程にも異なっている北アラスカ、さらにはインディアンの若干の集団でも、同じく二言語併用の教育が計画、準備されています。すでに一部では実施が決定しており、あるいはこの秋あたりから実行に移されているかもしれません。もちろん、最初に始めた三つのエスキモー村でもやっと三年目をむかえるところです。英語の指導が加わってくるのも実はこれからです。ここで触れるような効果をもたらそうとしているのか、また今後どのような発展をとげようとしているのか、何ら決定的なことを言い得る段階でないことは明らかです。ただこの計画がどのエスキモー村においても歓迎され、受け入れられつつあることは確かなようです。エスキモー人、アリュート人、インディアンの連携をはかる原住民同盟（ＡＦＮ）でも昨年すでにすべての原住民の学校における民族語の授業を要望する決議を行なっています。先の正書法は南西エスキモーの村々に急速に浸透しつつありますが、自らの言語による読み書きが可能になったということは、古くから、いわば当然のこととして文字を受け継いできた私共には想像しがたい程に大きな誇りを原住民にいだかせることになったようです。政治面での動きを適切にまとめることは私にはできかねますが、例の石油資源開発に端を発した土地の返還運動などにみられるようにアラスカにおいても民族意識は急激な高まりをみせ、先の原住民同盟を中心として次第に政治的な発言力も強めてきているかに思われます。あいまって二言語併用の形で固有の言語を保持しようという動きは、アラスカ原住民をめぐる状況に全体として一つの変化が生じていることを教えてくれます。それは全国的な趨勢の中にあって、各少数民族の存続の基本にかかわる変化と言うことができるでしょう。

冒頭にふれた学会に参加したエスキモー人研究者の一人はこう述べています。自らの言語を研究すればするほど、それが私達の生活そのものをよく反映していることがわかります。それだけに他の文化要素にまして言語を固守しようとするのです。文化変容は致し方ないことでしょう。しかし自らの言語をそのために放棄することは代価として余りにも大きすぎるのです。

という長年の方針からすれば、これは大転換といえるでしょう。ところで、むしろアラスカでのこのような運動を提唱し、積極的に準備をすすめてきたのはアラスカ大学のクラウス博士を中心とした数名のグループです。氏は特にナデネ諸語の研究で知られる優秀な言語学者ですが、原住民を含めた少数民族の問題にも、とりわけ見識の高い人です。この人達の指導のもとに現在も補助教員の養成および教科書、読本類の作成がこの大学で行なわれています。過去、十二年の間に作られた三十冊程の出版物が私の許にもこの春送られてきましたが、書き方の練習帳などを含む教科書類のほか、例えば口頭伝承、若い原住民の詩集、児童向けの有名なお話（「あかずきん」など）の翻訳、さらに興味深いものとしては解説付きのエスキモー語版「権利章典」（一七八九年）があります。

Question and Answer

Qアンド A—。これは会員や読者の質問に対する回答のページです。

北方圏に関することは、最近次第にわかってきましたが、それでもまだ不明な点が多いようです。本誌はそうした疑問や問合わせに応じ、できるだけ皆さんのご期待にそいたいと考えております。産業、経済、文化、学術なんでも結構です。

Q 北海道とソ連極東の港と、新たに貿易の航路を開設するにはどうしたらよいか？。

A ソ連の極東で、外国・船舶の寄港に開放されているのは次の十港湾だけ。

①ナホトカ②アレクサンドロフスク・サハリンスキー③レィド・マカリョフスキー（レィド・ドゥエ）④オクチャブリスキー（旧名・南土威）⑤シャフチョルスク（塔路）⑥ウグレゴルスク（恵須取）⑦ホルムスク（真岡）⑧ネベリスク（本斗）⑨レィド・マカロワ（知取）⑩レィド・ポロナイスク（敷香）＝「レィド」は「泊地」のことで、沖積みの港湾。

つぎに実現の可能性は別として、開設について申請書を提出すべき日ソ両国の窓口は、次の二カ所である。

日本側は「ジャパン・ナホトカ・ライン共同事務所」（東京都千代田区一ツ橋、パレスサイドビル内）。ソ連側は「ソ連極東国営海洋船舶公社」（ウラジオストク）。

Q ジャパン・ナホトカ・ライン共同事務所とは？。

A ＪＮＬと略称する。日本とソ連間との定期航路に配船権をもつ飯野海運、川崎汽船、山下汽船の三社で設立された対ソ窓口の事務所である。このＪＮＬとソ連国営海洋船舶公社（モルフロートＭＯＲＦＬＯＴ）との間で、一九五八年六月三日に調印された「日本国とソビエト社会主義共和国連邦との諸港間の定期航路開設に関する協定」に基づいて、日本とソ連間の航路は開設された。そこで一九五八年六月以来、日本側はＪＮＬ、ソ連側はモルフロートが配船している。

Q 航路を開設するには、具体的に何を考慮、また調査、実施しなければならないか？。

A まずソ連側との商品の商談が成立していることである。この売買契約にさいして輸出入港が定められるので、ソ連の取引相手との話合いが必要だ。また輸出入港の指定には、ソ連側が日本側希望港に難色を示したとき、他の港に変更することも考慮にいれておかねばならないだろう。

Q 成立する条件は？。

A 第一に荷動きの見通しである。荷物量が多ければ多いほどよいのは当然のこと。最低五百ﾄﾝは必要だが、そのときＪＮＬでは「ソ連船の配船を考慮してもよい」といっている。

Q 北海道として、ソ連側が受入れる可能性のある方法に、どのようなものがあるか？。

A ソ連はバーター貿易が建前を念頭に入れてほしい。ソ連と商談をするとき、まずソ連の物資を買って、それから日本の物資を売るということになる。

いままでの実績をみると、カリ塩や水産物などを日本に運んできたソ連船の帰りを利用する方法が考えられる。比較的船そうが空いたまま帰っているからだ。これは貨物船だったり、冷凍船のこともあり、積載能力も二百ﾄﾝくらいから数万ﾄﾝまでいろいろである。

Q 注意せねばならぬことは？。

A 沿海地方の人口は百七十五万、サハリン州は六十二万を考慮にいれてほしい。消費物資の購入は、人口に比例するのだから。またソ連は消費物資の輸入を、四年前にくらべ現在はその約一〇％に激減するほどひかえている。特に本年は米国から約十億ﾄﾞもの小麦を購入しているので、そのシワよせがくるのではないかと心配されている。

だからといって、あきらめろというのではない。ソ連人は商談にさいしては、非常にシビアにやってくるものだ。ソ連相手には何事も十分に時間をかけ、根気よく交渉する心構えが絶対に必要だ。なにしろ十年前に打診したのが、今ごろになって購入の申し入れがあったこともあるのだから。

また、時間はかかるが、契約量は絶対に守るので安心できる。

（ご質問の方は札幌市中央区北四条西六丁目、毎日札幌会館内、社団法人北方圏調査会ＱアンドＡ係へ）

編集後記

★ タブロイドの〝北方圏ニュース〟ではとうてい収容しきれないほど、北方圏との〝かかわりあい〟のあることがらがふえてきた。それと会員はもちろん、広く道民の方々にも読んでいただき、北方圏諸地域の事情を認識し、国際化時代に対処する知識と心がまえをつくることに、いささかでもご協力できたらという気持で、季刊誌〝北方圏〟を発行することに踏切りました。創刊号だけに、慣れない点、いたらぬ点など多々あろうかと思いますが、ご愛読をお願い申します。

★ チュメニの油田、ヤクーツクの天然ガスなどの導入の壮大なプロジェクトは、おおげさにいえば日本経済の将来を左右するほどの重要性をもっています。それだけに日本海の諸都市、特に港湾都市は大きな期待と希望をもっているようです。毎日新聞のご協力で東京、大阪の経済部はもちろん、関係支局、通信部から、現地の考え方や動きなどを〝北方圏に燃える日本列島〟として特集することができました。

★ カナダ・アラスカの特集も、美しいカラー写真とともに、北方圏諸国への距離をさらに縮めることでしょう。

★ ゴスプランの委員という地位にあるスパンダリヤンの論文は、ソ連と貿易をする考えをもっている人には必読のものといえましょう。ソ連当局の責任者の考え方がよくわかります。大変長い論文なので、残り半分は次号に譲らねばならなかったのは残念でした。

★ ソ連の諷刺マンガ〝クロコシール〟は、おもてむきできないソ連のなかのことを知るうえで、特に参考になるものと思います。北海道に紹介したのは、おそらく本誌が初めてだと思います。

★ 〝シベリアのマンモス〟は筆者が多年にわたり、ソ連の新聞、雑誌、その他を集積して一本にまとめたもので、シベリアのマンモスを知るうえで貴重なものでしょう。北大低温科学研究所のシベリア学術調査団員・山本教授（明大）の〝ヤクーチャの人たち〟や、エスキモーと膝をつきあわせて生活された小樽商大の宮岡助教授の〝エスキモーの教育〟とともに文化的なニオイがします。

★ 道内各界の文化人から、北方圏に関する随筆をたくさんいただきました。創刊号は執筆者のご協力で原稿が誌面にあふれるほどになり、積み残して発車しなければならなかったことをおわび申します。

★ 本誌についてのご批判やご意見がありましたらどしどしお寄せ下さるようお願いします。

北方圏（創刊号）
一九七二年十一月一日発行
（年四回発行）
定価 三〇〇円 送料八〇円
発行所 札幌市中央区北四条西六丁目
毎日札幌会館内
社団法人・北方圏調査会
電話 ㈹ 4141（内線641）
編集発行人 山中文夫
印刷所 株式会社藤田印刷所

本誌をご購読される方は、年契約にすれば割安になりますので、振替え用紙をご利用下さい。
送料は当会で負担いたします。

一カ年 一、一〇〇円
振替口座 小樽一八七六四

表紙のせつめい

表紙の写真は、カナダの首都オタワ。後ろのとがった建物は国会議事堂。中央の八十七尺の塔には五十三の鐘がおさまり、静かな音色をひびかせる。前広場には一九六七年、ピアソン首相（当時）が点じた〝希望の火〟が十二州の盾に囲まれて燃え続けている。

表紙は、毎号北方圏諸国の代表的な都市のカラー写真で飾ります。ご期待ください。



社団法人 北方圏調査会とは

1. 北方圏諸地域の総合リサーチ・センターです。
2. 北方圏に関する各種出版物を発行します。
3. 経済、文化などの委託調査に応じます。
4. 北方圏諸国へ調査視察旅行に案内します。
5. 毎月一回講演会を開催します。
6. その他、北方圏に関する各種の相談に応じます。

役員名簿

（50音順）

会長
堂垣内 尚弘 （北海道・知事）

長谷川 正治 （室蘭市・市長）

払込人・払加入負担金・常負通料者

払込票

口座番号 小樽 十万千百十番 1 8 7 6 4
加入者名 ※ 社団法人 北方圏調査会
金額 億千百十万千百十円 1 1 0 0
払込人住所氏名 ※（郵便番号 ）
料金 払込 特殊 円
備考
受付局日附印

記載事項を訂正した場合は、その箇所に証印してください。
各票の記載事項にまちがいのないことをお確かめください。

（郵政省）

払込人・払加入負担金・常負通料者

払込通知票

口座番号 小樽 十万千百十番 1 8 7 6 4
加入者名 ※ 社団法人 北方圏調査会
金額 億千百十万千百十円 1 1 0 0
払込人住所氏名 ※（郵便番号 ）
料金
備考
受付局日附印

文字は正確明りように、数字はアラビア数字を使ってお書きください。
各票の※印欄は、払込人において記載してください。

（郵政省）

社団法人　北方圏調査会とは

1. 北方圏諸地域の総合リサーチ・センターです。
2. 北方圏に関する各種出版物を発行します。
3. 経済、文化などの委託調査に応じます。
4. 北方圏諸国へ調査視察旅行に案内します。
5. 毎月一回講演会を開催します。
6. その他、北方圏に関する各種の相談に応じます。

役　員　名　簿　(50音順)

会　長

堂垣内　尚　弘　(北海道・知事)

副会長

渡　辺　善一郎　(毎日新聞北海道発行所代表取締役)

理　事

五十嵐　広　三　(旭川市・市長)
板　垣　武　四　(札幌市・市長)
伊　藤　義　郎　(㈱伊藤組・社長)
稲　垣　　祐　(小樽市・市長)
今　井　道　雄　(㈱丸井今井・社長)
太　田　寛　一　(ホクレン・会長)
樫　原　泰　明　(北海道・副知事)
川　瀬　英　雄　(北海道電力・常務取締役)
城戸崎　　彰　(北海道・開発調整部長)
佐　藤　健　二　(㈱北海鋼機・社長)
佐　藤　　貢　(㈱雪印乳業・相談役)
杉　本　栄　一　(道議会・議長)
田　中　香　苗　(アジア調査会・副会長)
東　条　猛　猪　(㈱北海道拓殖銀行・頭取)
長谷川　正　治　(室蘭市・市長)
浜　森　政　雄　(北海道漁業協同組合連合会・会長)
原　田　　鼎　(新日本製鉄室蘭製鉄所・常務取締役・所長)
広　瀬　経　一　(北海道商工会議所連合会・会頭)
本　間　　隆　(㈱北海道放送・社長)
三　浦　寅　夫　(㈱北海道瓦斯・常務取締役)
宮　野　嘉　吉　(北海道町村会・会長)
森　鼻　武　芳　(㈱北海道銀行・頭取)
矢　野　　康　(函館市・市長)
山　口　哲　夫　(釧路市・市長)
山　本　光　春　(毎日新聞社・社長)
山　谷　幸之助　(㈱王子製紙苫小牧工場常務取締役・工場長)

監　事

木　村　円　吉　(小樽商工会議所・会頭)
寿　原　九　郎　(㈱北洋相互銀行・会長)

事務局長

山　中　文　夫　(毎日新聞北海道)

編集後記

★タブロイドの〝北方圏ニュース〟ではとうてい収容しきれないほど、北方圏との〝かかわりあい〟のあることがらがふえてきた。それと会員はもちろん、広く道民の方々にも読んでいただき、北方圏諸地域の事情を認識し、国際化時代に対処する知識と心がまえをつくることに、いささかでもご協力できたらという気持で、季刊誌〝北方圏〟を発行することに踏切りました。創刊号だけに、慣れない点など多々ありますが申しわけありません。

★チュメニ・ツクの入口の壮観は、お本経済ほどのます。の諸都は大きっていい新聞の阪の経関係支現地の〝北列島〟とがでカナダも、美ともに距離をでしょゴスプ地位にンの論をする人にはましょ任者の

★

★

表紙のせつめい



表紙の写真は、カナダの首都オタワ。後ろのとがった建物は国会議事堂。中央の八十七尺の塔には五十三の鐘がおさまり、静かな音色をひびかせる。前広場には一九六七年、ピアソン首相（当時）が点じた〝希望の火〟が十二州の盾に囲まれて燃え続けている。

表紙は、毎号北方圏諸国の代表的な都市のカラー写真で飾ります。ご期待ください。

季刊誌「北方圏」の購読料は左記のとおりです。

年間（四回）　一、一〇〇円

送料（一回・八〇円）は当会負担いたします。

この欄に送金の明細および通信事項を御記入ください。

通　信　欄

送り先
（住所）

郵便番号　□□□－□□

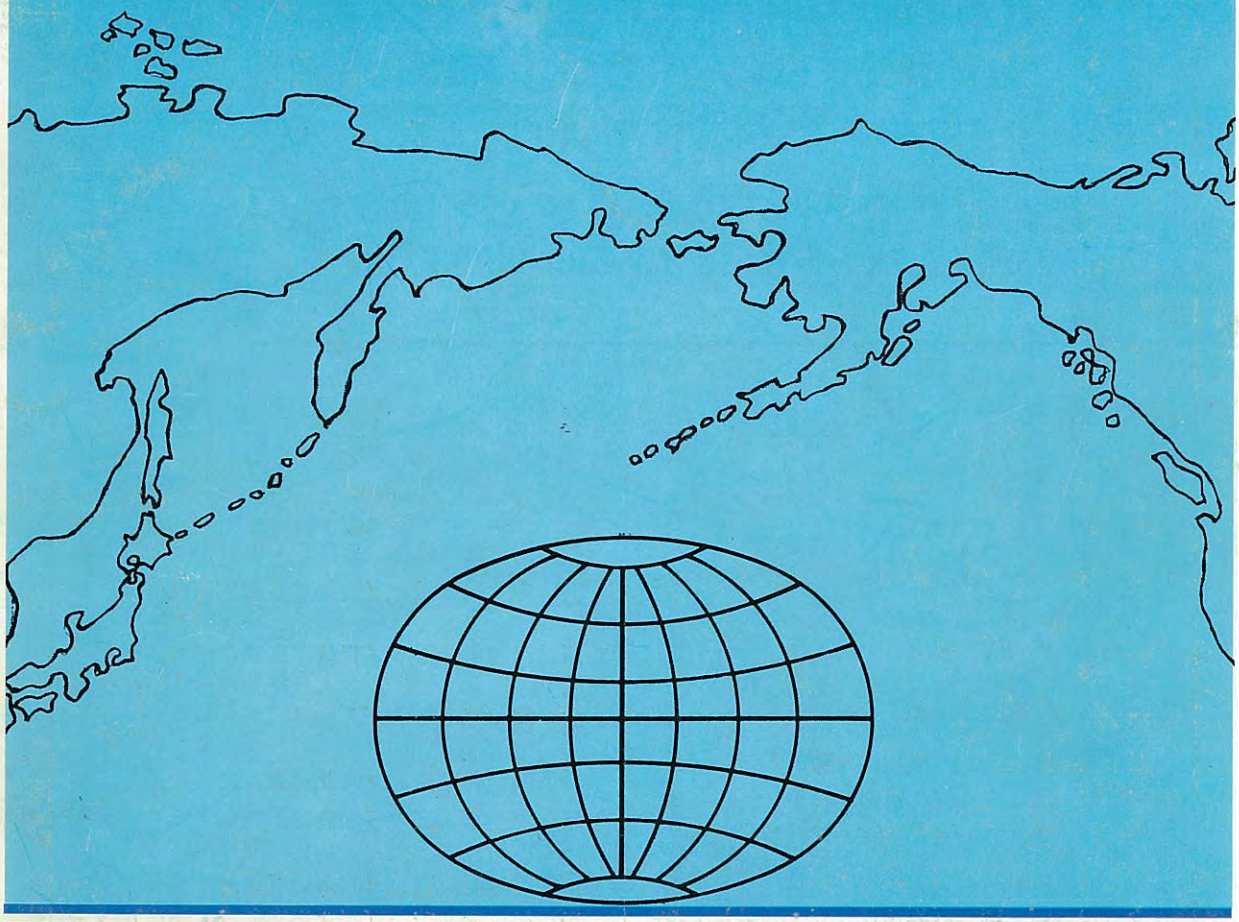
ふりがな

お名前

昭和四十七年十一月一日発行（創刊号）

北海道の将来を考える……毎日新聞

北方圏の開発こそ北海道の壮大なビジョンである。



毎日新聞社　社団法人北方圏調査会

定価三〇〇円